

〔19402046
基礎研究(B)〕

研究大学の学士課程に適した優秀学生プログラムの開発に関する調査研究

研究代表者

近田 政博

平成22年3月

研究大学の学士課程に適した優秀学生プログラムの開発 に関する調査研究

(課題番号 19402046)

平成19年度～平成21年度 科学研究費補助金 基盤研究(B)

成果報告書

2010年3月

研究代表者 近田 政博

(名古屋大学高等教育研究センター 准教授)

はじめに

本報告書は、平成 19～21 年度科学研究補助金基盤(B)「研究大学の学士課程に適した優秀学生プログラムの開発に関する調査研究」の成果をまとめたものである。この調査研究の趣旨は、アメリカをはじめとし、世界主要国におけるオナーズプログラムもしくはこれに類する特別教育プログラムが学士課程において果たす役割とその意義を明らかにすることである。そのための現地調査をオナーズ発祥の地であるイギリス、多くの大学で多様なプログラムが整備されているアメリカをはじめとして、カナダ、オーストラリア、中国、日本の大学において実施した。本科研で調査対象とした大学はそれぞれの国を代表する研究大学もしくは社会的評価の高い大規模総合大学である。いずれの調査においてもプログラムを担当する教職員から多大なご協力とご厚意を賜った。同時に、こうしたプログラムを設立・運営することのやりがいやご苦勞について率直なご意見を伺うことができたのは、高等教育学を専攻する研究者として望外の喜びである。お世話になった関係者の方々に記して深謝したい。

今日の世界の大学教育では「オナーズ」という用語の意味は一様ではなく、国・地域や大学ごとにさまざまな意味が込められている。イギリスやオーストラリアの大学の学士課程において、オナーズとは成績優秀者に与えられる「優等学位」という称号を指すのが一般的である。また、英連邦諸国（オーストラリア、カナダなど）では、通常の学士課程（3 年制）に 1 年間の優等学位課程を上乗せすることにより得られる学位名称として用いられることもある。本稿が検討対象とするのは、このような学位名称や在学延長課程としてのオナーズではなく、通常の学士課程の年限内において提供される優秀学生のための教育プログラムである。アメリカ合衆国の大部分のオナーズプログラムがこれに該当し、近年に至っては、その他の国々も同様のプログラムを設置する大学が増えている。

本調査の結果わかったことは、オナーズプログラムはさまざまな可能性を秘めているということである。学生の側からみれば、一般の学部では習得するチャンスが少ないリーダーシップなどの社会スキルや国際交流を重点的に体験することができる。何よりも、低年次学生の学習意欲を飛躍的に高める可能性を秘めている。また、公立大学の授業料で私立の小規模カレッジと同等の手厚い学習支援が得られるというメリットがある。大学の側にとっては、プログラムを運営するのに一定のコストを要する一方で、より優秀な学生を自大学に獲得し、自大学の大学院につなぎとめる効果を期待できる。さらに、プログラムの評価が高まれば、大学の名声を高めることにもつながるというメリットを得られる。こうした点から、アメリカのオナーズプログラムは準トップクラスの公立総合大学にとって有効な経営戦略となっている。

現在のところ、日本においてオナーズプログラムを設置している大学はきわめて少数である。ただし、九州大学の 21 世紀プログラムを嚆矢とし、高い学習意欲を備えた学生の

ための特別教育プログラムが立命館大学や愛媛大学などにおいて活発に実施されるようになってきていることは注目に値する。同時に、いくつかの課題も明らかとなった。最も大きな問題は、こうした学士課程教育全体の質保証にこうしたプログラムがどの程度寄与するかという点である。学生が入学後に自主的に応募する形をとっている立命館大学や愛媛大学の事例をみると、正課外活動を包括した広義の学士課程教育の質保証にとって、これらのプログラムは一定の機能や効用を持ちうるかもしれない。しかし狭義の意味、つまり単位の質保証や学位の質保証のような正課としての学士課程教育の質保証には必ずしも直結しない。本科研で調査した日本の事例は、九州大学の 21 世紀プログラムのように通常の学部別の学士課程とは別トラックとして設けられたものや、あるいは学習量や活動量を増大させた「上乘せ型」であり、現行の学士課程教育の「本体」を根本的に再編することによってつくられたわけではない。つまり、こうしたプログラムをつくったからといって、学士課程教育全体を質保証したことにはならないという点に留意する必要がある。

日本の事例が抱えるもう一つの問題は、こうした特別教育プログラムの持続可能性である。日本の事例はいずれも特定の教職員（専任教員や客員教授、担当職員など）の献身と熱意に支えられており、現場に大きな裁量を与えられている反面、担当者の負担は小さくない。プログラムを長期的に持続し、発展させるためには、大学全体で組織的にプログラムを支えていく仕組みが求められる。

本科研の実質的なメンバーは研究代表者に加え、鳥居朋子氏（立命館大学教授）、佐藤万知氏（青山学院大学客員研究員／オックスフォード大学大学院生）、中島（渡利）夏子氏（東北大学大学院生）の計 4 名で構成し、中国調査時に入手した資料の日本語訳は沈晶晶氏（名古屋大学大学院生）が担当した。報告書の編集作業は岡田久樹子氏（元名古屋大学高等教育研究センター・研究アシスタント）に依頼した。これまで日本でほとんど知られていなかったオナーズプログラムについてこれだけの事例を収集できたのは、メンバー各位の知的好奇心の旺盛さに負うところが大きい。

最後になるが、研究代表者が勤務する名古屋大学では文部科学省からの委託による国際会議「アジア域内の大学間交流と東アジア共同体構想」を 2010 年 3 月 7 日に実施し、その中で「アジア地域の将来を担う国際人材像について－オナーズプログラムでどのような人材を育てるか－」をテーマとするパネルセッションを行うことになった。たまたま研究代表者はこのセッションの司会を担当することになったので、本科研から得られた知見を提供し、日本の大学がこうしたプログラムを運営することの意義やノウハウについて国内外の専門家と意見交換できればと考えている。

2010（平成 22）年 3 月 1 日
研究代表者 近田 政博
（名古屋大学 准教授）

目 次

はじめに	i
研究組織	1
研究経費	1
研究成果	1
第 1 部 諸外国の大学における優秀学生のための特別プログラム	
イングランドの優秀学位と	
アメリカのオナーズプログラムに関する考察	佐藤 万知 9
トロント大学における優秀学位とプログラム	鳥居 朋子 19
スタンフォード大学におけるオナーズプログラムの特質	中島 (渡利) 夏子 35
ワシントン大学におけるオナーズプログラム	近田 政博 55
グリフィス大学におけるオナーズカレッジ	鳥居 朋子 67
上海交通大学における「連読班」制度.....	近田 政博 81
付録資料翻訳	沈 晶晶 88
北京師範大学における「励耘班」制度.....	近田 政博 93
付録資料翻訳	沈 晶晶 100
第 2 部 日本国内の大学における優秀学生のための特別プログラム	
九州大学の 21 世紀プログラム	近田 政博 109
立命館大学のオナーズプログラム	近田 政博 119
愛媛大学におけるリーダーズスクール(ELS)	近田 政博 127
第 3 部 総合考察	
学士課程教育の質的向上におけるオナーズプログラムの役割.....	135
(第 14 回日本高等教育学会における研究発表配布原稿)	
近田 政博、鳥居 朋子、佐藤 万知、中島 (渡利) 夏子	
資料編	
学士課程教育の質的向上におけるオナーズプログラムの役割.....	157
(上記学会における研究発表 PPT ファイル)	
近田 政博、鳥居 朋子、佐藤 万知、中島 (渡利) 夏子	
オナーズ教育の概要 (「全米大学オナーズ協議会」ウェブサイトから和訳)	175
国際交流推進会議「アジア域内の大学間交流と東アジア共同体構想」の趣旨とポスター	189

研究組織 (2010年3月現在)

研究代表者	近田 政博	名古屋大学	高等教育研究センター	准教授
連携研究者	鳥居 朋子	立命館大学	教育開発推進機構	教授
	夏目 達也	名古屋大学	高等教育研究センター	教授
研究協力者	佐藤 万知	青山学院大学	ヒューマン・イノベーション研究センター 客員研究員	
		オックスフォード大学	大学院教育学研究科	大学院生
	中島 (渡利) 夏子	東北大学	大学院教育学研究科博士後期課程	大学院生

研究経費

2007年度	直接経費 360万円	間接経費 108万円	計 468万円
2008年度	直接経費 250万円	間接経費 75万円	計 325万円
2009年度	直接経費 250万円	間接経費 75万円	計 325万円

研究成果 (2010年3月現在)

【学会発表】

佐藤万知・松田岳士「授業における ICT の活用方法の提案のための授業像分析」日本教育工学会第 24 回全国大会、上越教育大学、2008 年 10 月 13 日。

佐藤万知・松本喜以子・渡辺雄貴「FD 促進のための 3 分間コンテンツの開発」日本教育工学会研究会、徳島大学、2009 年 5 月 16 日。

佐藤万知「FD における教育工学と高等教育学のクロスロード」日本教育工学会第 25 回全国大会、東京大学、2009 年 9 月 19 日。

Sato, M., Matsumoto, K., “The use of blended learning approach in the faculty development project”, The 34th Annual Professional and Organizational Development Network Conference, Houston, 30 October, 2009. (Poster session)

近田政博・夏目達也「大学院生を対象とした大学教授法研修会の可能性と課題」第 10 回日本高等教育学会、名古屋大学、2007 年 5 月 26 日。

近田政博「名古屋大学における大学院生向けの大学教員準備プログラム」第 29 回大学教育学会ラウンドテーブル、東京農工大学、2007 年 6 月 9 日。

近田政博「高等教育研究における開発型アプローチの可能性と課題」日本教育工学会シンポジウム、東京工業大学、2007年6月16日。

近田政博「大学院における研究指導の実践手法に関する考察ーメルボルン大学研究指導ハンドブックの日本への適用可能性」第11回日本高等教育学会、東北大学、2008年5月24日。

近田政博・鳥居朋子・佐藤万知・中島（渡利）夏子「学士課程教育の質的向上におけるオナーズプログラムの役割」日本高等教育学会第14回大会、長崎大学、2009年5月23日。

近田政博「名古屋大学における学生論文コンテストと論文書き方講座の取り組み」大学教育学会第31回大会ラウンドテーブル、首都大学東京、2009年6月6日。

鳥居朋子「豪州の大学におけるIRと教育改善に関する考察」、日本高等教育学会第11回大会、東北大学、2007年5月24日。

鳥居朋子・浪川幸彦・夏目達也・近田政博・中井俊樹・齋藤芳子・黒田光太郎「大学におけるカリキュラム改革のための支援ツール開発」、日本高等教育学会第10回大会、名古屋大学、2007年5月27日。

鳥居朋子「戦後改革期における大学の組織運営と学長のリーダーシップー上原専祿と和田小六の『経験』を通してみえるもの」、日本教育学会第67回大会、佛教大学、2007年8月30日。

鳥居朋子「大学におけるデータに基づく教育改善システムの構築にむけた組織的連携ー米国・豪州の事例を手がかりに」、日本教育制度学会第15回大会、東京学芸大学、2007年11月10日。

羽田貴史・米澤彰純・中島（渡利）夏子・夏目達也・加藤かおり「FD（教員職能開発）ネットワーク化の動向と課題」日本高等教育学会、東北大学、2008年5月24日。

中島（渡利）夏子「米国の研究大学における学士課程教育の新動向ー1990年代のボイヤー委員会の報告の分析を中心に」大学教育学会、目白大学、2008年6月8日。

水原克敏・足立佳菜・奥山典子・村田浩輔・中島平・中島（渡利）夏子・鈴木学「TAと共に創る学生参加型授業の開発ー大学教養教育における大規模授業の実践」日本学校教育学会、白百合大学、2008年8月3日。

中島（渡利）夏子「研究大学における学士課程教育ー米国スタンフォード大学の改革事例を参考に」、大学教育学会、東京農工大学、2007年6月9日。

中島（渡利）夏子「学士課程学生の研究を推進する教育プログラムー米国スタンフォード大学の事例に注目して」東北教育学会、東北大学、2008年3月1日。

【各種研究会、各大学の研修活動、招聘講演など】

近田政博「名大生の現状と学習支援のあり方」第1回平成19年度名古屋大学全学教育担当教員FDでの学内研修講演、2007年4月3日。

近田政博「TA のみなさんへのメッセージ」平成 20 年度名古屋大学大学院教育発達科学科
大学院ガイダンスでの学内研修講演、2007 年 4 月 5 日。

近田政博「新入生の学習参加度を高めるための方法－『名古屋大学新入生のためのスタ
ディティップス』の開発と普及」石川県立大学での招聘講演、2007 年 7 月 25 日。

近田政博「学生の参加度を高めるための授業ノウハウを共有する」愛知東邦大学での招聘
講演、2007 年 8 月 1 日。

近田政博「大学院における研究指導をどうするか－修士論文作成の ABC」愛知淑徳大学で
の招聘講演、2007 年 10 月 9 日。

近田政博「学生の授業参加意欲を高めるための実践方法」名古屋市立大学での招聘講演、
2007 年 11 月 2 日。

近田政博「大学での学びを促進するための戦略－新入生のためのスタディティップスの開
発を通して」愛知産業大学での招聘講演、2008 年 3 月 6 日。

近田政博「授業デザインの方法論－基本要素から評価まで」大阪樟蔭女子大学シンポジウ
ムでの招聘講演、2008 年 3 月 27 日。

近田政博「FD 活動の意義－『授業デザイン』を要素分解する」静岡文化芸術大学での招
聘講演、2008 年 4 月 10 日。

近田政博「日本の学校教育カリキュラムにおけるジレンマ」イラン教育省での招聘講演、
2008 年 4 月 27 日。

近田政博「シラバスの作り方」イラン高等教育省での招聘講演、2008 年 4 月 28 日。

近田政博「学生を授業にどう巻き込むか」名古屋市立大学 FD での招聘講演、2008 年 7
月 18 日。

Chikada, M., “The Development in Teaching and Learning at Japanese Research
Universities”, AC21 International Forum, North Carolina State University, 29
July, 2008.

近田政博「学生を授業にどう巻き込むか」北里大学新任教員研修での招聘講演、2008 年 9
月 3 日。

近田政博「大学院の研究指導に関する課題と対応策」北陸先端科学技術大学院大学 FD 講
演会での招聘講演、2008 年 10 月 30 日。

近田政博「FD センターの可能性」関西大学 FD 講演会での招聘講演、2008 年 12 月 8 日。

Chikada, M., “Support for Teaching and Learning at Nagoya University”, International
Conference on Business, Economics, and Information Technology, Nagoya
Hilton Hotel, 9 March, 2009.

近田政博「新入生とどう向き合うか－名大版スタディティップスの開発を通して」同朋大
学での招聘講演、2009 年 3 月 19 日。

近田政博「研究指導を成功させる方法－学位論文の作成をどう支援するか」関西国際大学
での招聘講演、2009 年 3 月 25 日。

近田政博「あなたが大学で学ぶことの意味」名古屋市立向陽高等学校での招聘講演、2009年4月16日。

近田政博「学生の学習意欲を高めるための授業ノウハウ」名古屋市立大学での招聘講演、2009年7月9日。

近田政博「GPA 導入に伴う課題と期待できる効果」名古屋大学大学院文学研究科での学内研修講演、2009年7月29日。

近田政博「どのような授業評価が望ましいのか」四日市看護医療大学での招聘講演、2009年8月25日。

近田政博「学習意欲を高めるための授業ノウハウ」北里大学新任教員研修会での招聘講演、2009年9月3日。

近田政博「芸術系大学におけるFD 導入のあり方」愛知県立芸術大学での招聘講演、2009年11月12日。

近田政博「プレゼンテーションの基本」名古屋大学附属病院看護部での学内研修講演、2009年11月27日。

近田政博「大学教育における評価のあり方を考える」筑波大学での招聘講演、2009年12月7日。

近田政博「名古屋大学における教育・学習支援教材の開発」桜美林大学での招聘講演、2009年12月22日。

近田政博「大学院における研究指導のあり方」星城大学での招聘講演、2010年2月20日。

鳥居朋子「IR の機能とデータに基づく教育改善システムー米国の大学における先駆的な取り組みから」立命館大学教学部研修会、2007年10月9日。

鳥居朋子「米国・豪州の大学における IR（機関調査）部門の現状と課題」桜美林大学 大学教育研究所公開研究セミナー、2008年1月24日。

鳥居朋子「大学における IR の組織的機能とデータに基づく教育改善システムー諸外国の先駆的な事例を手がかりに」国立教育政策研究所・センター研究プロジェクト研究会、名古屋大学高等教育研究センター、2008年2月16日。

鳥居朋子「高等教育マネジメントにおける IR の組織的機能とデータに基づく教育改善ー米・豪の事例から」九州大学 大学評価情報室・大学経営支援研究会、2008年7月24日。

鳥居朋子「豪州高等教育機関における IR と教育改善ーシドニー大学とメルボルン大学の実践」私学高等教育研究所第37回公開研究会、アルカディア市ヶ谷、2008年8月1日。

鳥居朋子「大学の教学マネジメントにおける IR」大学コンソーシアム京都・第7回SDフォーラム分科会講師、京都キャンパスプラザ、2009年10月18日。

中島（渡利）夏子・鈴木学「米国の研究大学における学士課程教育の新動向ースタンフォード大学の学士課程教育改革の事例に注目して」平成19年度大学院教育改革支

援プログラム「実践指向型教育専門職の養成プログラム」(東北大学教育学研究科)
「大学院生中心プロジェクト型共同研究」 成果報告会、2008年4月19日。

奥山典子・村田浩輔・足立佳菜・鈴木学・中島(渡利)夏子・小野あずさ・石田真理子・
遠藤千尋「大学の授業におけるTA活用システムに関する研究」平成20年度大
学院教育改革支援プログラム「実践指向型教育専門職の養成プログラム」(東北大
学教育学研究科) 「大学院生中心プロジェクト型共同研究」 成果報告会、2009
年2月21日。

【書籍】

中井俊樹編『大学教員のための教室英語表現 300』アルク、2008年12月、94頁。(近田
政博は執筆者の一人)

近田政博『学びのティップス 大学で鍛える思考法』玉川大学出版部、2009年11月、102
頁。

夏目達也・近田政博・中井俊樹・齋藤芳子『大学教員準備講座』玉川大学出版部、2010
年3月、224頁。

【ハンドブック】

名古屋大学高等教育研究センター編『ティップス先生からの7つの提案 教務学生担当職
員編』ダイテック(オンデマンド印刷)、2007年5月、12頁。(近田政博と鳥居
朋子は開発スタッフ)

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/studentaffairs/> (2010年2月13日検索)

名古屋大学高等教育研究センター編『名古屋大学新入生のためのスタディティップス
2006』『名古屋大学新入生のためのスタディティップス 2007』『名古屋大学新入
生のためのスタディティップス 2008』ダイテック(オンデマンド印刷)、2006
年3月、2007年3月、2008年3月。(近田政博と鳥居朋子は執筆者)

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/stips/> (2010年2月13日検索)

名古屋経済学教育研究会編『経済学英語ハンドブックー授業で使える例文集』2009年3
月、ダイテック(オンデマンド印刷)、42頁。(近田政博はプロジェクトマネー
ジャー)

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/english_handbook.pdf

(2010年2月13日検索)

【雑誌論文】

近田政博「研究大学の院生を対象とする大学教授法研修のあり方」『名古屋高等教育研究』
第7号、2007年3月、147-167頁(査読付)。

近田政博「社会人大学院生を対象とする研究方法論の授業実践」『名古屋高等教育研究』第

8号、2008年3月、73-94頁（査読付）。

近田政博「大学院の研究指導方法に関する課題と改善策—名古屋大学教員に対する面接調査結果より」名古屋大学高等教育研究センター編『名古屋高等教育研究』第9号、2009年3月、93-111頁（査読付）。

安田淳一郎・近田政博「教育改善活動に参加する学生の意識変化—名大物理学教室における学生教育委員会の事例」名古屋大学高等教育研究センター編『名古屋高等教育研究』第9号、2009年3月、113-132頁（査読付）。

近田政博・鳥居朋子「学士課程教育の質保証におけるオナーズプログラムの役割」大学教育学会編『大学教育学会誌編』第32巻第1号、2010年5月（査読付採択済：全国学会誌）。

鳥居朋子・夏目達也・近田政博・中井俊樹「大学におけるカリキュラム開発のプロセスに関する考察—Diamondのモデルとその適用事例を中心に」『高等教育研究』第10集、日本高等教育学会、2007年5月、217-235頁（査読付：全国学会誌）。

鳥居朋子「米国の大学におけるカリキュラムマネジメント—ワシントン大学シアトル校のデータに基づく教育改善システム」『季刊教育法』第154号、2007年9月、54-65頁。

鳥居朋子「豪州シドニー大学における『原理と実践』に基づく教育改善の取り組み」『鹿児島大学教育学部紀要：教育科学編』第59巻、2008年3月、297-314頁。

鳥居朋子「質保証の枠組みにおける豪州大学のインスティテューショナル・リサーチと教育改善—シドニー大学およびメルボルン大学の事例を通して」『大学評価・学位研究』第9号、2009年3月、45-63頁。

鳥居朋子「高等教育に関する研究動向—質保証システムに注目して」『教育制度学研究』日本教育制度学会、第16号、2009年11月、140-145頁。

中島（渡利）夏子「米国の研究大学における1990年代以降の学士課程カリキュラムの特徴—研究に基づく学習を重視するスタンフォード大学の事例から」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第57集第1号、2009年1月、173-189頁。

【分担執筆、雑誌記事等】

近田政博「大学は新生にどんなメッセージを伝えればよいのか？—私が『学びのティップス 大学で鍛える思考法』を書いた理由」『大学と学生』第77号、日本学生支援機構編、2010年、16-20頁。

中島（渡利）夏子「研究大学の学士課程教育における Undergraduate Research Program—1990年代以降のスタンフォード大学の事例に注目して」平成19年度大学院教育改革支援プログラム 実践指向型教育専門職の養成プログラム『プロジェクト型共同研究成果報告書』2008年3月、107-119頁。

中島（渡利）夏子・中島平「POD Network 調査報告」（東北大学高等教育開発推進センタ

一『文部科学省特別教育研究経費プロジェクト 国際連携を活かした高等教育システムの構築 最終報告書』2008年3月、232-240頁。

中島(渡利)夏子・中島平「国際連携プロジェクトの海外研修員活動とその成果」東北大学高等教育開発推進センター『研究・教育のシナジーとFDの将来』東北大学出版会、2008年3月、17-30頁。

中島(渡利)夏子「アメリカにおけるFDとそのネットワーク」東北大学高等教育開発推進センター編『ファカルティ・ディベロップメントを越えてー日本・アメリカ・カナダ・イギリス・オーストラリアの国際比較』東北大学出版会、2009年3月、23-58頁。

【翻訳】

リチャード・ジェームス&ガブリエル・ボールドウィン、(翻訳) 近田政博『研究指導を成功させる方法ー学位論文の作成をどう支援するか』ダイテック、2008年1月、61頁。

ミシェル・マリンコビッチ、(翻訳) 中島(渡利)夏子「学士課程教育を重視する研究大学の時代におけるFDースタンフォード大学と全米の動向の動向から」東北大学高等教育開発推進センター『研究・教育のシナジーとFDの将来』東北大学出版会、2008年3月、33-50頁。

第1部 諸外国の大学における優秀学生のための特別プログラム

イングランドの優等学位とアメリカのオナーズプログラムに関する考察
ーオックスフォード大学とスワスマア・カレッジの事例を通してー

佐藤 万知

1. はじめに
2. イングランドの学位体系
3. オックスフォード大学の優等学位
4. アメリカへの伝播ースワスマア・カレッジの事例
5. イングランドにおける優等学位の現状
6. まとめ

調査日：2009年9月24日～12月16日

訪問先：オックスフォード大学

調査者：佐藤万知

調査日：2009年3月13日

訪問先：エジンバラ大学

調査者：佐藤万知

調査日：2009年3月16日～3月19日

訪問先：オックスフォード大学

調査者：佐藤万知

1. はじめに

高い潜在能力を持つ学力上位層の学生に対して、一層の動機づけや知的刺激を与え、彼らの学習意欲を高めるための取組として、欧米の大学では「オナーズプログラム」といういわゆる優秀学生のための特別プログラムの提供が広がっている。「オナーズプログラム」は、「大衆化」した大学の中に「卓越性」を追求する特別トラックを設けることで大衆化と卓越性の両立を図ろうとするものだと考えられており（近田・鳥居・中島・佐藤, 2009）、その原型は、イギリスの大学にあると考えられている。しかし、イギリスにおける「オナーズ」とは、学士課程修了試験の成績が優秀な学生に与えられる「優等学位」という学位区分を意味し（吉川, 2001）、優秀学生を対象とした特別な教育プログラムという意味ではない。それではどのようにしてイギリスの学位制度が他国で「オナーズプログラム」へと発展したのだろうか。また、イギリスの学位制度の何が他国の高等教育機関にとって特徴的だったのか。本稿では、これらの点について考察する。

この問題を考えるにあたって留意しなければならないのは、イギリスの学位の実態はきわめて複雑で、容易に一般論として語ることはできないということである。その背景にはイギリスの教育制度がイングランド、ウェールズ、北アイルランド、スコットランドの4つの地域で異なり、また授与する学位の種類と名称は個々の大学・高等教育機関が独自に定めていることがあげられる（吉川, 2001）。そこで、本稿ではイングランドに焦点をあてることとする。また、学位区分、特に優等学位に関する歴史については全体を俯瞰する研究報告がなく（Winter, 1993, p.365）、個別の大学についての資料を参照せざるを得ない。そこで、本稿ではイギリスの優等学位制度の基礎であると考えられているオックスフォード大学（The Burgess Group, 2007, p.14）を事例として取り上げる。優等学位の他国への伝搬については、オックスフォード大学の優等学位制度をもとにして独自のオナーズプログラムを開発したアメリカのスワスマア・カレッジを取り上げる。

本稿は4つのセクションから構成されている。まず、イングランドの学位体系についてまとめる。次に、オックスフォード大学で優等学位が始まった経緯と教育体制の特徴についてまとめる。3番目にオックスフォード大学の優等学位の区分を持った学士課程教育制度がどのようにしてスワスマア・カレッジに伝搬したのか、なぜ伝搬したのかを考察する。最後に、イングランドにおける優等学位の現状と課題について考察し、まとめを行う。

2. イングランドの学位体系

イギリスの高等教育レベルの学業に対する資格は、学位（degrees）とその他の資格（certificates, diplomas など）に大別されている。学位に関する枠組みや学位授与に関する基準・規定などの詳細は高等教育品質保証機構（Quality Assurance Agency for Higher Education, QAA）によって定められている。QAAは1997年にイギリス全土の高等教育

の水準を監視するために設置された。個々の資格が表す内容は QAA の高等教育資格枠組み (Framework for Higher Education Qualification) に記載されている。

イングランドの学位は通常フルタイムで学士課程 3 年、修士課程 1-2 年、博士課程 3 年という体系になっている。例外としては、医歯学、獣医学の課程では 5 年または 6 年の学修を課している。またサンドイッチコースというインターンシップ等の実務体験 1 年を含むプログラムや外国語学部や国際関係学部などで 1 年間の海外研修を含むプログラムの場合、学士課程を修了するのに 4 年かかる場合もある。代表的な学士学位には Bachelor of Arts (BA)、Bachelor of Science (BSc) のほか、学部名を冠した Bachelor of Education (BEd) などがある。

学士学位はさらに優等学位と普通学位とに区分される。両者の相違は課程の内容によるものではなく、修了試験の結果に応じて、所定の成績を収めた者に優等学位が、優等学位の水準に達していない者に普通学位が授与されるのが一般的である (吉川、2001)。優等学位そのものにも 1 級、2 級 (2 級の上または下)、3 級の 4 段階の区別があり、学生の達成度を表している。大学院課程への入学や奨学金の獲得のためには、上級の優等学位 (1 級もしくは 2 級の上) を取得していることを要求されることが多い。優等学位という階級を持った学位制度はイギリスの高等教育制度が生み出した重要な制度で、約 200 年前にオックスフォード大学で始まったとされている (The Burgess Group, 2007, p.15)。

3. オックスフォード大学の優等学位

オックスフォード大学はイギリス最古の大学である。明確な創立年は不明であるが、11 世紀から 12 世紀中頃までの間に徐々に大学として形成されていった (Green, 1974)。中世オックスフォード大学では、神学を中心とした教育が行われ、文法、修辞学、論理学、数学、自然学、道徳哲学、形而上学、歴史学などが教えられていた。学位には学士学位、修士学位、博士学位があり、学位の取得には幾度かに渡る口頭試験に合格しなければならなかった。19 世紀当時、博士学位の習得までに約 16 年かかったといわれている (Green, 1974)。

学士学位に優等学位と普通学位の区分ができたのは 1800 年の学位試験制度改正の際である。オックスフォード大学の 18 世紀は大学停滞の時代といわれ、教育水準の低下が問題になっていた (小泉, 2007, p.10)。この問題を解決するために大学教育の改革を精力的に遂行していた学寮長達は、教育水準低下の一因が当時の試験制度にあると考え、強い意向の下、試験学則を改正した。改正前の口頭試験は閉ざされた部屋の中で試験官と学生のみで実施されていたため、形式的になり試験としての機能を失っており (小泉, 2007 ; Green, 1974)、学生は試験直前に予想問題と回答を入手して試験対策をするだけになっていたのだ (Green, 1974, p.87)。1800 年の改正により、他の教員や学生の前で口頭試験を実施する公開試験制度が導入された (Curthoys, 1997)。1800 年の試験規則によれば、試

験は6人の試験官が毎日6人の受験生に対して口頭面接試験を行うこととされ、試験に出席した学生はあらかじめ他の受験生の試験に出席することを求められた（小泉，2007，p.12）。

公開試験の導入と同時に、学生が自らの力量を試して「榮譽」（オナーズ）を競う優等学位試験制度も導入され、優等学位試験と普通学位試験という二つの異なる試験が準備されるようになった。優等学位を目指す学生には普通学位よりも広範囲の課題が課せられ、「榮譽」を獲得した学生の氏名は大学から公表された（小泉，2007，p.13）。優等学位試験制度はまず1802年に古典学で始まり、1807年に数学、1850年に数学、法学・近代史、1870年に神学、1872年に法学というように拡大していった（安原，2005，p.96）。安原（2005，p.95）によると優等学位試験制度は「学位試験に顕彰的・競争的性格を導入することで、学生に勉学へのインセンティブを与えようとした」のである。優等学位が導入された当初は、試験に不合格だった場合の不名誉を恐れ、優等学位試験に挑む学生数は少なかったが¹、その後、1809年に優等学位に第1級、2級、3級という異なる階級区分ができたことによって優等学位の取得を目指す学生も増加した（Curthoys，1997）。19世紀半ばには、学生数と学位試験の種別の増加に伴い、口頭試験は一部筆記試験になり、採点は外部試験官によってされるようになった。この結果、間接的に指導教官も評価の対象になるようになった。留意すべきは、19世紀半ばごろまでオックスフォード大学は聖職者や貴族階級、地主階級の後継者の養成機関であったということである（潮木，2004）。つまり、もともと社会的地位の高い学生にとって優等学位を取得することはより有利な条件で社会に出るというような意味合いはなく、「榮譽」のためだけに優等学位をめざす学生が存在したと考えられる（Curthoys，1997）。しかし1820年頃までには「榮譽」獲得の経歴的有効性が徐々に社会に浸透し（小泉，2007，p.13）、教授達も自らの学生が「榮譽」を獲得することの意義を認識するようになり、指導者としての役割を真剣に受け止めるようになった（Green，1974，p.136）。こうして教育水準は徐々に向上していった。

さて、公開試験制度と優等学位の導入が教育水準の向上につながったのは「顕彰的・競争的性格の導入」だけではなく、もともとオックスフォード大学が持っており現在も続いているカレッジ制度とチュートリアル制度との組み合わせによって生まれた学習環境が重要な役割を果たした考えるべきだろう。まず、オックスフォード大学の学生が必ず所属しなければいけないカレッジとは、学生にとって生活の場、社交の場、学習の場であり、学生生活の中心であるといっても過言ではない。同大学には2009年度現在、37カレッジが存在する。それぞれのカレッジにはさまざまな専攻の学生とフェローと呼ばれる教員が所属している。カレッジには通常、学生寮、食堂、図書館、学生のためのコモンルーム、セミナー教室などがある。スポーツなどの様々なイベントはカレッジ単位で行われるため、学生にとってカレッジは学生生活の中心となっており、また、学士課程の教育は学部にお

¹ 1802年に2名、1805年に1名が優等学位を授与された（Green，1974，p.136）。

ける講義とカレッジにおける講義やチュートリアルによって行われるため、教育の場としても重要な役割を果たしている。従って多くの学生は大学生活の大半をカレッジで過ごすこととなり、競争をする仲間や助け合う仲間を作るには最適な環境となっている。

各カレッジで実施されるチュートリアルは1科目週に1度、1時間程度で、1～3人の学生に対して1人のチューターが担当になる。チューターは学生の専攻分野を専門とし、博士号をもつ学者でカレッジにフェローとして所属をしており、著名な学者や教授なども含まれる (Palfreyman, 2001)。通常、学生はチューターが決めた課題について2000～3000語のエッセイを事前に提出し、チュートリアルで指導を受ける。チューターは学生の進捗状況に応じて次の課題や課題図書、指導方法を定めることができる。しかし、学生の成績は年に1度実施される試験によって決まるため、チュートリアルは試験対策を視野に入れて行われることが多い (Kenneth, 1982)。

それでは19世紀に導入された公開試験制度と優等学位は、カレッジ制度とチュートリアル制度にどのような影響を及ぼしたのだろうか。まず、カレッジはより多くの学生に優等学位を取得させるため、指導をするフェローの審査をより厳しくするようになった。その結果、クライストチャーチ (Christ Church) やオリエルカレッジ (Oriental College) などは著名な学者がフェローとして所属するカレッジとして有名になっていった。そして著名な学者が集まるカレッジに所属するために入学を1年以上待つ学生も現れるようになった (Green, 1974, pp.136-137)。つまり公開試験制度と優等学位制度の導入をきっかけにカレッジが教育環境を整えるようになったといえる。また、試験が外部試験官によって採点されたため、学生の学習到達度と共にチューターの指導力も評価されることとなり、チューターと学生の関係は学生の学びを深めるためのチームという意味合いが強くなった (Kenneth, 1982)。

また、チュートリアルについては、優等学位試験と普通学位試験の区分ができたことにより、学生それぞれの希望に合わせた学習目標の設定と指導をすることが可能となり、より個々の学生に適した教育が提供されるようになったと考えられる。

オックスフォード大学では公開試験、優等学位とチュートリアル、カレッジ制度が渾然一体となって教育水準と学習効果を高める仕組みが用意されたのである。

4. アメリカへの伝播—スワスモア・カレッジの事例

イギリスの優等学位は、諸外国において優秀学生を対象とした教育プログラムである「オナーズプログラム」へと発展していくことになる。この経緯を理解するために、オックスフォード大学の優等学位制度導入の最初の例と考えられているアメリカ合衆国ペンシルバニア州にあるスワスモア・カレッジ (Swarthmore College) を事例として考察する。スワスモア・カレッジは、1864年に設立された伝統ある私立の小規模な教養大学で (江原, 2005)、ノーベル賞受賞者や政治家、社会活動家などを多く輩出している。とりわけオナ

ーズプログラムは広く知られている。2008年度の学生総数は1490名（男子学生714名、女性776名）である。

スワスマア・カレッジでオナーズプログラムの開発が始まったのは1921年のことである。それ以前にも、アメリカにおいて優秀学生を対象とした特別な制度を実施している大学は19世紀末ごろから存在した。たとえばミシガン大学は1883年より成績優秀者に対して、コースを自由に選択できる権利を与えており、バーモント大学では、1888年から学位論文の成績によって、オナーズという学位を授与していた（Aydelotte, 1943, p.47）。ただし、オックスフォード大学の教育制度を取り入れ、独自のオナーズプログラムとして発展させた嚆矢はスワスマア・カレッジであると言われている（安原, 2005）。その指揮をとったのが1921年から1940年の間、同カレッジ長であったF.アイデロッテだった。

アイデロッテはローズ・スカラーとして1905年から07年までオックスフォード大学に留学をし、優等学位を取得した。ローズ・スカラシップは1904年に始まった奨学金制度で、多くのアメリカ人がオックスフォードやケンブリッジ大学に派遣された。ローズ・スカラーの多くは帰国後、アメリカのカレッジや大学の教職員となり、イギリスの高等教育制度の普及に大きな貢献をした（Aydelotte, 1943, p.27）。彼がなぜスワスマア・カレッジでオナーズプログラムを立ち上げたのか、どのようにしてプログラムを成立させたのか、そしてプログラムに参加をした学生はプログラムをどう評価しているのか、ということについては、1943年出版の著書（*Breaking the Academic Lock Step*）の中に詳細に記述されている。

著書の中でアイデロッテは標準化するアメリカの大学教育のあり方に疑問を投げかけている。アメリカの大学のカリキュラムは平均的な学生にレベルを合わせてデザインされすべての学生が同じ授業を受け、同じ試験で評価されている。彼はこのようなカリキュラムに縛られた教育体制を‘Academic Lock Step’と表現し、この体制では平均以下の学生はカリキュラムについていくことができず、優秀な学生は十分な知的刺激を受けることができないという問題があることを指摘している。アイデロッテは、学生の多様性を認め、個々の能力が最大限伸びるような教育を行うことが真の意味で平等な教育（democratic education）であると考え、普通学位と優等学位の区分を持つイギリスの大学教育体制はこの考え方を実践していると主張した（Aydelotte, 1943）。つまり、通常学位と優等学位という区別を設けることで、学生には知的能力の高いものとそうでないもの、学術的関心の高いものとそうでないものがあるという事実を認識できるようになり、それぞれの学生の能力および目的に適した教育を行うことが可能となる、と彼は考えたのである。彼にとって「オナーズ」という学位を導入することは、学生の多様性を認めることと同義であったと考えられる。

アイデロッテはスワスマア・カレッジにおいて、優秀な学生が適切な知的刺激を受けられるよう、特別な教育プログラム（オナーズプログラム）を用意することを提案した。オナーズプログラムの概要はオックスフォード大学のカレッジとチュートリアル制度に支え

られ試験による評価を中心とした優等学位制度をモデルに開発されたが、オックスフォード大学の体制をそのままスワスマア・カレッジに持ち込んだのではなく、議論を重ねた上でスワスマア・カレッジに適切なプログラムの開発を目指したことが上述の著書には記されている。

スワスマア・カレッジのオナーズプログラムは、1922年の開始以降、何度か改正を重ね、今日では学生が自由に学べることを一番重視し、学生がオナーズプログラムを通して身につけた知識や探究心を広い社会で活用していくことを目標としている。プログラムは2年間で、最終的に外部試験官によって口頭試験と筆記試験で評価される。オナーズプログラムへの申し込みは2年次の春である。学生はカレッジが提供する学問分野の中から4つの科目を選択し、2年後の試験に向けて準備をする。準備の方法には、セミナーへの参加、研究論文や研究プロジェクトの実施、海外研修や舞台芸術活動への参加など様々なバリエーションがあり、学生はアドバイザーと相談の上、それぞれ準備計画を立てる。セミナーは対話を通じた学びを重視するスワスマア・カレッジのオナーズプログラムにとって重要な位置づけであるため、学生は積極的にセミナーに参加することを推奨されている。

スワスマア・カレッジで授与される学士課程学位は **Highest Honor (HHH)**、**High Honor (HH)**、**Honors (H)**、**Pass**、**Marginal Pass**、**Failure** に分かれ、オナーズプログラムに参加をしたからといって必ずしもオナーズ学位を取得できるわけではない。しかし、オナーズハンドブック 2008-09によると、過去10年の統計では **HHH** が全体の9%、**HH** が53%、**H** が37%を取得し、オナーズを取得できなかった学生は全体の2%にすぎない。この2%には **Pass**、**Marginal Pass**、**Failure** が含まれる。

スワスマア・カレッジのオナーズプログラムがアメリカにおけるオナーズプログラムの発展にどの程度影響を与えたのかは現段階では不明だが、多くのカレッジや大学がスワスマア・カレッジを見学していることから (Aydelotte, 1943, p.34)、オナーズプログラムのモデルのひとつとして他の高等教育機関の関心を集めていたことは確かであろう。また、アイデロットの調査によると、1940年代のアメリカでは200校近いカレッジや大学のうち、すでに約4の3以上の大学が優秀学生に対して何らかの特別なカリキュラムやプログラム、待遇を実施していたとの指摘がある (Aydelotte, 1943, p.45)。これらのプログラムは大きく3つのタイプに分けられる。卒業要件に要件が追加されたタイプ、通常のコースのいくつかをオナーズ用のコースに置き換えたタイプ、そして学士課程最後の2年間を通常プログラムではなくオナーズプログラムに置き換えたタイプの3つである (Aydelotte 1943, p.45)。つまり、大学の中に特別トラックとしてオナーズプログラムを設けるという考え方は広く受け入れられ、それぞれの教育理念や学習環境などにあわせて異なるプログラムが開発されたことが推測される。これらが今日の優秀学生向けの特別プログラムとしてのオナーズプログラムの源流にあたるのではないかと考えられる。

5. イングランドにおける優等学位の現状

今日のイングランドでは試験による評価を中心とした優等学位の意義を問い直す動きが出始めている(Elton, 2004)。例えばイギリスの大学を代表する Universities UK は 2007 年に ‘Beyond the honours degree classification’ というレポート作成し、その中で優等・普通学位制度の問題点をまとめ、21 世紀の大学教育にあった学生評価方法の提言をしている。また、QAA (2007) も高等教育機関 128 校の 2003 年から 2006 年分の外部評価レポートを分析し、現行の学生評価制度の問題点をまとめている。2 つのレポートが問題点としてあげている主な要点は以下の 3 つである。

まず、ひとつ目の問題点として多くの大学における上級の優等学位 (2 級上以上) の取得者の増加による学位の形骸化が指摘されている。例えば、オックスフォード大学で 2008 年に学士を取得した学生の学位種別は、3129 名中、優等学位 1 級 : 855 名 (27%)、2 級上 : 2000 名 (64%)、2 級下 : 232 名 (7%)、3 級 : 33 名 (1%)、普通学位 : 5 名、そして不合格 : 1 名であった (University of Oxford, 2008)。つまり、ほとんどの学生が上級の優等学位を取得していることがわかる。この結果、優等学位の価値が薄れ学生の正当な評価になっていないこと、また学位の評価基準に対する不信感を高める危険性があることなどが問題点としてあげられている (Elton, 2004, p.417)。

次に、学位試験のみで学生の到達度を評価することが評価方法として適切ではなくなってきたことが指摘されている (QAA, 2007, The Burgess Group, 2007)。これは大学における教育方法やカリキュラムなどが様々な大学内外の環境の変化に対応するために変わり、評価すべき対象が知識の獲得だけではなくなっているからだ。例えば大学と企業が連携をして 3 年間の学士課程の途中にインターンシップやボランティアなどの実践的学習を含めるサンドイッチコースの場合、インターンシップ期間中の評価についてはポートフォリオなどが利用されるが、最終的な評価は試験で行われるため学生の学びを正しく評価しているとは言い難い (Winter, 1993, p.363)。そして学習活動と評価方法の不一致のため、学生の学ぶ意欲を奪う危険性も指摘されている (Elton, 2004, p.417)。

最後に、優等学位と普通学位の区別があることで、普通学位を授与された学生は学位を取ったにもかかわらず「劣った成績の学生」というレッテルが貼られ、その後の人生にも影響を与える可能性が危惧されている (Winter, 1993, p.368)。もともと優等学位は学生同士を比較して評価することが目的だったのではなく、個々の達成度によって授与する学位を異なるものにして学生の多様性を認めるための区分であった (Winter, 1993, p.367)。しかし社会における優等学位の経歴の有効性が浸透するにつれ、研究者になるためではなく一般的な就職などにも優等学位を持っていることが有利になり、現在では学生を比較評価するツールになっている。

上記のような理由から試験による評価と優等・普通学位の区分の廃止をし、21 世紀の高等教育に適した評価方法と学位について議論する必要性が一部の研究者や QAA によって

議論されている。優等学位および学位試験制度に関する議論はまだ始まったばかりなので、今後これらの議論がイングランドの学士課程教育にどのような影響を及ぼすのか追っていく必要があるが、優等学位の意義がなくなりつつある現状がこれらの議論から推測できる。

6. まとめ

本稿では、イングランドのオックスフォード大学における優等学位制度の歴史、アメリカのスワスマア・カレッジへの伝搬、そしてイングランドにおける優等学位制度の現在について考察した。

オックスフォード大学で公開試験制度と優等学位が導入された背景には、大学の教育水準を上げること、学生に学ぶことに対するインセンティブを与えるという目的があった。この取組によってオックスフォード大学のカレッジ制度とチュートリアル制度という体制が生かされ、教育水準と学習環境の向上につながった。アメリカのスワスマア・カレッジでオナーズプログラムが導入された背景には、標準化するアメリカのカレッジ・大学カリキュラムの問題と優秀学生を支援するプログラムの立ち上げという目的があった。優等学位という区分を作るという考え方と共に、オックスフォード大学の教育体制を取り入れ、優秀学生のための教育プログラムとしてのオナーズプログラムが設立された。そして、現在、イングランドでは、変化している大学教育を受けている学生を、これまで通り試験によって評価することに対する疑問や学位としての優等学位の形骸化を課題と考え、今の大学に適した評価方法の模索がはじまっている。

これらの考察を通して見えてきたことは、学生の多様性を認め、より適切な教育体制を整え評価を行っていくためにはどうしたらいいのか、という課題設定である。そしてイングランドで優等学位の見直しが始まっていることに象徴されるように、この課題に対する取組方法は大学が置かれた文脈の変化に対応する必要があると言えるだろう。最後に「卓越性」を追求する特別トラックが有効に機能するためには、どのような人間を育てるのかという目標を明確にする必要があると考えられる。今回の考察では、オックスフォード大学およびスワスマア・カレッジが優秀学生をどのような学生像として描いていたのかという点にまで踏み込むことはできなかった。今後の課題としたい。

参考文献

- 潮木守一（2004）『世界の大学危機－新しい大学像を求めて』中公新書
小泉一太郎（2007）『一九世紀オックスフォード大学の教育と学問』近代文芸社
安原義仁（2005）「イギリスの大学における学士学位の構造と内容－近代オックスフォードの古典優等学士学位を中心に」『高等教育研究第8集』95-120頁
吉川祐美子（2001）「イギリス高等教育の学位統一の動き－高等教育資格枠組み導入の背

- 景、概要、展望」『大学評価・学位授与機構 研究紀要』第 14 号、29-54 頁
- Aydelotte, F. (1944) *Breaking the Academic Lock Step – The Development of Honors Work in American Colleges and Universities* – London: Oxford University Press.
- Commission of Inquiry (1997) *Commission of Inquiry Report*. Oxford: University of Oxford.
- Curthoys, M.C. (1997) “The Examination System”, in Brock, M.G. and Curthoys, M.C. eds. *The History of the University of Oxford – Volume VI Nineteenth-Century* Oxford, Part I. Oxford: Clarendon Press.
- Elton, L. (2004) “Should classification of the UK honours degree have a future?” *Assessment & Evaluation in Higher Education*, Vol. 29, No.4, 415-422.
- Palfreyman, D. (ed.) (2001) *The Oxford Tutorial: “Thanks, you taught me how to think”*. Oxford: Oxford Centre for Higher Education Policy Studies.
- Swarthmore College, Honors Program
<http://www.swarthmore.edu/x5242.xml> (2009 年 5 月 12 日)
- Swarthmore College, Honors Handbook 2008-09
<http://www.swarthmore.edu/Documents/academics/HonorsHandbook2008-09.pdf>
(2009 年 5 月 12 日)
- The Burgess Group (2007) Beyond the honours degree classification – The Burgess Group final report. Universities UK.
http://www.universitiesuk.ac.uk/Publications/Documents/Burgess_final.pdf (2010 年 1 月 24 日)
- The Quality Assurance Agency for Higher Education (2007) Quality Matters – The classification of degree awards. The Quality Assurance Agency for Higher Education.
<http://www.qaa.ac.uk/enhancement/qualityMatters/QMApril07.pdf> (2010 年 1 月 24 日)
- University of Oxford (2008) GAZETTE. No 4862
http://www.ox.ac.uk/gazette/2008-9/supps/1_4862.pdf (2010 年 1 月 24 日)
- Winter, R., (1993) Education or Grading? Arguments for a Non-subdivided Honours Degree. *Studies in Higher Education*, Vol. 18, No. 3, 363-377.

トロント大学における優秀学位とプログラム

鳥居 朋子

1. はじめに
2. カナダ・オンタリオ州の大学における学士課程教育
3. トロント大学における学士課程教育
4. 学士課程カリキュラムにおける優秀学位と3種のプログラム
5. まとめ

調査日：2007年9月13日

訪問先：カナダ・オンタリオ州トロント大学文理学部ユニバーシティカレッジ

応対者：Radforth カレッジ長

調査者：鳥居朋子

調査日：2007年9月14日

訪問先：カナダ・オンタリオ州トロント大学文理学部ニューカレッジ

応対者：Halpern カレッジ長

調査者：鳥居朋子

調査日：2007年9月14日

訪問先：カナダ・オンタリオ州トロント大学応用科学工学部

応対者：川路正裕 教授

調査者：鳥居朋子

1. はじめに

カナダ・オンタリオ州に位置するフラッグシップユニバーシティであり、国内最大規模を誇るトロント大学には、米国の大学で見受けられるような一般課程とは独立し優秀学生を対象に提供される「オナーズプログラム (Honours Program)」は管見の限り存在しない (2007年9月訪問調査時点)。これは後述するように、カナダの高等教育理念のひとつである「社会的公正 (social equity)」がトロント大学関係者の基本理念として共有されていることとも関係している。

しかしながら実質的には、学士課程の専門領域ごとに、優秀生に対して授与される「オナーズディグリー (Honours degree 以下、優秀学位)」や、学習意欲の強い学生により深い専門教育の機会を提供するというコンセプトの「スペシャリストプログラム (specialist program)」等のシステムは存在する。とくに、後者のスペシャリストプログラムは、カナダの他大学に類を見ないトロント大学特有の制度である¹。そこで、本稿ではこれら優秀学位および各種プログラムの枠組みや、その取得要件およびカリキュラム上の位置付けを概観することにより、トロント大学が優秀生に対していかなる教育的機会を提供しているのかを考察することとする。具体的な考察対象は、文理学部および応用科学工学部の事例とし、現地調査におけるヒアリング記録、“Calendar (学年暦やコース概要などを掲載した大学案内)”や“The Final Report of the Curriculum Review and Renewal Committee 2006-2007”をはじめとする文理学部カレッジの内部資料およびウェブサイト等で公開されている情報等を分析の素材とする。

2. カナダ・オンタリオ州の大学における学士課程教育

オンタリオ州の中等教育後教育機関は、大学 (ユニバーシティ)、四年制大学レベルの教育機関、カレッジ (伝統的な学位授与機関ではなく、農業や医療といった特定分野の中等後教育機関でもない、幅広い分野の職業・技術教育を行う機関)、専門学校・職業訓練学校に大別される (溝上, 2002)。本稿で検討するトロント大学は、このうち学位授与権を有する大学に相当する²。

今日のカナダの大学が直面している3つの課題は、1. 公的財源緊縮への対応、2. 進学率の向上、3. 教員の人材不足解消であることが指摘されている (Beach, 2005)。とくに政府の財政緊縮にかかわる近年の大きな変化として、オンタリオ州の初等中等教育の最終年次が削減され、従来の13年制から12年制に短縮されたことがある。これにより、高等教育へのアクセスが1年早期化し、学士課程教育の構造やなかに少なからず影響を与え

¹ ほとんどの大学は主専攻 (メジャー)、副専攻 (マイナー) の制度しか持たないとされる。

² 以下、とくに断らない限り、本稿における「カレッジ」とは、トロント大学内に設置されている大学所属のカレッジを指す。

ている。あわせて、英国からの制度的継承物のひとつとして、従来カナダの大学には3年制課程と4年制課程が併存するケースがみられたが、現在は4年制課程に移行する大学が増え、トロント大学文理学部でも2001年度より3年制課程が廃止された。

さらに、高等教育の国際的な市場化の動きのなかで、近隣諸国（とくに米国）への優秀学生の「流出」を食い止めることともに、学費を自己負担する外国人留学生の獲得が課題となっている。また、オンタリオ州は地理的に米国のミシガン州やニューヨーク州、マサチューセッツ州など、世界有数の大学が所在する米国中西部、東部の州とも近く、それらの州出身の学生のリクルートにも力を入れている。優秀学位制度や特別プログラムの意味付けも、そうした文脈のなかに置かれている。

3. トロント大学における学士課程教育

3-1 トロント大学の概要

トロント大学の大学概要によれば、1827年創立の同大学は、研究教育における国際的なリーダーとして自負されている。同大学の卓越した教員集団や革新的な研究成果、創造性に富む学術の機会、優れた学生および研究者を世界中から絶え間なく引きつけている。トロント大学は、北米における比類なき規模と、カレッジシステムや学部部局を通じてつくられる緊密な学習共同体によって学習機会の提供に努力を払っている。トロントとその周辺は、世界で最も多様化した地域であり、トロント大学での活気に満ちた学生生活は、その学習共同体の文化的多様性という特徴に彩られている。同大学は、受賞歴のある現代的な建物の脇に著名な文化遺産の建築物が並び立つ3つの緑豊かなキャンパスに環境面で支えられている。

以下はすべて概数であるが、トロント大学の学生数（正規）は学士課程が50,000、大学院課程が10,000、留学生（正規）については、学士課程が4,700、大学院課程が1,700である。このうち、今回訪問調査を行ったセントジョージキャンパスはメインキャンパスであり、約50,000人の学生が学んでいる。教員数は、終身雇用地位保証（テニユア）に該当する者が2,100、その他の教育職（teaching stream）が380、臨床補助職員／助手（clinical/status only/adjunct）などが5,400、非常勤教育職（sessional/stipendiary）が1,000である。職員数は9,000、卒業生数は421,000にのぼる。これらの陣容で、学士課程プログラム数840、大学院課程プログラム数520、博士課程プログラム数75、専門職プログラム数40を提供している。

大学の運営予算は13億カナダドルに上り、研究助成金額や支援契約金額は8億5,400万カナダドルを獲得している。資産としての図書館の蔵書は1,800万冊を超え、北米の研究図書館のトップ5に入る。トロント大学が生み出す経済効果としては、108の関連子会社を創出しているほか、大学自身がトロント地区において第15位の大規模雇用主となっている。2005-2006年のGTA（Greater Toronto Area）におけるトロント大学の経済効

果は 54 億カナダドルを計上している。



写真1 トロント大学セントジョージキャンパスの風景

3-2 学士課程教育プログラムを提供する学部

トロント大学は、きわめて分権化された組織体制をとっている。学士課程教育を提供する部局には、応用科学工学部、建築景観設計学部、文理学部、歯学部、オンタリオ教育研究所、森林学部、情報学部、法学部、ジョセフ・ロットマン経営学部、医学部、音楽部、ローレンス・ブルームバーグ看護学部、レスリー・ダン薬学部、体育健康学部、社会福祉学部の 15 学部がある。このうち、主に文理学部学生の学寮生活および学習共同体の拠り所となるカレッジには、イニスカレッジ (Innis College)、ニューカレッジ (New College)、ユニバーシティカレッジ (University College)、ウッズワースカレッジ (Woodsworth College)、セントミカエルカレッジ (The University of St. Michael's College)、トリニティカレッジ (The University of Trinity College)、ヴィクトリア大学 (Victoria University) があり³、規模も一様ではない。それぞれの個性を活かした教育機会を提供している。

4. 学士課程カリキュラムにおける優秀学位と 3 種のプログラム

4-1 文理学部における優秀学位取得要件

リベラルアーツの教育を担当する文理学部には、約 22,000 の学士課程学生、約 3,000 の大学院生が登録している。29 の学科があり、約 2,000 の科目が提供されている (*Calendar A*, p.25)。学士課程には、学生が履修するひとつあるいは複数の領域の科目のまとまりを意味する「プログラム」の概念がある。このプログラムには、「スペシャリストプログラム」、

³ その他、トロント大学創設時の流れを汲む神学カレッジとして、エマニュエルカレッジ (Emmanuel College)、ノックスカレッジ (Knox College)、リージスカレッジ (Regis College)、セントアウグスティヌス (St. Augustine's)、セントミカエル (St. Michael's)、トリニティ (Trinity)、トロント神学カレッジ (Toronto School of Theology)、ウィクリフカレッジ (Wycliffe College) がある。

「主専攻（メジャー）プログラム」、「副専攻（マイナー）プログラム」の3種類がある。

第一のスペシャリストプログラムは、1つないし複数の領域における9つから17.5の科目のまとまりを指す。スペシャリストプログラムは少なくとも4つの300番（概ね3年次でいど）レベル以上の科目を含み、そのうち一科目は400番レベル（概ね4年次でいど）以上でなければならないとされている。第二の主専攻プログラムは、1つないし複数の領域における6つから8つの科目によるまとまりである。主専攻プログラムは少なくとも2つの300番レベル以上の科目を含まなければならない。第三の副専攻プログラムは、1つないし複数の領域における4つの科目によるまとまりである。副専攻プログラムは少なくとも300番レベル以上の科目を1つ含まなければならないと規定されている。このように、3種類の「プログラム」は、科目のナンバリング方式を前提とし、履修範囲の「広さ」とその専門性の「深さ」の違いによって3つのパターンに分けているものと見なせる。

文理学部の学生は4年間で20 courses（科目）以上の修得をもって学士号が与えられるが、こうした3種類のプログラムを通じ、とくに文理学部が授与している優秀文学士および優秀理学士（Honours Bachelor of Arts/Honors Bachelor of Science）、さらに「Honours」のタイトルはつかないが優秀学位と同等とみなされている Bachelor of Commerce の一般的な取得要件は以下の通りである⁴。

(a) 以下の基準に見合った少なくとも20科目において合格要件（たとえば、50%以上の成績）を満たすこと。

1. コースナンバーが100番レベルの科目が6つを超えないこと
2. 少なくとも6科目が300番レベル以上であること（300番レベル以上の科目の単位互換は1つまで可）
3. 同じ三文字コード（“AST”や“ENG”など）の科目が15を超えないこと

(b) 次のプログラム要件のうちいずれかひとつを満たすこと

スペシャリストプログラムを1つ（少なくとも1つの400番レベル以上の科目を含むこと）、あるいはメジャープログラムを2つ（12の異なる科目を含むこと）、あるいはメジャープログラム1つおよびマイナープログラム2つ（12の異なる科目を含むこと）・・・（以下略）

(c) 領域必修科目（人文、社会、自然の領域から1科目ずつ）を修了すること

(d) 卒業時までには累積的なGPAとして1.85以上（概ね、C-からCの間）のポイントを得ること⁵。このGPAの条件以外の優秀文学士および優秀理学士の条件を満たしている学生には、「優良学生」としての文学士および理学士が授与される（たとえば、

⁴ 従来、13年間の学修（高等学校段階）を終えた者が、大学で3年課程の学修を行っていた。これを標準として、当時の優秀学位の取得には4年間の学修が課せられ、少人数クラスで密な指導を受けていた。12年制に変更後は、大学入学者の全員が4年課程に進むようになり、実質的に優秀学位への道がすべてにひらかれたことになる。

⁵ これは、批判力や分析力の向上等、文理学部が定める学業成績に適合的であるとみなされる最低水準とされている（Final Report, p.39）。

累積的な GPA が 1.50 以上)。

さらに、文理学部のカリキュラムレビューの「最終報告書」によれば、累積的な GPA が 1.50 未満の学生は、学位授与の保留状態におかれる。逆に、傑出して成績の高い学生、たとえば累積的な GPA が 3.20～3.49 の者は榮譽優秀学位 (Honours degree with Distinction)、3.50 以上の学生は最榮譽学位 (Honours degree with High Distinction) の授与対象となる (Final Report, p.39)。

以上のように、基本的に優秀学位取得の途はすべての学生にひらかれており、なんらかの選抜を伴うものではない。その履修パターンも学生の問題関心の幅や深さに応じて選択が可能であり、スペシャリストプログラムで深い専門性を追求する方法もあれば、メジャーならびにマイナーを組み合わせることで広く浅く学習を進めていく方法も認められている。いわば、学生の志向性に応じた学習計画の設計が可能な柔軟性の高いシステムであると見なせる。ただし、いずれの履修パターンにおいても、要件のひとつに累積的な GPA の基準を設けることにより、安易な科目選択や無計画な学修を退け、学業成績の一定の水準維持がはかられていることがわかる。また、抜きん出て成績優秀な学生に対しては、あくまでも「榮譽」としてその成果を称えている点が特質である。

4-1-1 カレッジの概要とスペシャリストプログラムの事例

①ニューカレッジ

大規模総合大学に位置するカレッジは、学寮機能を十全に発揮し、学生集団が帰属する学習および生活の両面に関与する組織であるとみなせる。ニューカレッジはトロント大学において 1962 年に設立され、セントジョージキャンパスにおいてもっとも若く、かつ大規模のカレッジである⁶。ニューカレッジ独自の伝統と存在意義として、学生個人々人への配慮、革新的な学際的プログラム、専門学部への連関、キャリア支援や地域サービスの取り組みに焦点をあてている。ニューカレッジは、学生支援サービスや多様性の奨励に高い優先順位をおく友好的かつ非公式なコミュニティである。

現在は約 4,300 名が登録(うち 1,000 名が初年次生)しており、優秀学位 (Honors Degree) の取得にむけ学んでいる。昨年 (2006 年) のニューカレッジ卒業生 1,200 名のうち、一般の学士号 (BA/BS) を修得した者は 30～40%であったということ (ただし退学者数は不明)、かなりの割合の学生が優秀学位を得ている事実が注目される。

カレッジ学生寮のコミュニティは文理学部の学生同士だけでなく、そこに居住する工学や物理学教育および健康、薬学、音楽などの専門学部からの学生および教職員を結び付けている。カレッジ長によれば、オンタリオ州の教育政策 (12 年制への変更など) に適合的な学寮カレッジのあり方を検討しているという。

三階建てのモダンな様式の建物の下層階には、学術的および社会的な空間がカレッジの全員に提供されている。図書館やゆったりとした読書室、スタッフのオフィス、教室、食

⁶ 以下、ニューカレッジ長の Dr. Halpern へのインタビューに基づいている。

堂、共有スペース、音楽演習室、講堂やリクリエーション室などである。また、学生が利用できる3つのコンピュータ室を備えている。

文理学部では、ライティングスキルは研究遂行能力の基礎として重視されており、各カレッジは独自のライティングセンターを有している。ニューカレッジはとくに移民家庭の出身者や英語が第一言語ではない学生が比較的多く所属していることから、ライティングのサポートに力を入れている。相互カリキュラム支援（Co-curricular support）の理念から、学生が履修しているプログラムに合わせてライティングを強化していることが特徴である。また、学習に困難を抱えている学生に対するアカデミックアドバイジングサービスも完備している。



写真2 モダンな建築様式のニューカレッジ

文理学部のカレッジや学科は、それぞれの強みを活かした専門領域のプログラムを提供している。ニューカレッジの目玉のひとつは「アフリカ研究（African Studies）」である（本稿末にアフリカ研究のスペシャリストプログラムの規定を掲載）。アフリカ研究では、アフリカの歴史、社会、文化、政治、言語などのさまざまな領域の学習が求められ、基盤となる学問領域は、文学、政治学、人類学、歴史学などである。メジャーやマイナーの学生に比べ、スペシャリストプログラムの学生は、課される専門科目の数も多く、なおかつ専門性の高い科目（総じて400番レベル）の履修が義務付けられている。こうしたことから、学習の「量」および「質」における要件をともに満たした物に優秀学位が授けられる仕組みになっていることがわかる。

②ユニバーシティカレッジ

ユニバーシティカレッジは1853年に設立された伝統を持ち、いずれの宗派にも属さずあらゆる人々が参加する学士課程教育を提供してきたことで知られる⁷。ニューカレッジ同様、約4,300の学生が所属する大規模カレッジである。ユニバーシティカレッジ独自のプログラムのひとつとして、「健康科学（Health Studies）」がある。学生は、生物医学、臨

⁷ 以下、ユニバーシティカレッジ長の Dr. Radforth へのインタビューに基づいている。

床活動、衛生政策、社会文化などをひろく学ぶ。この健康科学のスペシャルプログラムでは、3年次に大規模調査プロジェクトを行うが、学生たちはそれに向けて1、2年次においてフィールド調査や統計調査などの調査方法を学ぶ。おおむね、4年修了時には良好な調査スキルを獲得しているという。

一般的に、スペシャリストプログラムを選択した学生は、学士課程の早い段階で高いパフォーマンスを示すことが必要となる。平均成績は65%以上を期待され、科目によっては履修登録に際して高い競争率が生じる。専門性の高い学習を通じて、大学院進学を志望するような研究マインド (graduate study mind) を育むことも意図されている。大学院入試の際も、志願者が学士課程でどのような履修を経てきたのかが参照される。

このほか、いくつかのスペシャリストプログラムでは400番レベルの少人数セミナーを履修することが必須要件になっている。また、卒論のような論文執筆をオプションとして課している。大多数の学生は論文の執筆はしないが、課題としてショートペーパー (25枚程度) を課すことはある。論文執筆や自主研究 (independent study)、特別研究 (extra research) の指導は意欲の高い学生の自発的な申し出により対応している。

カレッジの認識によれば、優秀学位やスペシャルプログラムをめざす学生に対する特別なインセンティブはないという。たしかに、いくつかの奨学金はスペシャリストプログラムの学生に限定されてはいるものの、多数の奨学金の目的や条件はさまざまである。したがって、奨学金の獲得は、学生にとってそれほど大きな誘因にはなっていないと見られている。むしろ、学生の特定の専門領域に対する興味関心の強さや、優秀学位を取ることで得られる「評判 (reputation)」が大きな誘因だと考えられている。

たとえば、選抜性が高い少人数プログラムとして、ユニバーシティカレッジの「認知科学 (Cognitive Science)」がある。これは、脳科学やコンピュータなど、学際的な領域のコースであり、大量の課題が課せられる。また、毎年カンファレンスを実施し、学生は活発に発表を行っている。20名の定員に対し希望者が200名以上殺到するほど、好評を博している。

しかしながら、大規模大学において全員の学生にそのような少人数教育を提供することは難しいのが実情である。さらに、政府からの財政的支援が減少し、大学経営のために学生獲得 (授業料負担者) を拡大することが政策的に促されている。減少する資金のなかで、ひとつひとつのクラスが大規模になってきている。以前は40~45名規模だったクラスが、いまや200名規模になってきており、教員-学生間のパーソナルコンタクトは年々希薄になってきている。それゆえ、スペシャリストプログラムの学生に課せられている少人数セミナーの履修の意義がより一層強まってきている。

大学経営の立場からは、大規模クラスは金になるという主張もあるが、教員間では学問的、教育的な観点から主張することが必要だと認識されている。また、研究プロジェクトや事業によって外部資金獲得が奨励されているが、人文領域ではビジネス化がなかなか難しく、どのように安定的な教育資金を得るかが課題である。とくに教会のバックアップが

ないユニバーシティカレッジは、魅力ある教育プログラムに対する支援者を獲得し、個人の寄付金を募ることが固有の課題となっている。



写真3 荘厳なたたずまいのユニバーシティカレッジ

4-1-2 カリキュラムレビューにおける新プログラムの提案

文理学部では、現行のカリキュラムが時代遅れになってきたこと、科学の進展に伴いカリキュラムの見直しが必要になってきたことなどを背景に、20 数年振りの大規模なカリキュラムレビューを 2006 年 9 月から公式に開始し、2007 年に最終報告書が出された。この背景には、オンタリオ州が高等教育機関に対し、それぞれの学位に応じた教育目標を明確に設定することを求めたことがある (Final Report, p.2)。それにより、文理学部の優秀学位の意味や位置付けもその主要な検討課題のひとつとなった。とくに、現行の学士課程教育における優秀学位の意義や中核能力 (コア・コンピテンシー) が問われ、現在のスペシャリストプログラムの履修要件とは別に、「ギフトドスチューデント (“gifted student” とくに能力に秀でた学生)」を対象とするプログラムの新設が検討されている。

しかしながら、この新設プログラムは、米国の大学に見受けられるような 2 トラックシステムによる成績優秀生だけを選抜した「エリート」コースではなく、学習に対するコミットメント (主体的な関与) と強い問題意識を持っている学生のためのものであると確認されている。その理由は、ニューカレッジ長によれば、第一に、社会民主主義に立つカナダ高等教育の理念としての「社会的公正」の観点から、すべての人々に同じ機会を提供することが重視されていることによる⁸。第二に、学生は大学を構成する主要な部分であると

⁸ トロント大学では、2006 年 12 月に「公正」、「多様性」、「卓越性」に関する宣言が Governing Council によって採択されており、これら 3 つの価値を追求する責任を大学が負っていることが明文化されている。“Statement on Equity, Diversity, and Excellence”, University of Toronto, Governing Council, December 14, 2006.

いう認識があり、すべての学生を卒業までもっていくことに大学の責任があると考えられていることによる。

今後は、トロント大学文理学部が重きをおく「機会均等」という価値に、今日の高等教育市場の国際化における「競争」というパラダイムがどのような葛藤を生み、学士課程教育の構造や内容に変化をもたらしていくのかが注目される。

4-2 応用科学工学部における優秀学位とエンジニアリング科学科

4-2-1 学部の概要と優秀学位

一方、人文社会科学の領域と比して、早期から積み上げ式の専門教育を実施している自然科学領域の学士課程ではどのような優秀学位およびプログラムを提供しているのだろうか。ここでは、応用科学工学部の事例を手がかりにみていきたい⁹。

応用科学工学部は、1837年に「実用科学部 (School of Practical Science)」として誕生し、1906年に現在の姿に近い形に改組された。学士課程の学生数約4,300、大学院生数約1,400、教員数約220、卒業生数約24,000の規模である。学士課程のプログラムは、化学工学、土木工学、コンピュータ工学、電気工学、エンジニアリング科学、生産工学、材料工学、機械工学、鉱物工学である。

応用科学工学部の学士課程は、必修科目の数が多く、科目間の階梯性が高いことから、学生の履修にカリキュラムの規定力が強くはたらいっているといえる。あわせて、厳格な進級制度（落第）を運用している。学生本人の適性やキャリアを考慮し、学習に追い付けず初年次を終了できない学生には退学あるいは転学を勧告するなど、厳しい措置がとられている。また、プロベクションといういわゆる「執行猶予期間」を設け、次学期の学習成績をもって判断を下す措置もある。したがって、学生の成績に対する考え方はきわめてシビアであり、教員も成績をきちんとつけることに留意している。

応用科学工学部は専門学部であり、高校を卒業した者が直に入ってくる。オンタリオ州が13年制を廃止した当時は、12年卒業生と13年卒業生を同時入学してきたため、1.5倍に定員を拡大して吸収したが、現在は学年進行で移行期間が終わっている。学業成績面での影響という点では、13年制を経て入学した学生は現在の12年制修了生よりも知識が豊富だったという印象がもたれている。ただしこれは、入学時の学力が低下したのではなく、獲得している知識量が減っただけだと見られている。

そうしたオンタリオ州高等教育の枠組み全体の変化はあるものの、現在のところ応用科学工学部の優秀学位の規定に変更はない。以下は応用科学工学部の一般的な優秀学位の取得要件である (*Calender B*, p.97)。

<優秀学生の適格条件 (Honours standing) >

A : 1) 2年次秋、2年次冬、3年次秋、3年次冬、4年次秋の学期ごとの優秀学生の適格条件：正規履修（セッションあたり2.50単位）の学生であること。ただし、繰り

⁹ 以下、応用科学工学部教授の川路氏へのインタビューに基づいている。

返し受講ではなく、成績平均点が 80%以上であること。

2) 4 年次秋学期、4 年次冬学期に 2.00 単位以上取得していること。ただし、繰り返し受講ではなく、なおかつ成績平均点が 80%以上であること。

B: 卒業時点で優秀学位を取るためには、優秀卒業生適格 (graduate standing) が必要。2 年次秋、2 年次冬、3 年次秋、3 年次冬、4 年次秋、4 年次冬の 6 学期中 4 学期で優秀学生適格条件を満たしていること。さらに、4 年次秋学期、4 年次冬学期に 2.00 単位以上取得し、なおかつそれらの成績平均点が 80%以上であること。

応用科学工学部では卒業論文はオプションであり、一定の単位を修得した学生は論文を書くことを認められるという規定になっている。たとえば、川路教授の所属する化学工学科では約 500 名の学士課程学生に対し、教員 (フルタイム) が 26、27 人であることから、仮に全員が論文執筆を希望した場合、指導負担が大きいと認識されている。

優秀学位をめざす学生にとってのインセンティブは、学部長の「優秀生リスト (Honours list)」に記録され、名前が公表されることにより自らの誇りとすることとともに、成績優秀生ほどよりよい条件の工学領域の奨学金獲得に有利であるということが考えられる¹⁰。

4-2-2 エンジニアリング科学科

このように、優秀生に対する学部内での何らかの特典や優遇措置はなく、カリキュラム上で成績上位者を選抜し対象とした科目や、クラスのなかで通常学生と分けるという制度はない。しかしながら、トロント大学応用科学工学部には、ある意味で「選拔性」の高い「エンジニアリング科学 (Engineering Science)」という学科がある (*Calender B*, p.138)。エンジニアリング科学科は、工学、科学および数学にわたる広範な専門領域の研究を大学院において実施することをめざし、卓越した準備を提供する学士課程プログラムである。同学科の修了生は、専門の工学キャリアに踏み出すだけでなく、その他の専門的な職業 (たとえばビジネス、法律、医療) を選択する資格をも与えられる。提供されるコースは、高い水準のものであり、数学や科学においてとくにすぐれた能力や適性を示し、プログラムで成功を収めることが見込まれる学生に限られている。プログラムの 2 年次に進級するためには、1 年次の平均成績として少なくとも秋学期で 55%、春学期で 65%を収めなければならない。この要件に満たない者は、大学規則の定められた要件や保留条件に従って、他の工学プログラムへの移籍が認められる。

同学科は全体で 200 名の規模であり、10 程度の専攻に分かれている。ひとつの専攻は

¹⁰ 2008-2009 年度データによれば、トロント大学の授業料 (Tuition Fees) は学部によってレンジが広い。たとえば、カナダ市民および永住外国人の場合、応用科学工学部が 8,655 カナダドル、文理学部が 4,776 カナダドルとなっている。応用科学工学部の学生にとって、より良い条件の奨学金獲得は有力なインセンティブになるとみられる。ちなみに、カナダ市民でない者の場合は、前者が 21,830 カナダドル、後者が 19,404 カナダドルと金額は一気に跳ね上がる。
http://www.prospective.utoronto.ca/Money_Matters/Tuition.htm

約 20 名の学生を抱え、通常少人数指導が行われる。工学に関する基礎的な学習が重視されており、幅広く履修する。同学科は自前の教員集団は置かず、他の学科の教員が出向いて授業を担当している。学部の共通の了解事項として、各学科の予算で教員を出動させている。同学科にじかに接続する大学院はないため、教員側にとっては、大学院に進学する際に教員の所属する研究室に進学する見込みのある優秀学生を早期にリクルートできるというメリットがある。

同学科のカリキュラムの最初の 2 年間は、基礎科学と数学（エンジニアリングの基盤）に集中している（*Calendar B*, p.138）。最初の 4 学期は主題に沿って学習を進める。各主題は、1 年次秋学期：「物質と運動」、1 年次冬学期：「システムと状態」、2 年次秋学期：「フィールドと波動」、2 年次冬学期：「原子と分子」である。各学期のコースは、可能な限り上記の主題に適合するよう編成される。こうした編成により、学生が異なるコースや領域における多様な概念の相互関連をよりよく理解することが意図される。

1 年次秋学期における「物質と運動」の主題は、現代科学の初期、構成要素についての認識および自然の力学を検討する。1 年次冬学期の「システムと状態」では、エンジニアリングにおいてきわめて重要なシステムレベルの視点や大きな自然観を養う。2 年次秋学期の「フィールドと波動」、2 年次冬学期の「原子と分子」では、粒子-波動という自然の二元性について理解を深める。

前半 2 年間のカリキュラムは、すべてのエンジニアリング科学科の学生に共通である。個々の学生は 2 年次の終わりに、応用科学工学の特定領域における専門を提供する以下の 8 つの選択肢から後半 2 年間で学習を続ける領域を 1 つ選ぶ。航空宇宙、インフラストラクチャー、生物医学、製造システム、コンピュータ、ナノ工学、電気、物理学。また、4 年次に指導教員の研究室において、所属の大学院生や TA らと接触する機会を持ち、研究の初歩に触れる。

このように、応用科学工学部では実質的にエンジニアリング科学科が「ギフトプログラム」のコンセプトに近い選抜クラスのような位置付けにある。修了生は半数以上が大学院に進学しており、大学院での継続的な研究に有利であるとみなされている。

5. まとめ

以上、トロント大学文理学部および応用科学工学部の事例を手がかりに、優秀学位および選抜性の高いプログラムの特質を概観してきた。米国の大学に見受けられるような一般課程とは独立した「オナーズプログラム」は存在しないものの、トロント大学の優秀学位取得にむけたプログラム（スペシャリスト、メジャー、マイナー）は、とくに以下の二点において、日本の研究総合大学の学士課程プログラムを考えるうえで示唆に富む。

第一に、「機会均等」を基本理念に据えながら、学習の「量」と「質（専門性の程度）」の両面によって優秀学位と一般学位の差異をつけるという方式が特徴的である。スペシャ

リスト、メジャー、マイナーのいずれを選択しようとも、無計画・無目的な学習を排し、実質的な学習を促す仕組みになっている。

第二に、トロント大学全体の一般的な優秀学位のコンセプトとしては、特権的な「英才教育」の成果を挙げるといっても、学生個々人の興味関心を満たし学習成果を高めることに主たる目的がある。その意味では、優秀学位の「稀少性」はさほど高くない。しかしながら、学部や専門領域によってコンセプトに異なる強調点が見受けられる。たとえば、文理学部における優秀学位取得におけるスペシャルプログラムでは、学生の特定のテーマに対する学習意欲や問題意識の強さが重視されていることに対し、応用科学工学部では規定的なカリキュラムのもと、厳格な成績評価や進級制度によって学位の質保証も重視されている。とくにエンジニアリング科学科では、アクセスの「機会均等」は保証されつつも、成績基準によって段階的に優秀生を「ふるい」にかけていく方法を採用しているとみなせる。

全体的にみて、このようなトロント大学の方式は、学生が初年次から専門学部に所属し専門教育を受ける日本の大学の現行の制度に馴染みやすい側面があると思われる。ただし、その制度を支える基盤として、カリキュラムの体系化やコースのナンバリングシステムの導入が不可欠となろう。

今回の調査では、トロント大学における優秀学位や各種プログラムの効果測定をいかに組織的に行っているのかまでは踏み込めなかった。しかしながら、前出の通り文理学部では大がかりなカリキュラムレビューを経ており、学士課程プログラムの抜本的な見直し作業も行われている。今後の展開が注目される。

また、諸外国（主に米国）を視野に入れた高等教育市場の国際化への対応という課題意識のなかで、「ギフトドプログラム」の提案や優秀学位の見直しが浮上している点は興味深い。いささか穿った見方かもしれないが、オナーズプログラム等の特別プログラムが、競争的な環境で自校のプレゼンスを高めていくための優秀学生の囲い込みの「装置」として運用される可能性も否定できない。この点にかかわって、今後のオナーズプログラムの研究において、国際市場における大学戦略という枠組みを考慮することの重要性を認識する。さらに、そうした枠組みのなかで、機関ごとの「優秀生」の概念規定や水準がどのようにゆらぎつつあるのかという点も注目される。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、トロント大学応用科学工学部教授の川路正裕氏、同大学文理学部ニューカレッジ長の Dr. Rick Halpern 氏およびユニバーシティカレッジ長の Dr. Ian Radforth 氏に多大なご厚誼をたまわった。記して謝意を表したい。

主な参考文献およびサイト

Beach, Charles et al. (2005) *Higher education in Canada*, John Deutsch Institute for the Study of Economic Policy.

Calender 2007-2008, Faculty of Applied Science and Engineering, University of Tront
(本文中では *Calender B* と表記)

<http://www.undergrad.engineering.utoronto.ca/Assets/2007-2008+Calendar.pdf>

(2008年7月29日)

Calender 2007-2008, Faculty of Atrs and Science, University of Toronto.

(本文中では *Calender A* と表記)

The Final Report of the Curriculum Review and Renewal Committee:2006-2007,
Faculty of Arts and Science, University of Toronto. (トロント大学内部資料。本文中では Final Report と表記)

小林順子・関口礼子ほか編著 (2003) 『21世紀にはばたくカナダの教育』東信堂

溝上智恵子 (2002) 「カナダの高等教育とオンタリオ州のカレッジ」館昭編著『短大から
コミュニティ・カレッジへ』東信堂、131-153頁

New College, The University of Toronto

<http://www.newcollege.utoronto.ca/site6.aspx> (2008年7月29日)

The Association of Universities and Colleges of Canada

http://www.aucc.ca/index_e.html (2008年7月29日)

TRENDS in Higher Education, ACC.

http://www.aucc.ca/_pdf/english/publications/trends_2002_e.pdf (2008年7月29日)

Facts and Figures, Faculty of Applied Science and Engineering, University of Toronto.

<http://www.prospective.engineering.utoronto.ca/skule/faculty/facts.htm> (2008年7月29日)

資料 文理学部「アフリカ研究 African Studies (Arts program)」の3種のプログラム

***Specialist program:** (11 full course or their equivalent including at least one 400-series course)

-Core course requirements:

NEW 150YI (recommended in first year), NEW 450HI (to be taken in the final year)

-Other requirements:

1. Four full course equivalent from Group A, to be chosen from at least two different departments/programs, one of which must be NEW 450HI
2. Two full course equivalents from Group B
3. Two full course equivalents from Group A or B
4. A combination of two language full course equivalents as outlined in Group C
5. Four full course equivalents of the eleven courses must be 300/400 series (including at least one 400-series course) of which at least one must be from Group A and another from Group B

***Major program:** (6 full courses or their equivalents)

-Core course requirement

NEW 150YI (recommended in first year), NEW 450HI (to be taken in the final year)

-Other requirements

1. Three full course equivalents from Group A, one of which must be NEW 450HI
2. Two full course equivalents from Group B, or NEW 280YI and 380YI
3. At least two 300/400-series full course equivalents from Group A and/or B

***Minor program:** (4 full courses or their equivalent)

-Core requirement:

NEW 150YI (recommended in first year)

-Other requirements:

1. One full course equivalent from Group A
2. One full course equivalent from Group B, or another one from Group A
3. One full course equivalent from Group B or NEW 280YI, NEW 281YI or NEW 380YI
4. At least one full course equivalent must be a 300+series course from Group A and/or B

スタンフォード大学におけるオナーズプログラムの特質

中 島（渡利）夏 子

1. はじめに
2. 全米のオナーズプログラムとスタンフォード大学の事例の位置づけ
3. スタンフォード大学における学士課程教育
4. スタンフォード大学におけるオナーズプログラム
5. 教育学研究科によるオナーズプログラム
6. オナーズプログラムへの支援
7. 学生の学習行動からみたオナーズプログラム
8. オナーズプログラムの成果と課題
9. おわりに

調査日：2008年2月4日～2月8日

訪問先：米国スタンフォード大学

①学士課程担当部局、指導・研究活動部門(Undergraduate Advising and Research)

②教育学研究科(School of Education)

調査者：中島（渡利）夏子

1. はじめに

本稿では、米国を代表する研究大学であるスタンフォード大学におけるオナーズプログラムについて紹介する。

スタンフォード大学は、1891年創立の私立大学である。現在までに18名のノーベル賞受賞者を輩出する等、優れた研究活動が行われる一方、学士課程への入学の競争率が高い(アドミッション率は11%)ことでも有名である。2008年版のニュース・ウィーク誌の全米大学ランキングでは、プリンストン大学、ハーバード大学、イェール大学に次ぐ4位となっている(US News, 2008)。



スタンフォード大学の学士課程の学生数は約6,800名(学年あたり約1,700名)であり、州立大学等と比べると小規模である。また、学士課程の学生数は、大学院の学生数の約8,200名よりも少ない大学院重点大学である。クォーター制をとっており、秋・冬・春クォーターに授業が開講される。学士課程の学費は、1クォーターあたり約11,600ドルと高額である。1年次は全寮制を取っており、それ以後もキャンパス内の寮に住む学生も多い。8つの学部(School)があるが、その内、学士号を授与するのは地球科学部、工学部、文理科学部の3つである。

スタンフォード大学は、1990年代以降、研究大学の特色を活かし、「知識の探究(search for knowledge)」を目的とした学士課程教育の構築を目指し、様々な改革を行っている。つまり、学生が研究を行う活動に重点を置いた学士課程教育である。具体的には、教員の研究領域やそのプロセスを知る導入セミナー(Introductory Seminar)や教員の研究活動を擬似的に体験する二年次カレッジ(Sophomore College)の実施、そして卒業研究を行うオナーズプログラム(Honors Program)の充実を行った。オナーズプログラムに関しては、1998年に全学的な調査が行われ、その充実策の提言がなされた(Committee on Undergraduate Studies, 1998)。また、オナーズプログラム等を通して、指導教員の下での学生の研究活動を増やすために、資金提供、夏期活動期間中の寮の提供、研究発表の場の提供、表彰の実施などの支援活動を行っている。

学士課程学生による研究活動は一般的に「アンダーグラジュエイト・リサーチ(Undergraduate Research)」と呼ばれているが、アンダーグラジュエイト・リサーチの支援を行うことを通して、その拡大を図ることを使命としている部門が学士課程教育担当部局(Office of the Vice Provost for Undergraduate Education)の下に設置されている。その部門は、「学士課程における指導と研究(Undergraduate Advising and Research)」と呼ば

れ、その活動の一環として、オナーズプログラムの実施拡大のための働きかけと実施の支援を行っている。そこで、本調査では、同部門の副ディレクターに、オナーズプログラムに関する全学的な活動についてインタビューを行った。

本稿が事例として扱った教育学研究科(School of Education)は大学院のみの研究科であり、2005-2006年度のデータでは、専任教員数が40名、非常勤教員数が約40名、修士課程の在籍者数は193名、博士課程の在籍者数は183名である(School of Education, 2008a)。その教育プログラムは博士課程と修士課程のみ提供されているが、例外的に学士課程の学生を対象としたオナーズプログラムを1987年より提供している。本調査では、そのオナーズプログラムのディレクターにもインタビューを行った。

2. 全米のオナーズプログラムとスタンフォード大学の事例の位置づけ

スタンフォード大学の事例を紹介する前に、先行研究から全米のオナーズプログラムの実施状況と特質について明らかにした上で、その中でのスタンフォード大学の位置づけを行う。

スリヴァン(Sullivan, 1994)はオナーズプログラムを、「アイビーリーグの教育を州立大学の値段で受けられるプログラム(*Ivy League Programs at State School Prices*)」と表現している。アイビーリーグとは、アメリカ北東部に立地する私立大学8校(ブラウン大学、コロンビア大学、コーネル大学、ダートマス大学、ハーバード大学、プリンストン大学、ペンシルベニア大学、イエール大学)であり、この8校にスタンフォード大学とマサチューセッツ工科大学を加えた大学群は「アイビー・プラス」と呼ばれている。これらの大学は、社会的にも学術的にも卓越したエリート校である。これらの大学では、潤沢な資金、優れた教員と学生、教員あたりの学生の少なさ、設備の充実等を利用した、少人数での質の高い教育が行われている。それに対して、スリヴァンがその著書でオナーズプログラムとして紹介をしているのは、次の55校の州立大学である。

アラバマ大学(タスカローサ校)、アリゾナ大学、アーカンサス大学、カリフォルニア大学(アーバイン校、ロサンゼルス校、リバーサイド校、サンディエゴ校、サンタバーバラ校、コネチカット大学、デラウェア大学、フロリダ大学、ジョージア大学、ハワイ大学(マノア校)、アイダホ大学、イリノイ大学(アーバナ、シャンペン校)、インディアナ大学、アイオワ大学、カンサス大学、ケンタッキー大学、ルイジアナ州立大学、メリーランド大学、マサチューセッツ大学(アマースト校)、マイアミ大学、ミシガン大学(アン・アーバー校)、ミシガン州立大学、ミネソタ大学、ミズーリ大学、モンタナ大学、ネヴァダ大学(レノ校)、ニューハンプシャー大学、ニューメキシコ大学、ニューヨーク市立大学、ニューヨーク州立大学(アルバニー校、バッファロー校、ストニーブルック校)、ノースカロライナ大学(チャペルヒル校)、オハイオ州立大学、オクラホマ大学、オレゴン大学、ペンシルバニア州立大学、ロジャース大学、ロードアイランド大学、サウスカロライナ大学、サウスフロリダ大学(ニューカレッジ)、テネシー大学、テキサス大学(オースティン)

ン校)、テキサス A&M 大学、バージニア大学、ワシントン大学、ウェストバージニア大学、ウィリアム・アンド・メアリーカレッジ、ウィスコンシン大学(マディソン校)、ワイオミング大学

また、ロング(Long, 2002)による研究によって、オナーズプログラムは、選抜性がほどほどに高い、公立の4年制研究大学において多く実施されていることが明らかになっている。具体的には、入学者選抜の段階でSATやACTのテストで優秀な成績を取った学生に限定して、少人数セミナーや発展的コース、そして独立学習/研究を課している。このように、一部の優秀な学生を、初年次より一般学生とは別のトラックで教育するというのが、一般的なオナーズプログラムの趣旨である。

オナーズカレッジは優秀な学生のみが所属する部局の事をいい、オナーズプログラムは優秀な学生のみが履修できるプログラムとなっており、どれだけ優秀学生と一般学生とを区別して教育するかは、大学によって異なる。一般的には、オナーズカレッジを持つ大学は、その学生専用の寮があり、その学生には特別な奨学金がつくという。

オナーズカレッジやプログラムを設置する大学の背景には、アイビーリーグ大学ほどの教育環境を用意できない公立大学が、そのリソースを集中させたプログラムを部分的に用意することによって、優秀な学生を誘致しようとする戦略がある。また、州立大学という州民に広く高等教育を提供するという使命を持つ大学が、その一部のみをオナーズプログラムにすることによって、公平性と卓越性の両立を目指していることも指摘されている。

日本の研究者が対象とした、テキサス大学オースチン校やニューヨーク市立大学(田中, 2005)やメリーランド・カレッジパーク校やアメリカン大学(山田, 2006)は上記の特徴を持ったオナーズプログラムであると位置づけることができる。つまり、大人教授業が中心である州立大学において、優秀な一部の学生に限定して、アイビーリーグで行われているような少人数でのきめ細かな教育を行うというオナーズプログラムである。

本稿が対象とするスタンフォード大学は、「アイビー・プラス」の一員であり、このような州立大学で行われているようなオナーズプログラムやカレッジとは異なった趣旨でオナーズプログラムを実施している。以下、その事例を紹介する。

3. スタンフォード大学における学士課程教育

スタンフォード大学は、学士課程においては教養教育(Liberal Education)を提供しているとしている。教養教育とは、2007-2008年度の学生便覧(Office of the University Registrar, 2007)によると「1)人類の知の主要な領域についての知識や見識を広げ、2)1つか2つの領域についての理解を深めることを促し、3)学生が生涯にわたって学び続けること、職場や私生活において知識を応用することに備えるもの」である。スタンフォード大学のカリキュラムの特徴は柔軟性があることであり、アドバイザーの支援の下で、学生が「それぞれの興味やこれまでの経験、そして未来の目的に応じた学習プログラムを計画する」ことが

求められている。全ての学生が満たさなければならない教養教育の要件は、一般教育、作文、言語、専攻の4つである(表1)。

表1 スタンフォード大学の学士学位授与要件(2007-2008年度)

一般教育	「人文学入門」(全学生必修、3コース)
	領域配分科目(5領域からそれぞれ1コース以上) (1)工学と応用科学、(2)人文科学、(3)数学、(4)自然科学、(5)社会科学
	市民性のための教育(4領域から2コース) (1)米国文化、(2)グローバル・コミュニティ、(3)ジェンダー学、(4)道徳的推論
作文	作文と修辞
	専攻での作文
言語	下記のいずれかの要件を満たすこと ①3クォーター授業、②Language Advancement Placementで4~5をとる、③SATの科目テストで高得点をとる、④語学診断テストで高得点をとる
専攻	

学士課程を通して授与される学位は「アーツ学士(Bachelor of Arts)」と「サイエンス学士(Bachelor of Science)」の2種類である。上記の4つの要件を満たし、135単位以上をスタンフォード大学で取得した上で、計180単位を取得することが学位授与の基本的な条件である。その他の学位の選択肢として、「アーツ学士」を出す専攻と「サイエンス学士」を出す専攻の両方の要件を満たした場合に授与される「アーツ・アンド・サイエンス学士(Bachelor of Arts and Science)」や、平均5年間で学士と修士の学位を取ることができる「コー・ターミナル(Co-terminal)」と呼ばれる選択もある。

アーツとサイエンスの学士学位の中にも、副専攻の履修やオナーズの履修という選択肢があり、前者は副専攻を履修したことが成績証明書に記載され、後者は、更に3つの選択肢がある。1つ目は優秀な成績を修めたことを表す「優秀学士(with Distinction)」、2つ目はオナーズプログラムを履修したことを表す「オナーズ学士(with Honors)」、3つ目は語学に堪能であることが記載されることである。このように、スタンフォード大学の学士課程教育は学位だけみても多くの選択肢があり、学生が自らの学習目的に基づき計画することが重要となっている。

このような学位の下で学生は次のような履修行動を取る。まず、大学1、2年次のいわゆる前期課程では、学生は一般教育要件、作文要件、言語要件を満たす科目と自由選択科目、さらに専攻の基礎となる科目を履修する。そして、2年次の終わりに専攻を決定し、3年次以後は主に専攻の科目を履修する。3年次以降、向学心のある多くの学生は大きく3つの履修パターンを取る。1つは、専攻の「オナーズプログラム」を履修するパターンで、学生全体の25パーセントがこのパターンを取る。2つ目は、2つの専攻のコースを履修す

る「ダブル・メジャー」あるいは「メジャー／マイナー」制度を使うパターンである。3つ目は、「コウ・ターミナル」のパターンである。これらの内、どのパターンが主流かは学科によって異なり、例えばオナーズプログラムを充実させている人間生物学科ではオナーズプログラムの履修者が多く、「コウ・ターミナル学位」のパターンは工学部に多いといった違いがある。

4. スタンフォード大学におけるオナーズプログラム

4-1 学位に記される優秀さ

スタンフォード大学の2007-2008年度の便覧によると、成績証明書に特別な優秀さが明記される「学士のオナーズ(Baccalaureate Honors)」は次の3つである(Office of Registrar, 2007)。

- ①「優秀学位(with Distinction)」：専攻の学科やプログラムの推薦によって、大学は優秀学位を成績優秀者に与える。優秀学位はGPA(Grade Point Average)の累積に基づき、卒業生の15%に授与される。称号は卒業クラスの冬クォーターの最後に算定される。
- ②「オナーズプログラム」：オナーズプログラムには、学科によるものと、学際的なものがある。学科のオナーズプログラムは、特別な発展学習において優秀な成績を修めた学生は、学科の推薦により、オナーズ学習(honors work)に取り組むものである。同プログラムは、専攻の要件に加えて、発展的レベルにある独立した創造的学習を行う。学際的オナーズプログラムは、学生の専攻以外の領域においてオナーズ学習に取り組むもので、2007-2008年度には次の8領域で開講されている。同プログラムは、専攻での学習を補完するものとして計画されている。
- ③「外国語の高い習熟度(Foreign Language Proficiency)」の記載：外国語学科に外国語の習熟度の高さを認定された学生は、その成績証明書に「外国語の高い習熟度」であることが明記される。

このように①成績優秀者に与えられる「優秀学位(with Distinction)」、②オナーズプログラムを履修した者に与えられる「オナーズ学位(With Honors)」、③外国語の高い習熟度の明記、の3つがスタンフォード大学の学士課程における優秀者に与えられる称号である。具体的には、“Bachelor of Arts with Distinction”、“Bachelor of Science with Honors”と成績証明書に記載される。

4-2 オナーズプログラムの概要

スタンフォード大学におけるオナーズプログラムとは、「学生が発展的な研究や分析を専任教員の指導の下で行う機会を提供するもの」であり、「詳細な研究やフィールドワーク、あるいは実験とそれを総括した一定量の論文を書くことを求められる」(VPUE, 2008a)ものである。芸術科のオナーズプログラムの場合には、制作活動を行うこともある。具体的

には、指導教員の下でのオナーズ論文の執筆(あるいは制作)と、そのために必要な知識やスキルを修得するコースでオナーズプログラムは構成されている。

同プログラムは、学科によるものと「非専攻学生のための学際的オナーズプログラム(Interdisciplinary Honors Program for Nonmajors)」、「公益事業に関する研究プログラム(Public Service Scholars Program)」の3種類がある。

学科によるオナーズプログラムは、学士課程教育を担当する全ての学科が開講しているものではなく、そのプログラム内容、学生の選出方法やその基準も、学科によって異なる。「非専攻学生のための学際的オナーズプログラム」は次の8領域で開講されている。①教育、②環境科学、科学技術と政策、③社会倫理、④フェミニスト研究、⑤国際安全保障研究、⑥人文科学、⑦ラテン・アメリカ研究、⑧自然科学、科学技術と社会、の8領域である。「公益事業に関する研究プログラム」がスタンフォード大学の公益事業センター(Haas Center for Public Service)が提供するプログラムで、専攻学科によらず、公益事業についての研究を希望する学生を対象としている。

オナーズプログラムへの応募時期は3年次の冬クォーターから4年次の秋クォーターにかけてと、学科によって異なる。そして選出基準も多様であるが、多くの学科が専攻科目においてGPAの点数が3.0~3.5であることと研究計画書の提出を要求している。中には化学工学科のように、論文アドバイザー等のスポンサーが決まっていることを要求する学科もある(VPUE, 2008b)。

4-3 オナーズカレッジ

オナーズプログラムをより充実させるための方策として、3年次と4年次の間の夏期休暇を利用した合宿形式でのプログラムが、1993年以降実施されている。その正式名称は、寄付者(ピーター・ビーング)の名前を関して「ビーング・オナーズ・カレッジ」である。オナーズカレッジは、教員や大学院生からの指導や学生同士の交流等を通して、学生がオナーズ論文に取り組むというものであり、その目標は以下の3点である(VPUE, 2008c)。

- 学生が研究に専念できる時間を提供することによって、研究を進めさせる。
- 学生の研究領域における教員や大学院生からのメンタリングを受ける機会を作る。
- オナーズに取り組む学生同士のつながりを学問領域内外に関わらず促し、知的なコミュニティの意識を育ませる。

オナーズカレッジは「ビーング教育イニシアチブ(Bing Teaching Initiative)」と呼ばれる、スタンフォード大学の学士課程教育の質を向上させることを目的としたカリキュラム開発の一環として始められたものである。1993年に28人で開始され、毎年、参加者は増加し、2007年度には100人以上の学士課程学生の参加があった。

オナーズプログラム同様、オナーズカレッジを実施している学科は限られている。2007

年にオナーズカレッジを実施しているのは次の 20 学科である。アメリカ学、比較文学、コミュニケーション、経済、教育学、英語、社会倫理、フェミニスト研究、歴史、人間生物学、人文科学、国際関係学、国際安全保障研究、哲学、心理学、公益学(Public Policy)、宗教学、社会学、象徴システム学、自然科学・科学技術と社会。(太字は学際的オナーズプログラム。)

オナーズカレッジの実施主体は、学科のオナーズプログラムの委員会と全学的な組織である「学士課程における指導と研究(UAR)」部門である。前者は担当教員や院生による研究領域に関するセミナー等を担当し、後者は寮に住む学生間の交流を促すイベント(劇や映画、海へのピクニック、コンサートや博物館などに出かける)や、研究を行う上で必要な一般的なスキルについてのワークショップ等を実施している。このような活動によって、学生は新しい友情を育み、4年次開始時には連帯感が育まれていることになる。

オナーズカレッジでの活動は具体的には次のようなものである。

- 学生相互のオーラルプレゼンテーションと研究計画や論文計画のピア・レビュー
- 学問領域の研究方法を学ぶための、読書課題とディスカッションを行うセミナー
- 過去のオナーズ論文のレビューとモデル論文の開発
- 図書館長とのミーティングを含む図書館オリエンテーションや研究器具のデモンストレーション。
- 統計分析やソフトウェアの使い方等の特定のスキルについてのワークショップ
- オーラル・コミュニケーションのワークショップ
- 教員による研究や論文執筆のプロセスについての紹介
- 近くの文書館や本屋への見学
- オナーズカレッジの最後には作文課題が出される
- 研究方法や指導教員との友好的な関係の築き方、博士論文や学士課程卒業後の奨学金について等の、全専攻に共通する題目についてのワークショップ

学生は一つの寮に住み、部屋と食事が提供され、コンピューターへのアクセスとコピー機等、研究に必要な環境が無料で用意されている。さらに、夏期にアルバイトしなければならないためにオナーズカレッジに参加できない学生がいないように、そのような状況にある学生に対して必要額を支援する基金もある(VPUE, 2008d)。

5. 教育学研究科によるオナーズプログラム

5-1 教育学研究科におけるオナーズプログラムとその選抜要件

教育研究科によるオナーズプログラムは、「非専攻学生のための学際的オナーズプログラム」に分類されるプログラムで、学士課程を持たない教育研究科が、大学の認定を得て実施しているものである。その目的は、才能のある学士課程学生に学士課程教育を提供して

いない教育学の領域についての研究をする機会を与えることである。教育学研究科のオナーズプログラムを履修する学生は、毎年6名～7名である(1997年～2001年のデータ)。

教育研究科のオナーズプログラムは以下の5つの要件で成り立っている(School of Education, 2008b)。

- ①指定された3領域(「教育政策と歴史」、「現代的課題」、「教育学的方法論」)からそれぞれ1コース以上を履修する(9-15ユニット)。教育研究科が提供するコースは、そのほとんどが上記の3領域のいずれかに該当する。
- ②論文のテーマと関連する文献講読コースを履修する(0-4ユニット)。必須要件ではない。
- ③オナーズプログラムのディレクターによる「オナーズ・セミナー」の履修。秋クォーター(「オナーズ・セミナーA」)・冬クォーター(「オナーズ・セミナーB」)・春クォーター(「オナーズ・セミナーC」)にそれぞれ開講され、その全てを履修しなければならない(3ユニット)。
- ④指導教員の下での論文執筆(0-12ユニット)
- ⑤4年次の春に開催される研究発表会での発表。

そして、このプログラムに応募するための要件は、専攻コースでのGPAが3.0以上であることであり、下記の内容が書かれた応募書類を3年次の春クォーターに提出する(School of Education, 2008c)。

- ①「教育研究科の中で指導をしてもらいたい教員はいますか。いるのであれば、彼/彼女の名前となぜその人が論文の指導教員として適当なのか2、3行で述べなさい。いなくても問題はありません。
- ②指定した教育学の3つの領域で、これまでに履修したコースとこれから履修する予定のコース
- ③志望動機：200字から400字で、教育学の領域の中で興味のある分野と、なぜオナーズプログラムに入りたいのかについての理由を述べなさい。可能であれば、オナーズ論文の対象としたい領域やテーマについて、できるだけ詳しく述べなさい。

応募書類は、応募した学生のオナーズプログラムへの志望動機を聞くものであり、学生の熱意や準備状況を知ると同時に、その関心に合った指導教員が教育研究科内にいるかどうかを検討するための資料としても利用される。教育研究科でのオナーズプログラムでの学生の指導は、教員にとって義務ではない。したがって、「指導学生を受け入れたい」、「指導学生を受け入れても良い」という教員によってオナーズプログラムが成り立っている。学士課程学生の指導をしたことは、教員の年次評価に記載されるものの、昇進や昇給には実質的には影響しないとディレクターは説明しており、何よりも「興味をもち熱心に取り組む教員が教える、質の高い小規模のプログラムを維持するのが賢明である」(School of Education, 2001, p3)との考えから、このような選抜基準を採用している。このように、オナーズプログラムへの参加の選考基準は、①学生の専攻での成績、②学生の志望動機、

③学生の研究関心と合致した教員の有無、の3点となっている。

5-2 教育学研究科におけるオナーズカレッジ

教育学研究科のオナーズカレッジのシラバスによると、教育学研究科が実施するオナーズカレッジは次のようなスケジュールとなっている。なお、シラバスは2000年度のものを利用している(School of Education, 2000)。

表2 オナーズカレッジのシラバス(教育学研究科)スケジュール

(注: 教育学研究科のみのイベントに集中して書かれている)

2000年9月6日～25日

9/6(水)	18:00 歓迎のディナー、19:30 オリエンテーション
9/7(木)	13:00-15:00 図書館ツアーとデータベースの紹介、19:00-22:00 教育に関する映画鑑賞
9/8(金)	10:00-12:00 論文講読とディスカッション、13:00- 図書館での検索活動
9/11(月)	10:00-12:00 数学教育とジェンダー教育についての討論会、18:00 研究方法についてのラウンドテーブルと夕食
9/12(火)	10:00-12:00 授業観察に関するエスノグラフィーについての討論会、12:00 大学院生主催の昼食、18:00- 奨学金に関する情報提供のセッションと夕食
9/13(水)	10:00-12:00 グループ・ミーティング
9/14(木)	10:00-12:00 研究で利用する統計についての討論会
9/15(金)	10:00-12:00 統計応用のコンサルタントによるワークショップ
9/18(月)	(移動日)
9/19(火)	10:00-12:00 方法論に関するグループ討論会、18:00 大学院生主催による夕食
9/20(水)	9:45-11:45 論文の書き方についてのワークショップ(URA オフィス主催)、14:00- グラントの書き方についてのワークショップ、16:00- 地域研究についてのセッション、18:00- 地域研究ピクニック
9/21(木)	10:00-12:00 研究テーマについての最終口頭プレゼンテーション、12:00 キャンパス外のレストランで昼食
9/22(金)	(未定)
9/25(月)	17:00 までに論文の進捗状況について、2～3 ページにまとめたものを提出、18:30- 最終バンケット(研究論文の指導教員も招待される)

このように、オナーズカレッジに参加した学生は寮に住みながら、オナーズ論文に向けた研究活動を行う傍ら、①教育学の研究内容や方法について学ぶ討論会、②論文の書き方や図書館の利用の仕方についてのワークショップ、③奨学金やグラントの取り方についてのセッションに参加をすることで、研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付ける。そして、オナーズプログラム参加者や指導教員とともに夕食を取ったり、郊外に遠足に行ったりすることによって、彼らと交流を深めている。

6. オナーズプログラムへの支援

6-1 資金提供

研究助成金には、学生に研究費を出すものと、学生が教員の研究活動に参加をした場合にかかる費用を教員に出すものの2通りがある。学生に対して支払われる研究費には、短期間で行われる学生の研究に対する「クォーター・グラント」(1,500ドル)、オナーズ研究のように数クォーターにわたって行われる研究に対する「メジャー・グラント」(5,200ドル)、学生が専門学会で発表する場合の旅費として支払われる「カンファレンス・グラント」(1,500ドル)がある。その他、人文学・芸術・社会科学の分野の研究を行う2年生に限定して授与される「チャッペル・ロウジー・スカラーシップ(Chappell Lougee Scholarships)」(5,200ドル)がある(VPUE, 2008e)。2006年には総額390万ドルが1,250人の学生に対して支給されている。また、学生の中には、アーノルド・アンド・マベル・ベックマン財団(Arnold and Mabel Beckman Foundation)等の外部機関からの研究助成金を利用して研究を行う者もいる。これらの研究費は、実験器具の購入や調査旅行に行く場合の旅費、夏期研究カレッジの寮費の他、学生が教員の研究プロジェクトの補助を行った場合の謝金として利用される。

学生の研究を指導する教員に対して出される助成金は、3,000ドルから5,200ドルの間で支払われ、その用途は学生の場合と同様である。また、学科が学生の研究活動を促進するためのプログラムを開発・実施するための助成金も大学から支給されている(Bravman, 2007)。その他、米国科学財団(National Science Foundation)やハワード・ヒューズ医療財団(Howard Hughes Medical Institute)等の外部機関からの支援を受けている教員や学科もある。

6-2 夏期研究活動中の寮の提供

夏期研究カレッジ(Summer Research College)は、学年に関わらず、夏期休暇中に研究活動を行う学生のために提供される寮である。提供される期間は、8週間から10週間であり、夏期期間中に行われている学科主催の研究体験プログラムに参加をする学生や、教員の指導の下で研究を行う学生が入寮することができる。定員は、120名から140名程度である。

夏期研究カレッジでは、上記の活動が行われない夜間や週末に、入寮者と教員との夕食会や入寮者同士との交流会が、UARによって行われる。その他、指導教員との付き合い方やポスターによるプレゼンテーションの仕方、研究費の申請書の書き方等の研究を遂行する上で必要なスキルについてのワークショップや、大学院での生活について大学院生が紹介するセッションも行われる。この寮に入るためには寮費が必要だが、その金額は通常の寮費と比べて安く、またその寮費も前述の研究助成金を使って支払うことができる(VPUE, 2008f)。

6-3 研究発表の場の提供

学生が研究発表をする場として、「学士課程学生による研究と公共サービスのためのシンポジウム(The Symposium of Undergraduate Research and Public Service : SURPS)」が年に1度開催されている。ここでは、ポスター形式での発表が行われる。SURPSでの発表数は、2006—2007年度には、130件(グループ・プロジェクト含む)であった(VPUE, 2008g)。(写真右はSURPSの会場の様子。2006年10月12日撮影)。



このイベントには、URの活動を行っている学生やこれから始めようと考えている学生を中心に、メンターを務めた大学教員や卒業生も参加する。卒業生の参加があったのは、卒業生が同窓会のために集まるホーム・カミング・ウィーク(Home-coming Week)にあわせて開催されているからである。

もう1つ、学生が研究の成果発表をする場として挙げられるのが、「スタンフォード・アンダーグラジュエイト・リサーチ・ジャーナル(Stanford Undergraduate Research Journal)」と呼ばれる、学士課程学生の研究論文に限定された学術誌である。2002年に開始され、年に1度、ピア・レビューされた論文が掲載されている。この機関紙は学生によって運営されているが、大学による資金援助や教員によるアドバイスも行われている(SURJ, 2008)。

6-4 表彰の実施

優れた研究を行った学生に対する表彰には2種類ある。「ファイヤストーン・メダル(Firestone Medal)」が社会・物理・自然科学の領域におけるオナーズプロジェクトに対して、「ロバート・M・ゴールドデン・メダル(Robert M. Golden Medal)」が人文学や芸術の領域におけるオナーズプロジェクトや創作プロジェクトに対して授与される。毎年、50名程度の学生が選ばれ、学位授与式の際に授与される(VPUE, 2007h; Stanford Report, 2007a)。そしてURに関して卓越した指導を行った教員や指導した学生が非常に優秀な成果を出した教員に対しては、「アラン・コックス・メダル(Allan Cox Medal for Faculty Excellence Fostering Undergraduate Research)」が授与される。毎年1名の教員が選ばれ、ブロンズ・メダルと1,500ドルが与えられる(Stanford Report, 2007b)。

7. 学生の学習行動からみたオナーズプログラム

2章から5章においてスタンフォード大学の学士課程教育について、オナーズプログラムを中心に説明を行ってきたが、そこでの説明からも分かるように、スタンフォード大学

の学士課程教育は非常に多様な選択肢がある。そして、その選択肢は授業科目に留まらず、夏期休暇に行われるものもある。いずれも、学生が自ら課題意識を持ち、情報収集と申請を適宜行い、その申請のために必要な要件を満たすように、事前に準備をしなければならないものである。つまり、このような多様な教育機会を有効に活用するためには、学生それぞれが自らの目的に応じた教育計画を立てることが必要である。

このようなことから、スタンフォード大学では、学生の目的遂行のために必要な活動のモデルケースを紹介している。下記の表はオナーズの学位を取るためのモデルケースである(VPUE, 2008i)。

表3 オナーズのための典型的な4年間の行動計画

1年	興味を持った授業やインターンシップなどで研究を経験する。 チャペル・ロウジー奨学金や夏期研究カレッジに応募をして、関心のある領域についての研究を始める。 専攻を決める際には、希望する領域やそれに関連する領域のオナーズのために必要な要件についても調べる。 専攻以外でも取ることのできるオナーズプログラムを持つ学際的な専攻プログラムについても調べる。
2年	
3年	指導教員を探し、研究方法や研究計画を立てる。 オナーズ制作(honors work)や研究を始める。 春学期にオナーズプログラムの中のセミナーを取る。 3年生と4年生の間の夏学期の研究資金となる主要研究費獲得のための申請書を書く。 オナーズカレッジに応募する。
4年	オナーズ制作や研究に取り組む。 9月にオナーズカレッジに参加をする。 研究を完成させる。 オナーズ・アドバイザーの指導の下でオナーズ論文を書く。

8. オナーズプログラムの成果と課題

オナーズプログラムを履修することの利点について、スタンフォード大学は学生に対して、次のように説明を行っている(VPUE, 2008a)。

表4 オナーズを履修することの利点

<ul style="list-style-type: none"> ● 大学院やキャリア全体を通して追究していくであろう領域についての詳細な研究を始めることができる。 ● 大学院進学や就職の際に自分は独立した創造的な渇仰ができることを証明できる。 ● 専任教員との1対1の緊密な指導の下での発展的かつ独創的な研究活動に参加することができる。
--

- あなたの人生の様々な状況において役に立つ以下のスキルを身に付けることができる。
- 精神的な鍛錬、知的な判断と独立心、ある領域を深く追求する能力、自信、資料の把握、
- プロジェクトの計画と実施とそれを最後まで遂行する能力、挑戦を実現し成功する能力
- 世界の知識への貢献をすることができ、おそらく、あなたの人生における知的情熱の発見をすることができる。

進学・就職実績については、未だ全学的な調査は行われていないが、教育学研究科のオナーズプログラム評価委員会が 2001 年に卒業生に対して行った調査によると、「プログラムの卒業生はそこでの学習経験に高い満足度を示し、そこでの経験がその後の職業や進学に大きな影響を与えた」と報告されている。以下、その調査結果について詳細に紹介する (School of Education, 2001)。

2001 年に教育学研究科が 1997 年から 2001 年の卒業生に対して行った、電子メールを利用してのアンケートは、20 名の回答を得た。その結果は以下の通りである。

1. どのようにしてオナーズプログラムについて知ったのか。
 - ①新聞広告(0%)、②ロコミ(35%)、③チラシ(0%)、④教員(20%)、⑤学生便覧(25%)
2. オナーズプログラムに参加したのはなぜか(複数回答)。
 - ①教育者になりたいから(65%)、②教育に関して非常に良い経験をしているから(35%)、③教育に関して非常に悪い経験をしているから(10%)、④教育に関心があるから(65%)、⑤教員に薦められたから(30%)、⑥かつての教員やメンターに影響されたから(30%)、⑦教育の質を改善したいと考えたから(85%)
3. オナーズプログラムの次の 6 つの要素はそれぞれ 5 点満点で何点か。
 - ①教育に関するコース.....平均 4.30
 - ②指導教員との関係.....平均 4.00
 - ③論文執筆の活動.....平均 4.50
 - ④論文執筆に向けたセミナー.....平均 3.95
 - ⑤オナーズプログラムの他の仲間.....平均 4.21
 - ⑥研究論文の公開発表.....平均 4.10
4. オナーズプログラムがどれだけ知的に一貫性があり、学問的に厳密なものであったか。
 - ①非常に(15)、②とても(80%)、③ある程度(0%)、④あまり(0%)、⑤全く(0%)
5. オナーズプログラムはあなたのその後の人生やキャリアにどの程度影響を与えたか。
 - ①非常に大きい(50%)、②大きい (45%)、③ある程度 (5%)、④ほとんどない(0%)、⑤全くない(0%)
6. 現在の職業や教育活動は何か。(回答省略)
7. オナーズプログラムでの経験がその後の活動にどのような関係があるのかについて、述べよ。(回答省略)
8. オナーズプログラムの今後の改善に向けた提案(回答省略)

9. オナーズプログラムを未来の学生に薦めるか。

①強く薦める(100%)、②薦める(0%)、③おそらく薦める(0%)、④薦めない可能性が高い(0%)、⑤薦めない(0%)

同委員会はまたこれまでにオナーズ論文の指導教員を務めた4名の教員にインタビューを行い、①指導教員を務めた動機、②その満足度、③プログラムの成果、④今後に向けたコメント、の4点について回答を得た。以下がその回答である。

1. 指導教員を務めた動機

- ・ 学士課程学生が学校のために奉仕をすることに関心があったから。
- ・ 自分が改善に貢献できる問題だったから。
- ・ 指導学生が私の研究プロジェクトの研究助手の一人であったため、彼女の論文の指導をすることは当然のように考えたから。

2. その満足度

- ・ プログラムの満足度は、指導学生の準備がどれだけなされているのかということと、その学生の興味関心が教員のものと同程度に近いということに非常に大きく影響される。
- ・ 楽しかった。学ぶ意欲のある学生と活動することによって、高い満足を得た。
- ・ 満足のいくものであったが、自分の指導学生ではない学生の面倒を見なければならないのは重荷だった。私は自分の指導学生の事が好きであり、彼らを指導することを楽しんだ。
- ・ 指導学生の研究プロジェクトは私の研究と非常に近いものであったので、負担どころか、非常に価値のあるものであった。全く新しい研究領域の指導をしなければならないということになると、負担は大きくなるだろう。

3. プログラムの成果

- ・ 若者を教育に関する研究に向かわせることができる。
- ・ 私は指導学生を私が取り組んでいた研究グループに参加させ、そのグループの一部の側面を彼女の課題とした。彼女は優れた論文を書き、グループに貢献した。
- ・ 指導学生が研究を始める姿を見るのはエキサイティングである。
- ・ 特に学生が学校でフィールドワークを行った際に、私は新しい示唆を彼らから受けることがあった。彼らの研究に対する熱意に教員も刺激を受ける。
- ・ このプログラムは水準の高いものであり、教育学研究科を宣伝するためにも良い。また、このプログラムは、特にマイノリティーの学生が教育学研究に参加することを促す、重要なアウトリーチの役割を果たしている。

4. 今後に向けたコメント

- ・ 一年間に一人の学生であれば喜んで受け入れるが、その際に学生の研究関心や方法が私のものとは一致するかどうかについて慎重にならうと思う。
- ・ 学生の研究テーマが私のものと一致していることが必須である。

- ・学生の研究課題が私に何かできるものであれば、一名の学生を受け入れる。
- ・今年は6名の学士課程学生の指導を行ったため、自分の容量を超えてしまった。今後は、自分の研究と関係のある学生のみ限定して選ぶようにしたい。

評価委員会はまた、これまでに書かれたオナーズ論文の水準について検討するために、これまでの論文を、無作為に4篇抽出し、査読を行った。その結果、その水準は高いことが確認された。

このように、教育学研究科におけるオナーズプログラムは、学生・教員から高い評価を得ており、研究成果の水準も高いことが分かった。ただしそれは、学業成績が優秀で、教育学に関する研究を行うモチベーションの高い学生の中で、教員の研究関心に近いテーマで研究を行う者を選んでいくことが大きく影響しているといえるだろう。つまり、学生と教員の資質と興味関心の高さ、そしてその相性がオナーズプログラムの成功の鍵を握っている。

その事は、全学と学科のオナーズプログラムの担当者のインタビューにおいても、述べられていた。教育学研究科のオナーズプログラムのディレクターは、オナーズプログラムが成功しているかどうかという質問に対して「オナーズプログラムが上手くいくかどうかは、指導教員や学生の資質によるので、一概には言えない」と答えている。そして、オナーズプログラムの逆効果の有無に関する質問に対して、「学士課程における指導と研究」部門の副ディレクターは、まず「逆効果はない」と回答し、その理由を次のように説明した。まず、学生を選ぶ際にオナーズプログラムを問題なく遂行できる学生しか受け付けられないからである。そして、実施の途中にも問題がないよう、全学および学科のアドバイザーや専攻の指導教員によるアドバイスが行われているからである。年に1人か2人、研究に没頭するあまり通常の授業への参加が怠りがちになる学生がいるが、その学生にはアドバイザーによる指導がなされているという。また彼は、オナーズプログラムの問題に関して、敢えて言うならば「アドバイザーが忙しすぎる」と述べた。確かに、学生に対してこれだけの指導・支援を行った場合、教員やスタッフの負担はかなりのものであろう。

9. おわりに

本調査によって、次の3点が明らかになった。

1点目は、スタンフォード大学における「オナーズプログラム」とは、卒業研究とそのためのコースを意味するものとして捉えられており、州立大学のように一部の優秀な学生に限定されて実施されるプログラムという意味合いは弱い。

2点目は、オナーズプログラムは4年次に開始されるものだが、その前にオナーズカレッジに参加をすることで、より早期にオナーズに取り組むことができる。更に、現行のカリキュラムでは初年次より少人数セミナーに参加をすることができ、指導教員が見つけれ

ば、同じく初年次より大学からの支援を受けて研究活動を開始することができる。つまり、4年間を通して学生が研究活動をする事ができるようなカリキュラムとなっている。大学は、指導教員を見つけるサポートから始まり、研究費が必要な場合にはその資金援助、研究遂行のために必要なスキルを身に付けられるワークショップ、論文の添削サポート等、充実した支援体制をもって、学生の活動を支援している。

3点目は、オナーズプログラムに参加をした学生のみならず、指導教員を担当した教員による満足度も高いということである。これは、オナーズプログラムに参加をする学生の意欲と学力の高さや、教員の研究活動との両立が容易であることが関係しているようである。

一方、今後の課題として挙げられるのは次の2点である。

1点目は、一部の優秀学生に限定したオナーズプログラムやオナーズカレッジを実施している大規模州立大学の事例について、スタンフォード大学同様に特質を明らかにすることである。そして、2点目は、アイビーリーグ大学のオナーズプログラムがどのようなものなのかを明らかにすることである。

アメリカの大学は連邦政府による関与が弱いため、公立大学は州によって状況が異なり、また私立大学はそれぞれ独自性を持って大学を運営している。そのため、大学によって事例は多様であり、特にアイビーリーグ大学という潤沢なリソースをもって更なる卓越性を目指す有名私立大学と、そのような大学と限られたリソースの中で競争をする公立大学とでは、その戦略が大きく異なるようである。したがって、上記の2点について調べることによって、アメリカのオナーズプログラムのより詳細な特質を明らかにすることを今後の目的とする。

参考文献

清水一彦（2001）「大学におけるオナーズ・プログラムの開発研究」『基盤研究(C)報告』

田中義郎（2005）「大学教育において卓越性と多様性の共存を目指すプログラムの開発ーアメリカ大学におけるオナーズ・プログラムズの発展事例を中心として」『大学論集』第35集(2004年度)、広島大学高等教育研究開発センター、333-347項

山田礼子（2006）「オナーズ・プログラム：優秀学生に対してモチベーションの醸成を狙う」『カレッジマネジメント』140号、リクルート、26-29項

Bravman, John C. (2007) *VPUE Faculty Grants for Undergraduate Research*.

<http://www.stanford.edu/dept/undergrad/urp/FacView/FacRFP07-08.pdf>

Committee on Undergraduate Studies, Stanford University (1998) *Report on the Honors Program at Stanford University*.

http://faculty senate.stanford.edu/archive/1998_1999/reports/106125/106248.pdf

- Long, Brigit Terry (2002) *Attracting the Best: The Use of Honors Program to Compete for Students*.
http://eric.ed.gov/ERICDocs/data/ericdocs2sql/content_storage_01/0000019b/80/1a/18/8a.pdf
- Office of the University Registrar, Stanford University (2007) *Stanford Bulletin 2007-2008*. p.28.
- School of Education, Stanford University (2000) *Syllabus for Honors (Education) Schedule for SUSE Honors College, September 6-25, 2000*.
 ----- (2001) *Review of Undergraduate Honors Program*.
 ----- (2008a) *Student Profile 2005-2006*.
<http://ed.stanford.edu/suse/admissions/application/SUSE-Guide-Graduate-Studies-07-08.pdf>
- (2008b) *Undergraduate Honors Program in the School of Education*.
<http://www.stanford.edu/dept/SUSE/honors/info.htm>
- (2008c) *Undergraduate Honors Program: Application for Admission*.
<http://www.stanford.edu/dept/SUSE/honors.fft>
- Stanford Report (2007a) “Forty-two graduating students are honors with 2007 medals,” 2007.07.25.
 ----- (2007b) “Umran Inan awarded 2007 Cox Medal,” 2007.07.11.
- Sullivan, Robert R. and Randolph, Karin R. (1994) *Ivy League Programs at State School Prices: The 55 Best Honors Programs at State Universities Nationwide*, Prentice Hall.
- SURJ, Stanford University (2008) “About SURJ”.
<http://surj.stanford.edu/about/index.html>
- U.S. News (2008) *America’s Best Colleges*, U.S. News & World Report, p80.
- VPUE (2008a) “Honors”
<http://ual.stanford.edu/OO/honors/Honors.html>
- (2008b) “Honors Programs Descriptions by Department”
<http://ual.stanford.edu/OO/honors/HonorsPrograms.html>
- (2008c) “Bing Honors College, BHC Goals.”
<http://ual.stanford.edu/OO/honors/BingHonors.html>
- (2008d) “Bing Honors College”
<http://ual.stanford.edu/OO/honors/BingHonors.html>
- (2008e) “Research Opportunities”
http://ual.stanford.edu/OO/research_opps/ResearchOppurtunities.html
- (2008f) “Summer Research College”

http://ual.stanford.edu/OO/research_opps/SummerResearchCollege.html)

----- (2008g) “Applying to Symposium of Undergraduate Research and Public Service”

http://ual.stanford.edu/OO/research_opps/SURPSApplying.html)

----- (2008h) “Awards and Graduation Honors”

http://ual.stanford.edu/OO/awards_grad_honors/Awards.html)

----- (2008i) “Planning for Honors”

http://ual.stanford.edu/AP/planning_honors/PlanningHonors.html

ワシントン大学におけるオナーズプログラム

近 田 政 博

1. はじめに
2. UW オナーズプログラムの目標
3. オナーズプログラムの運営
4. 学生の申込・選抜方法
5. プログラム内容
6. オナーズ学生にとってのメリット
7. オナーズプログラムの効果
8. オナーズプログラムの学生へのインタビュー
9. 日本の大学への示唆

調査日：2008年7月24日

訪問先：ワシントン大学

応対者：James Clauss 氏（ワシントン大学オナーズプログラム・ディレクター）

調査者：近田政博

1. はじめに

ワシントン大学(University of Washington、以下 UW)は、合衆国北西部に位置するワシントン州のフラッグシップ大学であると同時に、全米屈指の研究大学でもある。ワシントン州がまだ準州(Washington Territory)であった 1861 年当時、準州議会によって大学設置法案が採択され、数名の篤志家によって土地が寄附・提供される形で設立された。したがって、UW は 1862 年に連邦所有の土地が各州に払い下げられることで設置された、いわゆる「土地付与大学」(land grant university)には該当しない。

UW のヴィジョンステートメントは次のように定められている。「ワシントン大学は、意欲的な学習環境と最先端の研究を通じて、多様な学生集団を責任ある世界市民と未来のリーダーへと育てる。ワシントン大学の中核をなすのは発見の精神である。本学は世界で最も複雑な諸問題について適切に解決策を見つけ、地域社会、ワシントン州、合衆国、世界における人々の生活を豊かにする¹。」そして、UW の価値 (values) を、統合(integrity)、多様性(diversity)、卓越性(excellence)、協同(collaboration)、革新(innovation)、尊敬(respect)という単語群で表現している。さらに、戦略的プライオリティとして、あらゆる面における卓越性(UW Standard of Excellence)、知の共同体(Academic Community)、研究における世界的リーダー(World Leaders in Research)、地域の恵みを活かすこと(Celebrating Place)、改革の精神(Spirit of Innovation)、世界市民(World Citizens)、公共の精神(Being Public)の 7 点が挙げられている。

UW に対する内外の評価については、U.S.News の 2008 年全米大学ランキングでは 42 位、Times Higher Education の 2007 年世界大学ランキングでは 55 位 (全米では 22 位) にランクされている² (ちなみに日本の大学は東京大 17 位、京都大 25 位、大阪大 46 位、東工大 90 位、東北大 102 位、名古屋大 112 位、九州大 136 位)。州立大学としては、UC バークレー、ミシガン大、UCLA、テキサス大に次ぐ。こうした実力から、全米公立大学のトップ校で構成される“public ivy”(定義はさまざま)の一つとして数えられることが多い。

UW のメインキャンパスはシアトル市北部に展開している。専任教員は約 3600 名、ポスドクなどの研究者ポストを約 600 名擁している。これまで 6 名の UW 教員がノーベル賞を受賞している。学生数は、学士課程学生 25,469 名、大学院生 11,763 名 (2005 年秋学期現在)。UW には 16 のスクールあるいはカレッジがあり (アーツ&サイエンス、建築・都市設計、ビジネス、歯学、教育学、工学、林学、情報学、法学、医学、看護学、海洋・水産学、薬学、公共政策、公衆衛生・地域医療、ソーシャルワーク)、それぞれが多様な学士課程と大学院課程のプログラムを提供している。大学院課程の管理・運営はグラジュエ

¹ 次のサイトによる (2008 年 8 月 7 日)。 <http://www.washington.edu/discovery/>

² Times Higher Education - QS World University Rankings 2007 (2008 年 8 月 6 日検索) http://www.topuniversities.com/worlduniversityrankings/results/2007/overall_rankings/top_us/

ート・スクール（大学院本部）が一元的に行っている³。

2. UW オナーズプログラムの目標

同プログラムの新入生向けリーフレットによると、UW オナーズプログラムは次のように紹介されている。

「UW のオナーズプログラムは、知を探究する情熱を生涯共有し続ける学部生と教職員からなる、活力あふれるコミュニティです。UW のオナーズプログラムは 1961 年から始まりました。このプログラムは、UW のもっとも学習意欲あふれる学生だけが体験できるプログラムです。このプログラムは大学で学ぶ際の中核となり、世界水準の研究大学のメリットを享受しながら、小規模カレッジのコミュニティを体験することができます。多様でダイナミックなオナーズプログラムに参加することにより、教室や実験室などの豊富な学習リソース、さらには地域社会や世界における学習機会を充実させることができます。この学習コミュニティのなかで、学生は教員との信頼関係を築き、同じ志をもつ仲間と切磋琢磨し、直面する問題を受け入れ、新しいアイデアを議論し、批判的に読み、効果的に文章を書くという機会を得ることになります。こうしたコミュニティに君も参加してみませんか？そう思うなら、ぜひ申し込んでください。あなたの才能と闘志に期待しています。」

オナーズプログラムのオフィスが入っている **Mary Gates Hall** は、シアトルが生んだ最大の起業家であるビル・ゲイツ氏（マイクロソフト社会長）の母親メアリー・ゲイツ（故人）の寄附による。メアリーは企業家であると同時に慈善活動家として高名であり、UW の評議員（州知事が任命）も務めた。同ホールの 2 階廊下の突き当たりには彼女の肖像画が掲げられている。

UW のオナーズプログラムもまた、大学から割り当てられる予算に加えて、篤志家からの寄附を歓迎している⁴。UW オナーズプログラムの卒業生が後輩のために奨学金を設置するケースもある。UW には例年 5,500 人の新入生が入学するが、入学時からオナーズプログラムを受けることができる学生（以下、「オナーズ学生」と略す）は 250～300 人程度であり、その割合は 5%程度である。

3. オナーズプログラムの運営

オナーズプログラムのオフィスには 6 人の専任スタッフ、5 人の学生ヘルパーが勤務し

³ Profile: University of Washington (2008 年 8 月 6 日)

<http://www.washington.edu/newsroom/profile/>

⁴ 2005 年 7 月～2006 年 6 月までの寄附者をみると、5 万ドル以上が 2 組、500 ドルから 2499 ドルまでが 7 組、499 ドルまでが 71 組となっている。Undergraduate Academic Affairs, University of Washington, *University Honors Program, The Pursuit of Discovery: 2005-06 Annual Report*, p.6.

ている。例年、非常勤教員を含めて、30～40人の教員がオナーズプログラムの授業を担当している。こうした授業担当教員に対しては、彼らの TA 予算をオナーズプログラムが負担している。

プログラム全体の年間予算は約 70 万ドル、オナーズプログラムの全予算は約 70 万米ドル（約 7560 万円）。学生は College Honors と Departmental Honors の両方併せて 1500 名いるので、学生一人あたりの年間予算は約 467 ドルとなる。プログラムディレクターのジェームズ・クローズ氏によれば、この額は決して潤沢とはいえない。



写真1 オナーズプログラムのオフィスが入っている Mary Gates Hall



写真2 Mary Gates 氏の肖像画（Mary Gates Hall の2階）

4. 学生の申込・選抜方法

オナーズ学生の大多数は、大学入学と同時に同プログラムに加入する。オナーズプログラムに申し込むには、通常の UW 志願書類に加え、小論文（オナーズ・エッセイ）、推薦書を提出することが求められる。オナーズプログラムの志願者は一般願書のうち、オナー

ズプログラムに関する箇所を記入する必要がある。小論文は与えられた課題について 500 語程度で論述する形式である。推薦者は、出身高校の教員や校長、カウンセラーなど志願者をよく知る者 1 名に限られる。UW に入学するためには高校の成績証明書や SAT を提出する必要があるが、高校の成績証明書はオナーズプログラムの選考には影響しない。人種や性別、志望する学問分野などを特別に考慮することはないが、多様性を反映するような配慮は行っているとのことである。2006 年度をみると、志願者 1,772 人に対して 806 人が合格し（倍率は約 2.2 倍）、このうち実際にオナーズプログラムに加入した者は 341 人である。大学 1 年生の春学期（クォーター制）の GPA が 3.5 以上ある場合は、途中から入ることもできる。

2006 年度のデータをみると、オナーズプログラムに選抜された新入生の高校での GPA は 3.92、SAT スコアの平均は 1386 点である。ちなみに、一般の新入生の高校 GPA は 3.6 ~ 3.7 程度、SAT スコアの平均は 1200 点前後である。オナーズ学生のスコアは私学のアイビーリーグの新入生と比較しても遜色ないことが同プログラムのニューズレターで紹介されている⁵。公立高校出身者は 87%、第一世代（家族の中で初めて大学教育を受ける）はわずか 7%、ワシントン州民は 82% である。人種別にみると、白人 61.4%、アジア系 26.0%、ヒスパニック・ラティーノ系 3.9%、アフリカ系 0.8%（不明 7.9%）となっており、白人とアジア系で 9 割近くを占める。つまり、地元の公立高校出身の白人あるいはアジア系の学生が主流を占めているといえよう。なお、外国人留学生もオナーズプログラムに申し込むことができる。

オナーズプログラムの学生であることを維持するためには、GPA3.3 を維持することが求められる。3.3 を下回ると仮及第となり、オナーズアドバイザーと相談することが求められる。その学期に 3.3 を上回ることができなければ失格となり、プログラムから外される。

5. プログラム内容

UW のオナーズプログラムは、①専用の授業、②研究活動、③地域奉仕活動(Civic Engagement)、④海外研修から構成される。さらに、⑤専用の宿舎(Honors House)、⑥専用の学生サークル、⑦専用の学生相談がある。これらを順に紹介したい。

① 専用の授業

オナーズプログラムの基本的なねらいは、少人数の学習コミュニティを提供することである。オナーズ学生は、一般教育のうち“the Areas of Knowledge”の履修が免除される代わりに、独自のカリキュラムを履修することが求められる。オナーズのカリキュラムで提供される授業は、UW 全学および学外から招聘された教員によって行われ、学際的・国際

⁵ UW Honors Program, *The Honors Post*, summer 2005, volume 2, Issue 2, p.4.

的な観点を重視し、議論や問題解決、論述を重視する点に特徴がある。これまで、「食物と環境」「仮想的世界・仮想的コミュニティ」「進化と人間の行動」などの授業が開講されている。これらの授業の受講者は平均 30 人ほどであり、新入生向けの一般教育の授業が数百人規模の大教室で行われるのとは対照的である。

なお、UW のオナーズプログラムは College Honors と Departmental Honors の 2 種類がある。College Honors は全学のオナーズプログラムであり、主として一般教養を重視する。Departmental Honors は各専攻が提供するオナーズプログラムのことである。College Honors では Honors Civilization、Natural Sciences、Honors Seminars の 3 領域（これを “Honors Core” と呼んでいる）の受講を求められる。Honors Civilization では歴史、人文学などの人文系科目が用意されており、これらの中から 6 科目を受講することが求められる。Natural Sciences では数学、物理学、科学、生物学、水産学、海洋学などの自然科学科目が用意されており、これらの中から 3 科目の受講を求められる。Honors Seminars では 2 単位分（何科目？）の受講が求められる。これに加えて、Departmental Honors として各専攻別に指定される 10～15 単位分の受講を求められる（ワシントン大学では一講義は通常 5 単位分としてカウントされる。）

つまり、College Honors に選ばれると “Honors Core” に加えて、Departmental Honors 両方の要件が求められるが、Departmental Honors に選ばれた場合は、各専攻が指定する科目を受講すればよい（“Honors Core” を受講する必要はない）。

なお、オナーズプログラム専用の授業はあるものの、そのためのオリジナル教材は作られていない。基本的には、一般の授業と同じく、教材の内容は各授業に任されている。

② 研究活動

2004 年には 191 名のオナーズ学生が学内で研究発表を行っている。2006 年のオナーズ学生のうち、61% の学生が教員の指導のもとで研究活動を行った。この割合は一般の学生よりも高いという。また、2006 年の夏には海外都市研究プロジェクトを実施し、17 名のオナーズ学生が UW での授業で研究目標や方法論を学んだ後にアムステルダムでフィールドワークを行い、スイスのローザンヌで行われた国際会議で発表を行った。その際の研究テーマは「アムステルダムの都市計画」「オランダにおけるヘルスケア：シアトルとアムステルダムの比較研究」「アムステルダムにおける移民のアイデンティティ」など。

③ 地域奉仕活動

2006 年 3 月の春休みに、10 名のオナーズ学生はミシシッピ州を訪問し、ハリケーンのカトリーナで家を失った人々のための住宅の再建を手伝った。2006 年のオナーズ学生のうち、サービスマンシップ（いわゆる奉仕活動を正規の教育プログラムとして組み込んだもの）に参加した者は 27% に上る。

④ 海外研修

これまで、教員がオナーズ学生を引率する形で、ローマ(UWのローマセンターがある)、アムステルダム、アルゼンチン、コスタリカ、シエラレオネ、ジンバブエなどを訪問している。学生の個人研究のための海外渡航も奨励している。旅行に要する費用については、オナーズ学生は威信の高い「ボンダーマン海外渡航フェローシップ」(Bonderman Travel Fellowship)に応募する権利がある。2006年のオナーズ学生のうち、外国に留学・研修したものは37%に上る。

⑤ 専用の宿舎

オナーズ学生には専用の宿舎(Honors House)に申し込むことができる。Honors House McCathyには132人、Lander Hallには227人のオナーズ学生が入居している(2006年)。ここではさまざまなゲームやスポーツ大会、映画鑑賞会、エクスカッションのプログラムが用意されている。軽食やドリンクも提供される。家賃は有料である。

⑥ 専用の学生サークル

Honors Student Advisory Panel	学生、職員、教員が懇談する機会の提供
Honors Croquet League	オナーズ学生のための全学クロケット大会
Honors Peer Mentors	上級生による新入生のサポート
Honors Student Advisory Panel	オナーズプログラムの優秀教員賞を学生が選ぶ組織

⑦ 専用の学生相談

学期中は、学生相談員が毎日オナーズ学生用のデスクを置いている。これに加えて、オナーズ学生は1年次と卒業前の2回、相談を受けることが義務づけられている。

6. オナーズ学生にとってのメリット

オナーズプログラムに選ばれることは、学生にとってどのようなメリットがあるのだろうか。第一に、UWの学生で全米の著名な奨学金を獲得した者のほとんどは、オナーズ学生である。たとえば、1985年以来UWで5名の学生がローズ奨学金(Rhodes Scholarship)を受けたが、その全員がオナーズ学生であった。同様に、2001年以来マーシャル奨学金(Marshall Scholarship)を受けた5名の学生全員がオナーズ学生であった。ゲイツ・ケンブリッジ奨学金(Gates Cambridge Scholarship)を受けた学生も全員オナーズ学生である。学内の学部長表彰、学長表彰を受ける優秀学生の大多数もオナーズ学生である。

また、2003年オナーズ卒業生に聞いたアンケート調査(回答者は48人)によると、49%は大学院進学(うち7%はロースクール、5%はメディカルスクール)、就職30%、旅行14%、インターンシップ2%となっている。このうち、進学先の大学院の内訳は、MIT、

スタンフォード、エール、ニューヨーク大学、南カリフォルニア大学、ロチェスター大学、ワシントン大学、コロラド大学など。ロースクールはペンシルバニア大学、ルイス・クラークカレッジ。メディカルスクールは、ワシントン大学、オレゴン医療科学大学となっている。就職先には、マイクロソフト、ボーイング、アマゾン・ドットコムなど、ワシントン州ゆかりの企業が並んでいる。



写真3 オナーズプログラムのオフィスにて。

ここには、これまでのオナーズ卒業生が写真付きで紹介されている。

紹介されている項目は、卒業年、専攻、オナーズ論文名あるいは研究プロジェクト名、卒業後の進路、オナーズがどのようにあなたに影響を与えたか、後輩へのアドバイスなど。

卒業証書については、College Honors は“With College Honors”、 Departmental Honors は“With Distinction”と追記され、一般の学生と区別される。

このように、多くのオナーズ学生が威信の高い奨学金を獲得し、著名な大学院に進学し、著名企業に就職していることは事実である。ただし、そのことはオナーズ学生に選ばれたことがプラスに働いているのか、こうした学生がもともと優れた素質を持っているからなのかは判然としない。同プログラムのディレクターに同様の質問を投げかけたが、「何とも言えない。そのどちらともいえる。」という回答であった。彼によると、「オナーズプログラムは教育プログラムであると同時に、奨学金獲得や著名大学院への進学といった学生のキャリアアップの手段としての性格が強い。正直なところ、教育プログラムとしては、それほど明確な哲学や首尾一貫性をもっているわけではない」と述べている。

7. オナーズプログラムの効果

上記のように、UW オナーズプログラムのオフィスでは、オナーズ学生の高校 GPA、SAT スコア、各種属性（出身高校、家庭状況、人種など）、大学 GPA、奨学金の受給状況、研

究活動を行った割合、外国で研修を受けた割合、地域奉仕活動に従事した割合、進学先の大学院、就職先などを細かく把握している。しかし、オナーズプログラムの教育内容が彼らにどのようなインパクトを与えたかを証明できるデータは見つからなかった。一般の学生と比較したデータもほとんど見いだせなかった。

はじめから優れた学生を選抜すれば、教育内容のいかんにかかわらず、一定の高いアウトカム（奨学金の受給状況、大学院進学など）が予想されるのは半ば当然であり、それがプログラムの優秀性によるのかどうかはわからない。つまり、優れた学生の学習意欲をさらに高める上で、UW オナーズプログラムが本当に効果的なのかどうかは、なんともいえない。



写真4 左がオナーズプログラムのディレクターであるジェームズ・クローズ氏

8. オナーズプログラムの学生へのインタビュー

2008年7月24日午後2時、同プログラムオフィスにて、オナーズプログラムの学生2人にインタビューする機会を得た。一人は公共衛生学を専攻する3年生の男子学生、もう一人は歴史学を専攻する4年生の女子学生であった。「オナーズプログラムに選ばれて、どのように感じているか」という質問については、二人とも非常に満足しており、知的な刺激を得ているとの回答が得られた。家族も喜んでいるという。その理由について尋ねると、オナーズプログラムの授業は少人数制で行われるために（他の授業では数百人の大人数授業もあるとのこと）、教員との親密さが増すことを二人とも指摘している。さらに、学内でも粒ぞろいの教員が授業を担当するため、リーディングやライティングのスキルを高めるための工夫が授業でなされ、学習意欲が高まったという。また、この男子学生は **Honors Study Abroad Program** によってアフリカのシエラレオネを訪問する機会が得られ、さまざまな経験をすることができたとのことである。

将来の夢については、男子学生はメディカル・スクール（大学院）への進学、女子学生

は NPO で働きたいとのことであった。また、二人とも全米トップクラスの学生に与えられるマーシャル奨学金のようなスカラシップに応募してみたいとの意欲を示した。

このインタビューを通して得られた印象は、オナーズプログラムは学生の学習意欲を高め、誇りを高めることに成功しているということである。授業内容の満足度が高いだけでなく、将来のキャリアを考える上でも大きなステップとなっていることが窺える。

9. 日本の大学への示唆

平等性の原理が強くはたらく日本の大学では、UW のようなオナーズプログラムは効果的に機能しうるであろうか。UW オナーズプログラムの特徴は、少人数制による学生相互・教員との連帯感の醸成にある。巨大な総合大学においてすべての学生を対象に少人数のアウトホームな教育プログラムを作るのは事実上不可能である。すでに日本の多くの大学では初年次セミナーのような形で新生向けの少人数プログラムを実施しており、その場合、さらにオナーズプログラムのような特別プログラムを設置する場合、それがどのような付加価値を持ちうるのかを検討する必要がある。

また、同時に考慮しなければならないのは、「**優秀な学生を育てようとする場合、優秀な学生だけを集める方が、学習効果は上がるのか**」という点である。優秀な学生同士で切磋琢磨する機会を与える方が効果的かもしれないし、あるいはキャンパスの多様性の中で多くを学ぶという観点からは逆効果なのかもしれない。残念ながら、この点についての明快な回答は本調査からは得られなかった。なぜなら、UW にとってオナーズプログラムは長年にわたって存在する、当事者にとっては所与のものであり、その教育プログラムがどの程度の効果を挙げているのかを実証するデータが蓄積されていなかったからである。2名の学生へのインタビュー結果をみる限りでは、学習意欲を高める上で一定の効果はあるようだ。

本調査で最も印象的だったのは、多様な教育機能（授業、研究プロジェクト、海外研修、地域奉仕活動など）を提供しているアメリカの主要大学のオナーズプログラムでさえ、その実際は奨学金獲得や著名大学院に進学する上での有利なキャリアパス（踏み台）になっているということである。ディレクター自身が、こうした選抜機能の方が本来の教育機能よりも大きいことを認めている。オナーズプログラムの日本の大学への適用可能性を考えるならば、同プログラムの教育機能のみならず、そのプログラムに選抜されること自体が持つ選抜効果、ブランド効果をどのように位置づけるかが鍵となるだろう。

参考文献・サイト

Undergraduate Academic Affairs, University of Washington, *University Honors Program, The Pursuit of Discovery: 2005-06 Annual Report*. (紹介パンフレット)

University of Washington, *Honors Program: Honors Admission Information, 2007* (紹介リーフレット)

UW Honors Program, *International Engagement, 2007* (紹介リーフレット)

UW Honors Program, *Annual Report, 2003-2004, 2004-2005*. (年次レポート)

University of Washington, Honors Program

<http://depts.washington.edu/uwhonors/> (2008年7月25日)

University of Washington, Honors Program, *Honors Requirements for the College of Arts and Sciences*. (UW オナーズプログラムのカリキュラム表)

グリフィス大学におけるオナーズカレッジ

鳥居 朋子

1. はじめに
2. グリフィス大学における学士課程教育
3. グリフィスオナーズカレッジ (GHC) の概要
4. まとめ

調査日：2008年12月1日

訪問先：豪州・グリフィス大学オナーズカレッジ・ネイサンキャンパス

応対者：Dr Jeanne McConachie (オナーズカレッジ・マネジャー)

Ms Kim Holmes (スタッフ)

調査者：鳥居朋子

1. はじめに

豪州では 1990 年代に連邦政府の高等教育予算の削減が実行された。それにともない、高等教育の統制・調整の方法が従来の行政統制から市場統制へと移行してきたとされる(杉本, 2004)。こうした変化は、日本の大学が置かれた状況と共通点が多い。もっとも、2007 年度時点で 39 機関（うち 37 が公立）存在する豪州の大学セクターは、日本や米国のそれと比してきわめて規模が小さい。豪州では、市場統制への移行に伴い大学の財源¹における授業料収入への依存度が高まるにつれ、私費による留学生や国内学生の獲得が機関の経営にとって重要課題となってきた。

高等教育の市場化の進行は、機関レベルの管理運営体制の変化と、高等教育の質保証を促している。とくに後者については、1990 年代に全豪レベルの質保証メカニズムを構築する動きが本格化している。具体的には、「豪州大学質機構 (Australian Universities Quality Agency: 以下 AUQA)」による 5 年周期の監査（機関評価）のほか、「豪州学習教授審議会 (Australian Learning and Teaching Council)」による優れた学習教授の取り組みへの報奨、2006 年に開始された「学習教授の成果に基づく資金配分 (Learning and Teaching Performance Fund: 以下 LTPF)」等の成果に基づく一連の奨励政策²が機関の高等教育マネジメントのあり方に与えている影響が大きい。

とくに、すぐれた教授・学習の成果を示した機関に報奨金が与えられる LTPF は、結果的に 39 機関の「序列」を社会に知らしめるという形で衝撃を与えている。この LTPF で用いられる評価の指標には、「リテンション（保持）」や、卒業生の評価による「優れた教授 (Good Teaching)」および「総合的満足度 (Overall Satisfaction)」が含まれているため、各機関ではこれらのスコアを伸ばすために、根拠データに基づく教授・学習活動の改善に余念がない。

歴史的に、オーストラリアの高等教育は英国文化が色濃く残るシステムとなっており、学士課程は 3 年制課程が標準であり、修学期間（分野によっては 4 年以上）で 240 単位 (credit points) を取得することによって学士学位 (Bachelor) が授与される方式である。また、優秀学位課程は、たとえば Bachelor of Arts with Honours の場合、標準の Bachelor of Arts の 3 年制に加えて 1 年間 (フルタイム) ないし 2 年間 (パートタイム) の修学において 80 単位の取得が条件となっている。すなわち、オーストラリアの大学における学士号の優秀学位 (Honours degree) は、通常の学士課程に特別の修学期間を上乗せする形になっており、標準の学士よりも専門的な学習を修めた証として授与される仕組みになっている。大学で授与される学位は学士のほか、修士 (Master)、博士 (Doctor) 等があり、

¹ 単年度の運営費における政府の公的資金補助は 50%を切っている(Harris and James, 2006)。

² LTPF による資金の総額は、2006 年 5,400 万豪ドル、2007 年 8,200 万豪ドル、2008 年 8,330 万豪ドルと推移している。なお、初回の 2006 年度は機関総体の評価であったが、2007 年度からは 4 つの広領域の専門領域別の評価—「科学・コンピュータ・工学・建築・農学」、「ビジネス・法学・経済」、「人文・芸術・教育」、「保健医療」—に変更されている。

専門の資格 (Diploma) や修了証書 (Certificate) も一般的である。

しかしながら、近年、学位の国際通用性の向上を意図し、北米および欧州の学士課程教育の改革動向をみすえた学位プログラムの改革や、学士課程から大学院課程への接続の円滑化に取り組む機関が登場してきている。たとえば、メルボルン大学は 2008 年に「メルボルンモデル」と総称される大がかりな学士課程プログラムの改革と学位の再編を実施した。これらは、従来の細かく専門分化したプログラムから、広範囲で学際的なプログラムへの移行という特質を備えている。

本稿が着目するグリフィス大学 (Griffith University) は、メルボルン大学やシドニー大学等のトップグループの大学の行動を視野に入れながら、独自の存在意義を追求する「第 2 グループ」に相当する。いわゆる、戦後の大学拡張期 (1960~70 年代) に設立された新興の研究大学であり、都市近郊に自生する豪州特有のブッシュ (藪) を切り拓いてつくられた中堅大学である。グリフィス大学は 2008 年に国内で初めて、従来の優秀学位の取得につながる専門領域別のプログラムとは異なる形の「オナーズカレッジ (Griffith Honours College、以下 GHC)」を開始したことで注目される。同大学は、高等教育の国際的な競争環境のもと、トップグループの大学とは異なった存在意義を追求している。

他大学に先駆けて、豪州初のオナーズカレッジ (Griffith Honours College: GHC) を創設したグリフィス大学は、いかなる戦略と目的のもと、同カレッジを運営しているのか、ウェブサイトの情報や内部資料、インタビュー記録を手がかりに検討していきたい。

2. グリフィス大学における学士課程教育

2-1 グリフィス大学の沿革と概要

クィーンズランド州に 5 つのキャンパス (Nathan, Gold Coast, Mt Gravatt, Logan, South Bank) を有するグリフィス大学は 1971 年に創設された公立大学である。その前身は、1881 年創設のクィーンズランド芸術カレッジ (1957 年にクィーンズランド音楽学校として継承) である。大学の名称は、サミュエル・ウォーカー・グリフィス卿 (前クィーンズランド首相、クィーンズランドの最高裁判所長官および豪州の最高裁判所長官を歴任) の名にちなんで付けられた。

グリフィス大学の近隣に、歴史の古い 8 つの研究総合大学でつくられる Group of Eight (GO8) のひとつであるクィーンズランド大学 (The University of Queensland) がある³。GO8 は、「サンドストーン (Sandstone/砂岩)」大学とも呼ばれる荘厳な建造物やキャンパスを誇るトップ大学群である。1975 年に教育活動を開始したグリフィス大学は、後発校

³ このほか、オーストラリア国立大学 (Australian National University)、シドニー大学 (University of Sydney)、メルボルン大学 (University of Melbourne)、ニューサウスウェールズ大学 (University of New South Wales)、モナシュ大学 (Monash University)、メルボルン大学 (University of Melbourne)、西オーストラリア大学 (University of Western Australia)、アデレード大学 (University of Adelaide) がメンバー大学である。

として革新的な役割を果たしてきた。グリフィス評議会は、専門的な学術コースを提供するだけでなく、学生の全般的な教育的成長も強調するというひとつの理念を展開した。この理念の核となったのは、主題志向の学科 (school) の創設であった。これらの学科は、問題解決型の研究や教育が集積している異領域の研究者グループによる学際領域で成り立つ。たとえば、他大学に先駆け豪州初の環境科学やアジア研究に関する学位を提供してきた。グリフィス大学は、国際的にも名を馳せている 6 つの研究大学がつくるネットワーク「革新的研究大学：Innovative Research Universities (IRU)」のメンバー校である⁴。

同大学の研究および教育の強みは、社会的反響の大きい問題を多く取り扱っている点にある。健康、アジアの政治や貿易とともに水や環境問題、持続可能な観光産業、犯罪学、音楽および芸術などである。産業界と親和性の高い実践的な課題が重視されているといえる。なかでも、環境科学研究に関するグリフィス大学の国内外の評判は高く、総じて、進取の気風が強い大学であると言える。

5 つのキャンパスは、ブリズベンからゴールドコーストまで、国内で成長速度の最も著しい地帯にある 3 つの都市にわたっている。122 ヶ国以上からの 37,000 人を超える学生が学び、グリフィス大学は現在、学生数 (student load) において豪州で 9 番目に大きな高等教育機関に成長している。教職員数は約 3,500 (フルタイム相当) の規模である (データは 2007 年度)。

さらに、1988 年の高等教育の国家統一システムの導入によって、Mt Gravatt キャンパスにあるブリズベンカレッジ、ゴールドコーストカレッジ、クィーンズランド音楽学校およびクィーンズランド芸術学校等の高等教育機関がすべてグリフィス大学に統合された。このため、ブリズベンーゴールドコースト地帯は、グリフィス大学の学生獲得にとって好条件の人口集中地域となった。これら地域社会の潜在的な高等教育需要に対する予測や計画は、1990 年代後半におけるグリフィス大学のマネジメントにとって大きな挑戦のひとつであったとされている。

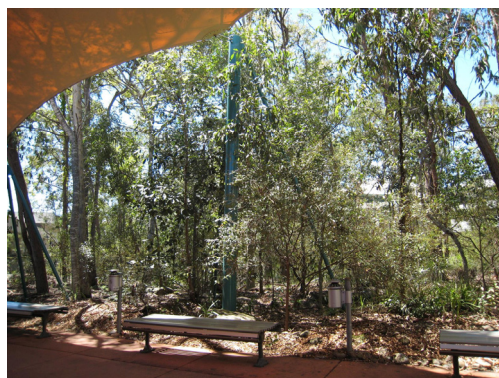


写真 1 郊外のブッシュを切り拓いたキャンパス
1960～70 年代に創設された新大学は「ブッシュ・ユニバーシティ」と呼ばれる

⁴ グリフィス大学の他、フリンダーズ大学 (Flinders University)、ジェームスクック大学 (James Cook University)、ラトロブ大学 (La Trobe University)、マードック大学 (Murdoch University)、ニューキャッスル大学 (The University of Newcastle) がメンバー大学である。

2-2 ミッションおよび学習・教授に関する戦略計画

グリフィス大学の最新の戦略計画「Strategic Plan:2009-1013」によれば、同大学のミッションは、革新、学問領域の結集、国際化、公平・社会的一体性、生涯学習への積極的な関与を通じて、クィーンズランド州、オーストラリア、国際社会の質を高めることとされている。さらに、中核的な活動のひとつである学習・教授（Learning and Teaching）に関しては、以下の4つの目標を掲げ、各々に対応する具体的な目標と指標を示している。

目 標
<p>総合：</p> <p>グリフィス大学は、それぞれに特色を有したキャンパスのネットワークを通じて総合的なプログラムを運営するに十分な規模の大学となる。</p>
<p>卓越：</p> <p>グリフィス大学は、2013年までに学習・教授の質に関する国内大学ランキングにおいて上位30%以内に入るために、個々のプログラムの成果を向上させる。</p>
<p>独創：</p> <p>グリフィス大学は、プログラムにおいて就労体験型の学習機会を学生に与え、さらに学生をグローバルな市民として育成することによって、特色ある学習経験を提供する。</p>
<p>成功：</p> <p>グリフィス大学は、常勤職に就いたり、進学に成功した卒業生の割合において国内大学ランキングの上位30%以内に入る。</p>

こうした機関の主要目標を達成するために、人（学生や教職員等）、財政、物理的施設・情報環境の領域別に支援戦略が組まれている。このうち、とくに学生への支援戦略として、機会均等・多様性計画（Equity and Diversity Plan）、障がい者行動計画（Disability Action Plan）、そしてGHCが位置付けられている。

2-3 学士課程プログラムを提供する学部

グリフィス大学には、38の研究センターおよび10の専門領域にわたる46の学科(school)等の部局がある。これらの部局が、268の学士課程プログラム、382の大学院課程プログラム、104の研究プログラムを提供している（データはいずれも2007年度）。

表1 各専門領域と対応する部局および下部組織

<p>1. Arts, languages and criminology/ Faculty of Humanities and Social Science ・School of Humanities, School of Criminology and Criminal Justice, School of Languages and Linguistics</p>

2. Business/ Griffith Business School
 - Department of Accounting, Finance and Economics, Department of Employment Relations, Department of International Business and Asian Studies, Department of Management, Department of Marketing, Department of Politics and Public Policy, Department of Tourism, Leisure, Hotel and Sport Management
3. Education/ Faculty of Education
 - School of Education and Professional Studies
4. Engineering and Information Technology/ Science, Environment, Engineering and Technology
 - Griffith School of Engineering, School of Information and Communication Technology
5. Health/ Griffith Health
 - Anatomy, Dentistry and Oral Health, Human Services, Medical Science, Medicine, Nursing and Midwifery, Pharmacy, Physiotherapy and Exercise Science, Psychology, Public Health
7. Law/ Griffith Law School*
8. Music/ Queensland Conservatorium
9. Environment/ Science, Environment, Engineering and Technology
 - Griffith School of Environment
10. Science/ Science, Environment, Engineering and Technology
 - School of Biomolecular and Physical Science

*ただし、法学の学士学位の課程は、他の学士学位との組み合わせによる5年制の2学位(double degree)コースのみ。
Griffith Universityのundergraduate programsのウェブページを参照し作成。

10の専門領域は、人文・言語および犯罪学(Arts, languages and criminology)、ビジネス(Business)、教育(Education)、工学及び情報技術(Engineering and information technology)、医療(Health)、法律(Law)、音楽(Music)、環境および計画(Environment and Planning)、科学(Science)、視覚芸術及び美術(Visual and creative arts)である。

たとえば、表1のように、人文・言語および犯罪学の領域は人文社会科学部(Faculty of Humanities and Social Science)に所属する教員が担当し、具体的には、人文学科(School of Humanities)、犯罪学・刑事司法学科(School of Criminology and Criminal Justice)、言語学科(School of Languages and Linguistics)においてそれぞれの学士課程プログラムを提供している。

2-4 学士課程における優秀学位(Honours degree)

豪州の学士課程は、3年間の修学期間(分野によっては4年以上)で240単位(credit points)を取得することによって学士学位(Bachelor)が授与される方式が標準である。一方、優秀学位課程は、たとえばBachelor of Arts with Honoursの場合、標準のBachelor

of Arts の3年制に加えて1年間（フルタイム）ないし2年間（パートタイム）の修学において80単位の取得が条件となっている。すなわち、豪州の大学における学士号の優秀学位は、通常の学士課程に特別の修学期間を上乗せする形になっており、標準の学士よりも専門的な学習を修めた証として授与される仕組みになっている。ただし、すべての学士課程プログラムが対応する優秀学位課程を持っているわけではない。

3. グリフィスオナーズカレッジ（GHC）の概要

3-1 設置の背景

豪州初のオナーズカレッジと称されているGHCの設置の背景には、学生のリテンションの向上という全豪的な課題が存在する。Holmes and McConachie（2008）の分析によれば、クィーンズランド州の高等教育セクター全体における大学志願者数の減少によって、グリフィス大学の学生層も質・量ともに直接的な影響を受けているという。入学登録者のデータは、大学周辺地域の多くの成績優秀生がグリフィス大学を第一志望として選択していなかった事実を示した。さらに、2008年度のLTPFの結果は、グリフィス大学の学生のリテンションや卒業生の成果が全豪水準を下回ったことを露呈するものであった。これらの結果は、社会における大学の評判や学生募集に対してだけでなく、在学中の学生の志や人生における機会に対してもネガティブな衝撃を与えるものと受け止められている。

こうした危機は大学の戦略計画において認識され、先の戦略計画に見たとおり、学生のリテンションの改善という特定の目標が掲げられている。これに先駆け、2002年にグリフィス大学はリテンションの改善と初年次の初期段階に力を入れた成績優秀生数増加に取り組むことを提言した「学生保持計画」を確立した。同計画はまた、「全学的な取り組み姿勢」の重要性を強調した。これらがGHC設置の駆動要因であったとされている（Holmes and McConachie, 2008, p.2）。

なおかつ、同大学が成績優秀生に対する教育への高い評判を得ることを志望した点がGHC導入につながったとも言われている。近隣にはトップ大学のクィーンズランド大学があり、きわめて権威的な存在感を示している。これに対しグリフィス大学は、受け入れた学生を手厚く支援する大学として成績優秀生に選ばれる存在になることを目指している。



写真2 ネイサンキャンパスのGHC事務局がおかれている建物

3-1 目的と対象

2008年2月に開始されたGHCの目的は次の3つである。

- ① 成績優秀生をグリフィス大学での学修につなぎとめ、学位の取得を達成させる。
- ② 支援や付加的な利益の提供によって成績優秀生を援助する。
- ③ 一般市民や中等教育機関、潜在的な志願者に対し、グリフィス大学が学術的な卓越を目指していることをアピールする。

GHCは、企業の最高経営責任者や研究者、教育家、クリエイターや21世紀の社会のリーダーとなることが期待される専門的知識や幅広い管理能力を備えた卒業生を輩出することを目標としている。とくに雇用主が大卒者に対して強く求めている「リーダーシップ」、「協同」、「グローバルな視野」、「研究や産業界における技能」の開発を進めることに力を入れている。

GHCは、いわゆる「仮想カレッジ」であり、特定の活動拠点や建物を持つ部局ではない。したがって、GHCは5つのキャンパスすべてで運営されている。全学から集められたボランティアの教授らによって成績優秀生に助言が提供される。ボランティア教員は、Deputy Vice Chancellorが専門領域のバランスを考慮しながら選ぶ。

GHCの学生は、大規模大学のなかで小集団を形成し、他では得難い特別に配慮された教育的経験を享受する。GHCの構成員の参加費は無料であり、活動資金のほとんどはスポンサーからの出資を受けている。

前述の優秀学位課程は、GHCとは制度的に別個のものであり連関を持たない。したがって、GHCを志願するに際しては、3年制以上の学士課程に入学し、選考基準に見合っさえいれば、学生はGHCへの応募要件を満たすことになる。選考の基礎的な材料となるのは、1. 学業成績、2. 志望文書、3. 個人的資質（大学での学習への動機、キャリアの志向性、成功への意欲等）、4. リーダーシップと地域社会サービス、5. 応募者が大学にもたらし得る利益である。このうち、選考にあたっては、特に学業成績が重視する。高校での総合成績（Overall Position: OP）のトップ層（OP1～6）の獲得に焦点が当てられている。このうち、最上位層である1～3ランクの学生は問題なく合格圏内であるが、対象の幅をOP6まで広げているのは、学業成績だけではなくリーダーシップ能力やコミュニティへの貢献力量等も勘案するためであるという。

現在のGHCの学生定員は140名であり、以下の応募者のカテゴリーからGHCへの応募が認められる。①成績優秀な初年次生（高校新卒者、非高校新卒者、留学生を含む）、②グリフィス・コネクト・スカラシップ（GCS）の受給者、③サミュエル・グリフィス卿スカラシップの受給者。（ただし、GHCの学生は全員がスカラシップを受けているわけではない。特定のスカラシップに応募するものは、GHCへも同時に応募するように連携している。実際にはGHCの学生の50%しかスカラシップを得られない。）

初年度にあたる2008年度は、学士課程の初年次生しか在籍していないが、いずれは大学院課程の学生にも広げていくことが計画されている。初年度の定員は140名である。2

年次以上の在学学生からの応募も可能だが（定員 20 名）、その場合は GPA で 6.5 ポイント（7 ポイントが最高）以上を獲得していることが条件になる。

ただし、2008 年度は以下の課程に所属する学生の応募資格は認められていない。医学の学士課程、大学院学位課程、高度研究学位課程、2 年制以下の学士課程（Diploma 等の取得課程）。このうち、医学の学士課程は必修科目の多い規定的なカリキュラムが編成されているため、現行のカリキュラムに GHC の活動を組み入れることが困難な点とその理由とされている。

3-3 GHC プログラムの特色

GHC が提供する各種プログラムの特色は以下の通りである。

- ① 高い目標設定：成績優秀生向けに開発された 4 つの特別コース（選択科目）が、2009 年度から GHC の学士課程の学生のみを提供される。具体的には、1. Modern Masters of Philosophy (10 単位)、2. Special Topic 2181 ENV (10 単位)、3. Project and Change Management (10 単位)、4. Special Project-Work Integrated Research Report の 4 コースである。GHC の学生は少人数規模の選択科目を履修できる。それらの科目は、上級かつ学際的な内容の授業であり、他の優秀生とともに学習を行うというきわめて選別的な性格を持つ。
- ② 個別対応：学生は各自のキャリアゴールに向けて、メンターから年間を通じて定期的なマンツーマンの面談を通じて指導や助言を受ける。
- ③ 協同：学生たちは多様な専門領域にわたる一流の研究者や教員、他の成績優秀生と知識や学習を共有する。
- ④ 世界における経験：学生たちは海外において数週間、数ヶ月あるいは 1 年、学習や仕事に従事することにより、グローバルな視野を獲得することが奨励される。
- ⑤ 実践的なスキル：講義で得た知識を現場で活かす機会が得られる。
- ⑥ 幅広い認知：GHC の学生たちは、大学コミュニティにおいて高い資質を持つ者として広くその存在が認められる。

これらの GHC のプログラムは、学士課程の学位を獲得する（すなわち、リテンションを高め、課程の学修を完了させる）ための経験やスキルを提供するように設計されている。GHC に参加することにより、学術的な知識だけでなく、リーダーシップや協同、コミュニケーション、グローバルな視野、研究や実業の経験等を得ることは、学位を取得すること、すなわち学士課程の学修を遂げることに有利にはたらくと考えられている。

また、成績優秀生同士のネットワークづくりをねらいとする無料の朝食会や昼食会も催される。初年度は教員スタッフが初年次生をホストしている。初年次生たちは概して内気で、人との交流を恥ずかしがる傾向にあるという。GHC では社交の機会をうまく提供することが大事だと考えられている。シンポジウムの後には「珈琲タイム」を設け、学生とスピーカーが自由に語り合える時間を提供する。低社会経済層出身学生（Low Social

Economic Students: Low SES) のなかには、フォーマルな食事の機会でのテーブルマナーを初めて体験する者もいるという。

3-4 GHC の学生に課される活動

すべての GHC の学生は、以下のイベントに参加することが義務付けられている。

- ① 第一セメスターの開始時に開催される GHC 学生限定のオリエンテーション：
オリエンテーションでは、GHC 学生に限定のオリジナルのラップトップバッグが無料で支給される。これは、仲間意識を育むとともに、5つにわたるキャンパスにおいて、GHC 学生同士がバッグによって仲間を認識できるという効果が見込まれている。
- ② GHC の年次討論会：グローバルな問題への示唆や、GHC の学生たちと教授陣とを結びつける機会を提供する双方向的なイベント

GHC での活動は、場合によっては学位取得に考慮される。たとえば、GHC 学生限定の特別コース、産業および研究経験、国際的な経験は学位取得要件に考慮され得る。学生は活動に参加する前に、単位の調整について詳細なアドバイスを受けることが奨励されている。しかしながら、GHC に参加することによって学位取得に追加時間がかかることはない。学生は、自分の学士学位課程の年限において GHC に在籍することができる。

GHC での実質的な活動時間は学生によって異なるが、セメスターにつき 10～15 時間は必要である。たとえば、特別オリエンテーション、毎セメスターに 1 度の助言プログラム、年に 1 日の GHC 討論大会、セメスターにつき少なくとも 1 回のリーダーシップ開発活動、その他の自由参加の活動などである。これらのイベント情報は、GHC 専用のウェブページで学生に周知される。

なお、試験合格証（学位証書）は一般の学生と同じである。ただし、GHC のメンバーであることを明記した標準の学位証書が授与される。一方、成績証明書は一般の学生のものとは異なり、GHC の学生であることが明記された成績証明書が発行される。

3-5 GHC の学生のプロフィール

高校を卒業してすぐに大学に入学した初年次生が圧倒的多数を占めている。男女比については、男性 42%、女性 58%の割合である。また、学生本人が家族における大学進学第一世代である者の割合は 41%である。

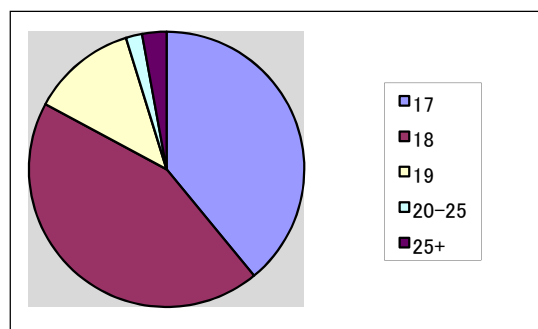


表 1 GHC 学生の年齢構成

ほぼ 9 割が、地元のクィーンズランド州の出身者である。出身地域は、主要都市が 76%、都市近郊が 17%、郊外が 7%である。なお、アボリジニおよびトレス諸島民や Low SES も含まれており、機会均等および学生の多様性に配慮がなされている。

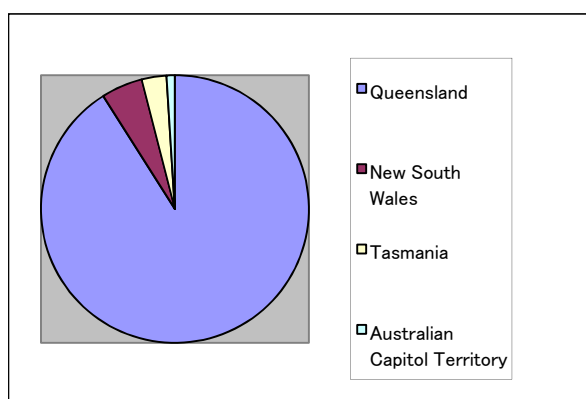


表 2 GHC 学生の出身州

3-6 成果と学生たちの反応

2008 年 7 月に韓国で開催されたアジアパシフィックモデル国連会議に参加した全豪 8 名の代表学生のうち、5 名が GHC の学生だったことは名誉なこととして評価されている。当初は国際的な大舞台で初年次生がどこまで健闘できるかわからなかったが、かれらは非常に努力をして成果をあげたという。国際的な体験を得た学生たちの声はきわめて肯定的である（別紙参考資料: Sample of Griffith Honours College Student Feedback）。

GHC の組織としての成果は、当局が設定した KPI（重点業績指標）の達成度にもみられる。機関の重要業績指標（KPI）のひとつであるリテンション目標値の 90%に対し、実績は 99.28%だった⁵。また、全員参加の活動であるオリエンテーション、リーダーシップ開発プログラム、助言指導、年次討論会はほぼ 100%の参加率を達成した。

ただし、当局が設定した KPI に照らして成果を測ることも大事だが、GHC のスタッフからもっとも重視されるのは、個々の学生の当初の期待目標がどれくらい達成できたかという点である。学生自身の振り返りでは、GHC の活動の成果として能力の広がりを挙げた学生が多く、さまざまな体験がかれらの自尊感情を深めたともいえる。

3-7 GHC の課題

GHC はまだスタートを切ったばかりの組織ではあるが、すでにいくつかの課題が把握されている。

⁵ 初年度のリテンションにかかわる興味深いエピソードとしては、ある学生が学びたい領域（機械工学）がグリフィス大学になかったため、他大学（Queensland University of Technology）へ移籍したケースである。しかし、クィーンズランド州大学志願センター（Queensland Tertiary Admissions Centre）のデータによれば、当該学生が再びグリフィスに復学申請を出していることが判明した。本人が希望し、GPA で 6.5 ポイント以上を獲得すれば GHC に復帰できることになっている。

① 発展的な持続可能性 (Sustainability)

GHC の持続可能性を高めるためには、学生自身の自律性が必要となる。スタッフからの一方向的な働きかけだけでは学生の依存心を強めかねない。マネジャーが交代した場合も想定しなければならない。学内的には、GHC の成果を周知し、その重要性に対する認知と理解をひろく得ること、対外的には、周辺地域から優秀な学生を多く獲得することが課題となる。人員確保の面では、現在のマネジャーやスタッフの後継者探しも課題だろう。小さなチーム（予算規模は、2名分の給与に加え、20,000 豪ドル/年）だけに、人材確保面での危機管理が大きな課題だと認識されている。さらに、留学生に対する募集は次年度から始める予定である。案内小冊子やウェブなども留学生向けのを整えてスタートする。

② 協同的な学習コミュニティ (Collaborative Learning community)

GHC の学生同士の結束を強めるためにも、同僚的な学習共同体の形成が期待されている。初年度の GHC 生は、次年度に後輩の面倒をみる責任があることを理解している。2009 年度からは、スタッフではなく、上級生が初年次生をホストする形に移行していく予定であるという。

③ 大学におけるリーダーシップ (Academic leadership)

GHC にとって重要な 2 つの目標は、学生の学士課程における実践的な経験を充実するとともに、大学院への進学を促すことである。GHC での在籍条件（高い成績の維持やイベントへの参加等）を厳しく課しているのは、グリフィス大学の教職員からみた GHC の評価を落とさないようにするためでもある。GHC 学生の代表 1 名（選挙で選出）が GHC 諮問委員会の一員として参加しているが、そうしたリーダーシップを発揮させながら、校内での認知も高めていくことが企図されている。

GHC の評判を耳にし、他大学もオナーズカレッジの導入を検討しているところがあるという。しかし、どのようなスタッフを雇うかに注意を払う必要があるということであった。マネジャーとスタッフは教員ポストではない専門職である。リーダーシッププログラムを促進するのが職務であるが、とにかく成績優秀生の親は、マネジャーが学生の学業成績に知悉していることを好む傾向があり、対応に苦慮することもあるという。

4. まとめ

豪州初のオナーズカレッジを創設したグリフィス大学は、全豪レベルの高等教育の課題のひとつである質保証を背景に、成績優秀生の獲得とリテンション、学士学位取得の完了を第一の目的としている。また、州内広域に分散する 5 つのキャンパスという物理的条件のなかで、ともすれば十分な個人的配慮が行き届かない成績優秀生同士を結びつけ、学習共同体を構築しようとする意図は特徴的である。また、クィーンズランド州の旗艦校であるクィーンズランド大学の存在を意識しつつ、大規模総合研究大学にない要素として、成績優秀生の小集団を組織し、より個別のできめ細やかな配慮を提供することで独自の強み

を發揮しようと努めている。すでに在学している優秀学生と教職員との個人的なつながりを増やし、適切な配慮を施すことが戦略となっている。

一方で、GHC は「大衆化」した大学におけるエリート育成の手段という印象も拭えない。今後の GHC の活動の広がりや成果の大学への還元にまつところが大きい。成績優秀生と一般学生を交えた学習共同体の構築がどのようになされるのかが問われる。さらに、最終的に、機関レベルの目標である教授・学習の質の向上にどのように寄与するのかが注目される。

日本への示唆としては、次の二点が挙げられる。第一は、手厚い個別配慮によって学士課程における学修の完了を支援している点である。とりわけ、成績優秀生といえども発達段階にある青年期の若者であるということを大学がしっかりと認識し、学業成績だけではなく、かれらの自尊感情の向上や人格的発達にはたらきかけようとしている点が積極的に評価される。第二は、とくに独自の施設を持たないヴァーチャル・カレッジという存在様式である。多領域かつ複数のキャンパスで構成される大規模大学において、個々の施設や設備に依存しない「人的つながり」を鍵的概念として集団を組織していく方法は一考の価値があると思われる。

参考資料（グリフィス大学内部資料）

- ・ Breakdown of GPA and OP（表：GHC 学生の GPA および OP の獲得状況）
- ・ Semester 1 2008 GPA Results（表：第 1 セメスター終了時の GHC 学生の GPA）
- ・ Sample of Griffith Honours College Student Feedback（GHC 学生の意見の抜粋）
- ・ What motivated you to study at Griffith University?（表：GHC への参加動機）
- ・ How did you hear about the Griffith Honours Griffith?（表：GHC をどこで知ったか）
- ・ What would you like to achieve by the end of your 1st year of being a member of the griffith Honours College?（表：GHC の初年度にどのようなことを達成したいか？）
- ・ GHC 学生の学士課程修了後の進路希望（表）
- ・ GHC 学生限定のホームページ（一部）

謝辞

本稿をまとめるにあたって、グリフィス大学高等教育研究センター長の Kerri-Lee Krause 氏、オナーズカレッジの Jeanne McConachie 氏に多大なご厚誼をたまわった。記して謝意を表したい。

参考文献およびサイト

Harris, Kerri-Lee and James, Richard (2006) “The Course Experience Questionnaire, Graduate Destinations Survey and Learning and Teaching Performance Fund in Australian higher education”, *Public Policy for Academic Quality*, The University of North Carolina at Chapel Hill, 1-16.

Griffith Honours College (2008) “2008 Virtual Faculty Report” (内部資料)

杉本和弘 (2004) 「オーストラリア：高等教育の市場化と高まる国際的プレゼンス」馬越徹編著『高等教育シリーズ 129 アジア・オセアニアの高等教育』玉川大学出版部、208-227 頁。

鳥居朋子 (2009) 「国際的な『アリーナ』に挑むオーストラリアの大学の IR」『Between』2009 年冬号、4-5 頁。

Griffith Honours College

<http://www.griffith.edu.au/griffith-honours-college> (2009 年 2 月 3 日)

About Griffith University

<http://www.griffith.edu.au/about-griffith/> (2009 年 2 月 3 日)

上海交通大学における「連続班」制度

近 田 政 博

1. はじめに
2. 「自主招生」(自主学生募集) 制度
3. 「連続班」の概要
4. 「連続班」学生へのインタビュー
5. その他の特別教育プログラム
6. まとめ

調査日：2007年9月13日

訪問先：上海交通大学高等教育研究所(当時)、教務処教学研究科

対応者：楊頡氏(高等教育研究所 副教授)

調査者：近田政博、中井俊樹(名古屋大学高等教育研究センター 准教授：特別協力)

1. はじめに

本稿では中国を代表する研究大学である上海交通大学における優秀学生プログラムについて紹介する。主として、入学時における優秀学生の特別選抜システムである「自主招生」制度、および優秀学生のための特別教育プログラムである「連読班」制度について取り上げる。

上海交通大学は 1896 年に設立された「南洋公学」を起源とする、中国で二番目に古い大学である。当初は工学系の大学として発展したが、1980 年代からは総合大学化をめざし、1993 年に始まった「211 工程」、1998 年から始まった「985 工程」など、世界ランクの一流大学を建設することを目指した国家プロジェクトにも採択されてきた名門大学である。さらに 1999 年には上海農学院を、2005 年には上海第二医科大学を統合して総合大学化を進め、今日では人文・社会科学も網羅する全国重点大学として知られている。

上海交通大学のホームページによると、2007-2008 学年度における学士課程の学生数(短大課程に相当する専科は含まず)は 20,265 人、大学院生は 13,802 人(修士課程 9,173 人、博士課程 4,629 人)であり、専任教員は 2,978 人である。学士課程において工学が 9,458 人(46.7%)を占めることからみられるとおり、今日でも工学系の規模が大きく、高い研究水準を誇っている。



写真 1 上海交通大学の入口

2. 「自主招生」(自主学生募集) 制度

中国の大学では毎年 6 月に全国統一入試を行っているが、これとは別に「自主招生」(日本語では「自主学生募集」の意味)という制度がある。この制度では、各大学が独自に学生を募集・試験することが認められている。中国の大学入試制度に詳しい南部広孝氏によると、「特定分野で秀でた能力があったり平時の学習成績が優れた学生に対して、全国統一大学入学試験での成績が当該大学に入学するうえで充分でなかったときのためにある程度の保障を与える」役割が期待されている(南部広孝、2008 年、8 頁)。つまりこの制度は、

日本の AO 入試のように学力以外の尺度を重視することではなく、基本的には優秀な学生の取りこぼしをなくすことをねらいとしている。同時に、特定分野にきわめて優れた学生の入学機会を提供するという意味も込められている。2008 年には中国全土で 68 の大学が「自主招生」制度を実施している。この枠は各大学の入学定員の 5%以内とされるが、学生の質が優れている場合は、それ以上受け入れることも認められている。

上海交通大学の自主招生制度は上海市の高級中学校（日本の高等学校に相当）の生徒のみに適用され、2007 年には最大 300 名の受け入れ方針が示されている。主管しているのは大学本部の教務処である。自主招生制度による選抜は、第一次審査では高級中学での成績や各種活動に関する書類選考が行われ、第二次審査では筆記試験や面接が実施される。上海交通大学の場合は数学、英語、国語（中国語）、コンピュータなどの科目による筆記試験と面接試験の両方が課されるが、同じ上海市内の名門大学である復旦大学では筆記試験のみが課される。上海交通大学の第二次審査は「ウィンターキャンプ」（原語：冬令営）と呼ばれ、1月に実施される。申請者は高校の推薦とともに次の条件が必要とされる。生徒自身による自己推薦も受け付けている。

- ・ 全国の 5 大科学オリンピックで省レベル予選 2 位以上の成績を収めた者
- ・ 省レベルの荣誉称号を獲得した者
- ・ 省レベルの各コンクール（数学、物理学、化学、英語、コンピュータ等）のうち複数を受賞した者
- ・ 徳・知・体・美の全面で発達し、学習成績及び総合的な素質がとりわけ優れている者

ウィンターキャンプに申請する学生は、高級中学の学習成績、各種の受賞証明書を提出し、その上で同キャンプの選抜審査を受ける。この審査結果が良好であれば 6 月に実施される全国統一入試における合格基準が一定程度緩和されることになる。

自主招生制度による合格者は、引き続き 6 月に実施される全国統一大学入学試験を受験しなければならない。自主招生制度に応募した学生は当該大学を第一志望とすることが求められる。その場合、通常の合格ボーダー得点よりも一定程度低い点数であっても合格できる仕組みになっている。つまり、自主招生制度の合格者には全国統一試験での合格ラインが緩和されるという優遇措置がとられている。上海交通大学では最終的な合格者のうち、成績が特に優れた 60 名は優秀新入生奨学金を全額または半額支給される。

3. 「連読班」の概要

「自主招生」制度によって入学した学生の多くは、「連読班」とよばれる優秀学生プログラムを受けている。上海交通大学では 80 年代に「少年大学生コース」と呼ばれる英才教育制度があったが、その評価が分かれたため、1995 年に「連読班」制度の形に改良された。初期の「連読班」の対象者は各種学術コンテストの優勝者であったが、現在では全国統一入試の優秀者や「自主招生」制度による合格者を対象としている。現在では年間 120 名程

度の学生が教員推薦や面接を経て、このクラスの学生として選ばれている。訪問調査によれば、その目的は特別に優秀な学生を選抜すること、マスプロ教育の弊害を改善することの2点であるとのことである。「連読班」は一般の学院・学系と比較して授業料が最も低く、大部分の学生には奨学金が支給される。なお、学生は自分の意思で「連読班」を脱退することができる。

中国の大学では日本と同様に専門分野別に入試を受け、初年次に「通識教育」（日本語の教養教育に相当）を受け、2年次から専門教育が始まるのが一般的である。これに対し、「連読班」クラスでは2年次修了時点まで教務処によって独自のカリキュラムが生まれ、特定の学院・学系に属さない仕組みとなっている。3年次以降は自分で専攻を選び、特定の学院・学系に属することになる。なお、「連読班」は指導教員制をとり、3～4年次の専門教育段階においても特定の教員が支援・指導する体制となっている。

「連読班」のカリキュラムで重視されているのは、学生が自主的に学習する態度を養うこと、研究能力を養うこと、実践能力やイノベーション能力を高めること、コンピュータや外国語の運用能力を高めること、などが挙げられている。「連読班」の基礎科目は学内の最優秀の教員がこれを担当し、さらに国内外の著名教授を招聘して特別セミナーが随時行われている。図書館の利用に関しても一般の学生よりもさまざまな点で優遇されている。たとえば、貸し出し冊数は大学院生と同じ権利が与えられ、インターネットを無料で利用できる。さらに、学生寮では一部屋を4人で利用できる（通常は一部屋8人程度で居住するケースが多い）。

「連読班」という用語には、学士課程・修士課程の一貫コースという意味が込められており、要件を満たせば定員枠に制限されずに無試験で大学院入学が認められる。中国では大学院入試も全国統一で一次試験が実施され（1月）、合格者は各大学別に実施される二次試験（4月）を受験する仕組みになっているが、「連読班」の学生はこれらを免除される。大学院に無試験入学を認められた学生は、学士課程在学中に大学院の授業科目を履修し、進学予定の研究室のプロジェクトに参加することが特別に認められている。なお、卒業証書には「連読班」の学生であることが明記される。

4. 「連読班」学生へのインタビュー

筆者らは2007年9月13日の午後に、上海交通大学教務処と高等教育研究所の協力を得て、「連読班」学生（7名）へのインタビューを実施することができた。以下は、そのインタビュー記録である。

通常の年間授業料は6,500元程度（約91,000円）だが、「連読班」に選ばれると若干減額され、5,500元（約77,000円）程度になる。学生寮に入る場合は授業料に加えて、毎月の生活費は600元（約8,400円）程度必要である。学生のバックグラウンドについて尋ねたところ、「第一世代」（家族の中で自分が最初に高等教育を受けた学生）の学生は半数程

度であった。インタビューはすべて英語で実施したが、学生の英語力に問題は感じられなかった。英語学習については小学校で正規の英語教育が始まる前に、幼少時から学習していたという学生が大多数であった。

「連読班」に選ばれるプロセスは、教員からの推薦を受けたのち、教務処の面接を受けたというケースが多かった。「連読班」では飛び級も認められるが、2つの授業で落第するとその資格を失う。授業内容は、通常のカリキュラムと比較して内容が高度であり、実験実習が多く組まれている。英語による専門科目の授業も行われている。進路については、米国などへの大学院留学および外資学系企業の人気が高い。ただし、自分の将来についてはあまり早いうちから専攻を決めるのではなく、クラブ活動の先輩学生や所属する学院・学系の先輩学生からのアドバイスを参考にしたいとの意見が多くみられた。



写真2 「連読班」学生へのインタビュー

5. その他の特別教育プログラム

上海交通大学には「連読班」に加えて、理科学系の各種国際コンテスト入賞に向けて編成された ACM と呼ばれるクラスが存在する。このクラスが創設された 80 年代当初は、当初は高級中学校 3 年生が大学での授業を受けられるようにすることを目的としていたが、今日では学士課程において高水準のカリキュラムを提供し、特に外資学系企業（マイクロソフトや NEC など）の研究所との産学連携プロジェクトや実験研究に参加することができるのが特徴である。1 学年 36 名で構成され、「連読班」と同様に、一定の成績を収めれば大学院試験を免除される。卒業生は大学院進学よりもむしろ外資学系企業に進学する傾向が強い（上海交通大学全体でも大学院進学率は 3 割程度とのことである）。

この他にも、上海交通大学では修士課程と博士課程の一貫コースである「直博生」制度、博士課程への入学試験が免除される「提前攻博」制度などが設けられている。2007 年から

は研究予算を大学院生の生活補助に充てることが認められている。こうした取り組みの背景には、90年代以降、中国の大学が研究志向を強めているにもかかわらず、最優秀の学生が外国留学してしまう現状を鑑み、国内重点大学の大学院を振興させようとするねらいがみてとれる。

6. まとめ

本調査によって、次の2点が明らかとなった。

第一に、上海交通大学では全国統一入試に先立って、大学独自の選抜試験である「自主招生」制度を実施している。その目的は、複数の受験機会を提供することで、学力優秀な学生あるいは特定分野に際立って優秀な学生を確実に確保することである。上海交通大学に限らず、国家重点大学の大多数がこの制度を導入していることから、中国の大学で優秀な学生の獲得競争が激化している現実の一端を示すものといえよう。

翻って日本の大学入試をみると、センター入試の後に個別大学による二次試験が実施されるが、いわゆる国立難関大学は前期日程に集中する傾向にある。AO入試などもあるが、これはどちらかといえば優秀な学生の獲得競争というよりも、少子化の中で入学定員を満たすための苦肉の策という性格が強い。つまり、国立難関大学に限定してみると、日本は受験機会を合理化する（減らす）方向に動いているのとは対照的に、中国の大学では受験機会を増やす方向で学生の獲得競争が進んでいるといえる。

第二に、上海交通大学では「連読班」をはじめ、優秀学生のための各種プログラムが用意されている。こうしたプログラムで重視されているのは、学生の自主的な学習態度を養い、研究意欲を高めることである。そのために、大学院の授業や産学連携プロジェクトに参加する機会が与えられ、図書館利用においても優遇されている。このほか、彼らの大部分には奨学金が支給され、一定の基準を満たせば大学院に無試験で入学でき、大学の卒業証書にも該当プログラムの学生であることが明記される。「連読班」の定員が120人、ACMクラスの定員が36人であることからわかるように、学生数が肥大化しマスプロ教育が常態化しつつある上海交通大学において、こうしたプログラムは際立って少数精鋭主義、エリート主義を打ち出している。

こうしたプログラムと比較できるプログラムは、日本の大学に存在するのだろうか。「専門性の高いゼネラリスト」育成を掲げている九州大学の「21世紀プログラム」は興味深い事例であるが、管見するところ、一般の教育課程との間に優劣関係はない。日本の大学では、平等性指向が強いためであろうか、「優秀学生のための特別プログラム」というコンセプトは成立しにくいように思われる。一方、改革開放後の中国では日本以上に能力主義が徹底されており、「自主招生」や「連読班」のような特別制度は能力主義に基づく選抜によって正当化されるというのが現在の中国の大学の基本スタンスのようである。

入手した資料・参考文献

- ・上海交通大学ホームページ：交大概況＞統計資料
<http://www.sjtu.edu.cn/about/stats/>（2008年4月16日）
- ・南部広孝（2008）『『自主学生募集』制度の概要について』南部広孝・楠山研『中国の大学入学者選抜における「自主招生」の現状（資料編）』（平成19～21年度科学研究費補助金中間報告書）、1-9頁、36-41頁。
- ・（中国語資料）『上海交通大学教育改革連読班教学管理方法（草稿）』2007年6月
- ・（中国語資料）『連読班概要』2007年3月
- ・（中国語・英語パンフレット）『上海交通大学高等教育研究所』2007年
- ・大塚豊（2007）「市場経済移行期の大学入学者選抜－経済に揺り動かされる教育」『中国大学入試研究 変貌する国家の人材選抜』東信堂、186-241頁
- ・文部科学省（2007）『諸外国の教育の動き 2006』、197-220頁
- ・楊頡（2006）「世界一流大学の構築－上海交通大学の飛躍」『AC21 ベンチマーキング報告書(I)：シドニー大学・ウオリック大学、上海交通大学の教育・研究』、49-68頁

謝辞

「自主招生」制度の実情については、京都大学大学院教育学研究科准教授の南部広孝氏に丁寧なアドバイスをいただいた。記して謝意を表したい。

資料1 上海交通大学教育改革連読班 教学管理方法（草稿）

翻訳：沈 晶晶

連読班の学生は「上海交通大学学生手冊」の各規定をまず遵守しなければならない。同時に、全面的に「因材施教」の原則を徹底し、連読班学生の総合的資質と能力を養成し、学生の教育と管理を規範するため、この管理方法を策定するものとする。

一、クラスの編成方法および目標

連読班は、優等生の中の優等生を選抜することに基づき、推薦生及び一部の他の新入生から選抜し、因材施教の原則の下で、学生が徳・智・体・美の全面的発展を遂げ、知識、能力、資質の協調統一、寛容的、複合的、開放的、創造的な特徴を持つ高水準、高資質、国際的な人材になるように精力的に育成する。

二、学制と専攻

連読班は、理工学の各専攻に対し、基礎教育（2年）プラス専門教育（2年）の4年制となっている。基礎教育段階では、学生は、学院と専攻に分けず、一般教育の理念に基づいて理工学各専攻の共通基礎をしっかりとマスターしなければならない。専門教育段階の学生は、自ら選択した専攻に入り、普通班の学生とともに勉学するが、連読班学生の待遇を引き続き享受できる。連読班に所属する学生は、基礎教育段階を修了していなくても、随時に連読班から離脱し、自ら選択した学院あるいは専攻に入って勉学を続けることができるが、連読班学生の待遇は引き続き享受できない。

三、分流制

連読班の全体の水準と教育の質を確保するため、連読班の学生に対し、分流制を実施する。分流の対象は、自ら他のクラスに転出することを希望した学生、また連読班の教育に適応できない学生、及び連読班の学籍管理要件に達していない学生となっている。教務処の許可を得た後、連読班から分流した学生は、学期末にその学籍に相応する学院に移さなければならない。

1. 学籍管理

連読班の教学要求が高いため、以下の（1）、（2）のいずれに当てはまる学生は、連読班から転出しなければならない。

- （1） 教学計画におけるすべての授業の修了成績が41点より低い者
- （2） 全ての授業のうち、2科目以上の科目に合格できない者

2. 成績管理

- (1) 早めに連読班から転出する学生は、転出時に、転入先となる専攻の教学計画に設けられていない科目の成績記録の取り消しを申請できる。
- (2) 連読班のために開講した科目（一般のカリキュラムの履修要件、試験が異なるものを指す）が、もし不合格の場合、再試験のチャンスを一回与える。再試験の成績が60点及びその以上の場合、成績表には60点と記入する。また、再履修を認め、再履修の成績を成績表に記入する。
- (3) 推薦生が早期入学の間に修めた単位及び成績は、本人の希望により、保留あるいは放棄することができる。保留した人は、その成績を成績表に記入し、その後の履修過程において、授業時間数及び履修要求が同等あるいはより低い科目に対し、教務処の許可を得た後に履修を免除することができる。放棄した人は、その成績を成績表に記入できず、相応の科目を再履修して、再履修の成績を成績表に記入しなければならない。
- (4) 上述各項以外の成績管理方法は、「学生手冊」に準ずる。

四、教学計画及び特色

連読班教学計画は、予科科目を選択することによりそのスタートラインを高くし、コース内容を難しくすることによりその基礎を厚くし、研究型教学スタイルの重視によりその要求を厳しくし、同じ科目の段階選択性、同類科目の要求選択性、コース全体の選択性を設けることにより効率の高いマルチスタイルの教育と学習を実現しようとする。とりわけ、下記の特徴が強い：

1. 学生の学習意欲と自主学習能力を養成し、学生に学習方法を伝授する。教育方法を改善し、授業時間数を減らし、評価・試験の方法を改革する。
2. 実践的な内容を増やし、科学技術活動及びイノベーション実践活動の展開を重視し、学生の实践能力及びイノベーション能力を高める。
3. コンピュータ、外国語の訓練を強化し、その応用能力の育成に力を入れる。
4. 同類の広い範囲内で、適応性の強い大専攻の専門基礎科目を設ける。
5. 連読班の科目担当教員が教育改革を実施して、授業数、教授方法、評価方法などにおいて普通班と異なる形をとることを奨励するが、教育と学習の質を保障しなければならない。

五、教学実施及び管理方法

連読班の教学実施及び管理方法は、「学生手冊」の条項以外に、以下のように設ける。

1. 連読班1、2年の基礎教育段階のカリキュラムは、教務処が統一的に設定する。3、4年の専門教育段階は、学生の入る学院／学系が設定する。
2. 連読班は、指導教員制をとる。指導教員の資質、閱歴、経験、思想方法の影響により、

学生が比較的速やかに大学生生活に慣れ、比較的高いレベルから人間性、知識、方法を学習できるようにする。学生が専門課程に進んだ後においても、各学院はできるだけ連読班の学生に指導教員を配置しなければならない。指導教員は、学生の後期学習計画及び科目履修を指導する上、学生の思想、生活、学習に関心を持ち、各種の科学研究訓練を展開できるように学生を指導しなければならない。その上、条件が整っている指導教員は、学生を学術活動に参加させ、学生のイノベーション精神と研究能力を育成しなければならない。

3. 連読班の学生が教学計画を修了し、大学その年度に設けた無試験大学院進学の基準に成績が達した場合、無試験大学院進学生の資格を獲得ことができる。本学の大学院に無試験進学する学生は、学部課程の学習に障害を及ぼさないことを前提にしたうえ、指導教員の下で予め大学院の科目を部分的に履修し、指導教員の研究プロジェクトに参加することができる。
4. 連読班の学生に対し、大学はそのコース選択、指導教員の選択においてより良い条件を与え、外国への留学チャンスを優先的に考慮する。

教務処教学研究科

2007年6月

資料 2 連読班概要

翻訳：沈 晶晶

上海交通大学連読班は、大学教務処の指導におかれ、教育改革を実施するフロンティアクラスであり、1995年に創立されたものである。連読班の学生は全国数学、物理、化学、生物及び情報類の学科コンテストで一等受賞者より選抜されるものとなり、この数年では自主応募生及び高等教育統一試験受験者から優秀な学生も一部選抜されている。

高等教育が徐々にマス化及びユニバーサル化に向かっているなかで、上海交通大学は教育改革連読班の学生に対し、引き続きエリート教育を施し、その主な教育理念は、学生の人類文明、社会文明及び歴史発展の過程に対する認識を深め、真理を追究し科学を愛する人格を持つ学生を育て、学生の組織能力、団結協力精神を培い、イノベーション精神及び実践能力を養い、学生の学習の楽しさへの追及及び享受を手伝うものである。

学生の個性及び興味の発達を尊重するため、連読班において専攻を設けず、第2学年の終了後に学生の志望により、各自を相応する専攻及び学院などに配属する。一般では、連読班の学生は第2学年までの任意の学期末に専攻を選択することもでき、早めに学籍を相応の学院／学系の普通班に転入して学習を継続することができる。連読班の教育スタイルに適応できない学生に対しては、教務処が学生の意思及び学院の意見を尊重し、当該学生に相応な学院の選択及び転入を手伝う。

連読班の学習方法は自主性及び研究型を強調しているゆえ、その教育効果は各方面から多く肯定されてきた。連読班学生は、出国留学、大学院の推薦入学、優秀学生の選抜、奨学金の獲得等において、常に学内の最も競争力の高いグループとなっている。

連読班の教育は、基礎段階と専門段階の2段階に分けられている。

基礎教育段階とは、正式に入学する前の段階（約2ヶ月）と大学の1、2年次を指す。入学前の段階においては、大学における学習への適応の手助けをする。正式な入学後の2年間において、主な授業は自然科学の基礎（内容が強化された数学、物理）及びその他の必修科目であり、学生が各自の興味に応じてその他の選択科目および他科目を履修することも奨励される。

3、4年次は専門教育段階であり、この段階において、学生が各自の状況に応じて自ら専攻を選び、相応する学院／学系に入って学科基礎科目及び専門科目の授業を履修する。連読班の学生は、大学が規定した無試験大学院進学要件に達した場合、定員枠に制限されずにその資格を獲得することができる。

上海交通大学は、学生の個性を尊重し、因材施教の原則を堅持し、教育改革を絶えず深化させていき、連読班の全ての学生がそれぞれの個性及び長所を發揮できるよう、またあらゆる金の原石がわがキャンパスにて最も美しい輝きを放つよう努力する。

2007年3月1日

北京師範大学における「励耘班」制度

近 田 政 博

1. 北京師範大学の概要
2. 北京師範大学の「自主招生」制度
3. 「励耘実験班」の趣旨と選抜方法
4. 「励耘実験班」学生へのインセンティブ
5. 「励耘実験班」の効果と学生へのインタビュー
6. まとめ

日 時：2009年9月11日

訪問先：北京師範大学 比較国際教育研究所、教務処招生弁室

応対者：高益民 氏（比較国際教育研究所 副教授）

虞立紅 氏（教務処招生弁公室 主任）

調査者：近田政博

1. 北京師範大学の概要

北京師範大学は教育部直属の重点大学であり、師範系の最高学府として知られている。そのルーツは 1902 年に設立された京師大学堂師範館である。現在の北京師範大学は教員養成や教育学、文理系の基礎科学などで特に優れた教育・研究成果を挙げ、国家規模の高等教育投資プロジェクトであった 211 工程や 985 工程にも採択されている総合大学である。同大学のホームページによると、北京師範大学は 25 の学院・系と 23 の研究所を擁しており、本科生（学部生）約 8500 人、研究生（大学院生）約 9500 人、長期留学生約 1900 人、教員数 2200 人に上る¹。このうち国家重点学科として、教育学、心理学、中国語・中国文学、数学、地理学（以上 1 級学科）、マルクス主義哲学、民俗学、史学理論・史学史、中国近代史、理論物理学、物理化学、細胞生物学、生態学、システム理論、環境科学、教育経済学・教育経営学（以上 2 級学科）が選ばれている。



写真 1 壮大な外観を誇る北京師範大学の図書館（北京市海淀区）

2. 北京師範大学の「自主招生」制度

筆者は、2009 年 9 月に北京師範大学を訪問し、教務処招生弁公室主任の虞立紅氏にインタビュー調査を行った。氏の職位は日本の大学で言うなら、教務部入試課長に相当する。補足説明と通訳は同大学比較国際教育研究所副教授の高益民氏に依頼した。

中国の大学では毎年 6 月に全国統一入試を行っているが、これに先駆けて、各大学が独自に学生を募集・試験することが認められている「自主招生」（日本語では「自主学生募集」の意味）という制度がある。そのねらいは、優秀な人材を多元的な尺度で選抜することに

¹ 北京師範大学のホームページは右の通り。URL: <http://www.bnu.edu.cn/> (2010 年 2 月 28 日検索)

ある。「自主招生」制度は2003年に全国の重点大学22校でスタートした。北京師範大学は制度発足時の22校の一つである。各大学がそれぞれの選抜方法を模索している。一部の大学では自主招生入試の応募資格を各省における重点高校の卒業者や科学系コンクールの受賞者に限定しているが、北京師範大学では受験機会の公平性の観点から、応募資格を限定しない。

北京師範大学の自主招生入試では筆記試験と面接試験の2種類の選抜が行われる。筆記試験は能力試験と呼ばれ、心理学の知見を活用して、一般知識よりも論理思考力や創造力、数学力を中心に審査する。志願者一人あたり10分程度実施される面接試験では、言語表現能力、知識の広さ、応用能力、論理的思考力、問題分析能力、学習意欲（原語では「自己発展願望」）などを審査する。いずれも、知識重視の全国统一試験とは異なる能力の測定を重視している。評価方法を改善するために、テスト項目、評価角度、成績分布などについて心理学の知見を活用して検証を重ねている。

諸外国の入学試験と異なり、中国では推薦試験は一般的ではない。これは公平性・透明性を確保するためである。選考時に縁故によるバイアスがかかっているかを、高校教員や受験生、その保護者に信用してもらうことが重要である。このため、面接審査員のための研修会を行ったり、審査団を文系・理系でランダムに組み合わせたり、いろいろな工夫を行っている。

自主招生制度の入試に合格した学生は、その後に行われる統一入試の合格ボーダーが20点ほど下げられる（つまり、20点分の加点となる）。2003年以降の結果を見る限り、自主招生試験合格者のうち、その後を受ける統一試験の点数が合格点を上回る場合と下回る場合の割合は、127人：145人（2003年～2009年までの7年間）であり、下回るケースがやや多い。この数字からは、本来ならば不合格だが、20点分のボーダーが下げられることによって救済される学生は少なくないと思われる。

結果的には、教務処はこの制度をますますうまくいっていると認識している。自主招生入試合格者の入学後の成績は、一般の学生と遜色ないという。2003年の自主招生学生8人のうち、2人が全学の最優秀学生ベスト10に選ばれた。2004年の自主招生学生45人のうち、7人が難関の国家奨学金を支給されている。また、この制度で入学した学生の授業料は、一般の学生と同じである。

この制度の意義としては、大学のブランド力を高める効果を期待できることである。重点大学だけが行っている制度なので、高校生に対するアピール効果は大きい。中国では大学教育が近年になって急速に拡大したため、親の世代の高等教育に関する知識が十分ではないことが多い。このため、高校生の進路選択において高校教員が大きな影響力をもつ。したがって、高校教員に対して北京師範大学の「自主招生」制度について理解を深めてもらうことは、同大が優秀な学生を確保する上でかなり効果を期待できる方法といえる。

「自主招生」制度の課題については、虞氏からのインタビュー結果と教務処招生弁公室のレビュー結果を総合すると、次のようにまとめることができる。第1の課題は、合格者

のうち実際に入学する者が3分の1程度にすぎないということである（2009年入試の場合は、合格者183人中64人入学）。多くの学生は複数の大学を受験し、合格通知を受け取ってから大学を選択するので、辞退者が多く生まれる仕組みになっている。このため、筆記試験と面接試験の実施コストが非常に大きくなっている。第2の課題は、北京師範大学の自主招生制度での入学者は特定地域（北京市、東北、華北など）出身の学生に偏りがちなことである。第3に、自主招生入学試験の受験料は統一入試よりも高く、応募者にとっては経済的な公平性に欠けることである。第4は、20点分の加点による合格判定への影響は小さくなく、このため自主招生制度の応募者は一部の人気専攻に集中する傾向があるという。第5に面接試験において学習意欲を評価しているにもかかわらず、一般の学生と比較して学習意欲が特別に高いとは感じられない点だという。

3. 「励耘実験班」の趣旨と選抜方法

北京師範大学には、優秀学生のための教育プログラムとして、2001年から「励耘実験班」という制度を実施している。「励耘実験班」の「励耘」とは、同大学元学長の書斎の名称に由来する。北京師範大学は「師範」の名を関するよう、教育改革への使命感を強く持っている。教育改革を全国に先駆けて行いたいという意欲が強い。他の重点大学にも似た制度があり、たとえば北京大学の「元培班」などがよく知られている。

現行の「励耘実験班」の選抜方法は、大学入学後にパンフレットを見て、自分で応募する仕組みとなっている。1年生の最初の学期の期末試験結果をもとに、上位20%の学生に申請する権利が与えられる。申請者の中から、まず各学院で筆記試験と面接が行われ、さらに全学レベルで漢詩の作成能力や数理能力などを問う試験が行われる。この試験は学内で「創造力試験」と呼ばれている。大学入学時の試験結果は選抜に影響しないという。2009年現在の規模は1学年90人となっている。たとえば教育学部の場合、上位20%すなわち15人程度の候補者のうち、応募した者は9人、このうち5人が選抜されている。

この制度の運用は試行錯誤の連続であった。2001年は「大理科実験班」と別称し、理科系の学生のみを募集し、経済的には困窮しているが優秀な学生を30人選抜した。基礎知識を身につけ、視野が広く、総合的能力と自主招生探求能力の高い人材の育成をめざした。1年次は通識教育（教養教育）、2～3年次は専門教育、4年次は卒業研究や大学院進学への準備という仕組みにして、従来の必修科目を減らして選択科目を増やした。

2002年は「大文科実験班」と別称し、人文社会科学分野の学際的な人材育成を狙いとして90人の学生を募集した（全国統一試験時に選抜）。1年次と2年次には専攻を設けず全学共通の基礎科目、学際的な総合科目を設置した。2年次の終わりに専攻を選択させ、専門学部への配属は3年次から行うようにした。その結果、学生の各専門分野（学院・系）に対する愛着が薄いように感じられ、学生の要求もいろいろと多かったという。

2003年は「文理総合実験班」と別称し、文系・理系の境界を外して共通教養教育を実施

し、文系と理系の学生の混成クラスを編成した。この年は全国统一試験時に 139 人を選抜している。全学共通の科目を 1 年次だけとし、学生の管理を各学部・学院ではなく、基礎教育部が一括して学生の管理を行うことにした。

2004 年は「優秀人材班」と別称し、学士課程と大学院課程を一貫してデザインし、大学院に学士課程の優秀な学生を確保することをねらいとした。全国统一入試とは切り離し、入学後に全学から自主的に応募する仕組みに変更した（152 人を選抜）。学生ははじめから各学部・学院に所属する方式に変更した。つまり、「励耘実験班」は各学部・学院に所属する学生にとって付加選択的なプログラムという位置づけになった。2004 年以降はこの制度は安定的に運用されている。

現在の「励耘実験班」は、入学後に学内の公募案内を見て学生が自由に申請する仕組みになっている。「励耘実験班」の学生はさまざまな学院に散在しており、夏期と冬期に集まり、合宿をする仕組みになっている。これらの合宿（キャンプと称している）では IT や英語のスキルについて集中的に学ぶ。このほか、専用のニューズレターを作成したり、他大学の同様の特別教育クラスと交流をしている。また、このプログラムの学生は各種の学術雑誌に論文を投稿することができる。

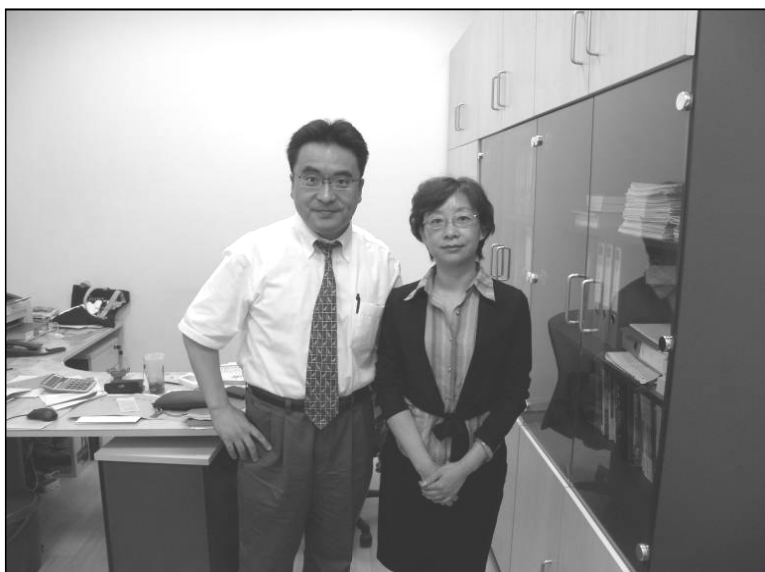


写真 2 右は虞立紅氏（教務処招生弁公室主任）

4. 「励耘実験班」学生へのインセンティブ

「励耘実験班」の学生には、奨学金支給や大学院進学に際して、特別のインセンティブは存在しない。前述した「自主招生」制度とも直接的には関係ない。「励耘実験班」学生の授業料は一般の学生と同額である。寄宿舎での待遇も一般の学生と変わらない。申請した研究課題に対して研究費が支給されることがあるが、大学院進学を希望する際は、一般の

学生と同様の入試を受けなければならない。何らかの優遇措置を講じないのかという筆者の質問に対して、虞氏は「そもそも高い能力をもった学生を選抜しているのに、さらに優遇措置を与える必要があるのだろうか」と回答している。

また、「励耘実験班」学生であることが卒業証書に明記されることはないが、別途、実験班の在籍証明書をもらうことができる。

5. 「励耘実験班」の効果と学生へのインタビュー

そもそも北京師範大学はなぜこの制度をつくろうと考えたのか。この制度は一定の効果を挙げているのだろうか。この問いに対して教務処の回答は次のようなものであった。

「励耘実験班」の効果測定については、その後の学業成績や学内外の学術雑誌への論文投稿などの調査、心理テストなどを実施している。北京師範大学の学生は中国でも最優秀の部類に入る学生である。「励耘実験班」を創設することによって、秀でた学生を確保することよりもむしろ、大学教育そのものを実験的に改革したい、少人数でそれを実践してみたいという意識が大学側に強いとのことである。この制度は中央政府から命令されたわけではなく、北京師範大学が自主的に実施したものである。また、虞氏は「高等教育の分野は一律の平等原理ではなく、学問分野に合う能力をもった人材を伸ばすべきである。よい人材を発掘し、彼らに投資する方が国家戦略上も適切だと思う」と述べている。

2009年9月11日（金）午後、同大学比較国際教育学研究所の応接室にて、「励耘実験班」の学生2名にインタビュー調査を実施した。対象者は、いずれも教育学部4年生の女子学生であった。「励耘実験班」の効果については、さまざまな学部の学生と知り合うことができるのが大事だと思う。みんな選抜されたエリートなので、社会や科学技術に対する意識が非常に高い。知名度はそれほど高いとはいえないが、学部別の縦割りになりやすい中国の大学において、他学部の学生と交流できる機会として貴重であるとのことであった。

学生からの希望としては、英語やパソコンなどの実務的な授業が多いが、学生の水準が高いので、こうした授業はあまり必要ないかもしれない。むしろ、他の学生との交流や討論の機会を増やしてほしいという意見が出された。夏期・冬期の集中プログラムでは大学側が用意した課題に徹夜で取り組むことがある。これについては、もう少しリラックスして自由に取り組めるようにしてほしい。集中プログラムは学内でやっているが、できれば学外で実施したらどうか、との意見が出された。

6. まとめ

「自主招生制度」と「実験班」は、ともに中央政府による管理が強くはたらいっていた中国の大学が自主性を拡大し、独自の選抜・教育システムを発展させようとする試みであると言えよう。同時に、知識だけに偏向しない選抜のあり方や広い視野に立って学際的に学

ぶ工夫など、中国の大学がもっている知識重視・専門重視の伝統的体質を再検証しようとする強い意思を感じ取ることができる。また国を代表する師範大学としての誇りから、実験的な大学教育プログラムに取り組みたいとする意欲を感じることができた。

励耘実験班の特質が少人数制と学際性である点はアメリカの主要大学のオナーズプログラムに類似しているかもしれない。ただし、アメリカのオナーズプログラムが準トップ大学の威信を高める装置として機能しているのに対し、中国の場合はトップクラスの重点大学による英才教育の装置として機能しているという違いがある。励耘実験班の学生に対して特別な優遇措置が講じられていないのは、この違いに由来するのかもしれない。

収集した資料

- ・(中国語資料)「2009年推薦学生および自主募集の専門家審査に関する説明」(原題「2009年保送生和自主招生專家組考核工作説明」)。
- ・(中国語資料)北京師範大学学生募集弁工室「北京師範大学自主学生募集の回顧と反省」(原題「北京師範大学自主招生工作回顧与思考」)2009年9月8日。

資料1 2009年推薦学生および自主募集の専門家審査に関する説明

翻訳：沈 晶晶

一、応募状況

1. 推薦学生

オンライン応募者 300 名のうち、応募要項に沿って必須資料を提出し、教育部所定の推薦学生条件に一致したのは 213 名、その内訳は、文系 58 名、理系 155 名。

2. 自主募集

オンライン応募者 1612 名のうち、応募要項に沿って必須資料を提出し、受験資格を有するものは 600 人あまり。そのうち、授業料不徴収の教育師範生 94 名。

二、専門家審査方案

初回審査に合格した推薦学生と自主募集学生のすべては北京師範大学の筆記試験と専門家審査（面接試験）に参加しなければならない。専門家審査の方法は以下のとおり：

1. 専門家のグループ分け

応募者の志願によって、文系・理系・授業料不徴収の教育師範生という 3 つのカテゴリの下でいくつかの専門家グループを設ける（ロシア語専攻および映画専攻は単独に測定グループを設ける）。1 つのグループに専門家を 3 名、受験者を 40 名近く、1 対 15 の比率で実施する。

文系グループが 5、理系グループが 18、授業料不徴収の教育師範生グループが 2、ロシア語専攻および映画専攻がそれぞれ 1。各学院専攻から選抜された専門家人数は、

学院専攻	専門家人数	学院専攻	専門家人数
地理	1	天文学	1
法学	3	外国語	4+単独 3
管理	3	文学院	5
化学	2	物理系	3
環境	2	心理	6
教育技術	1	情報	2
教育	3	芸術	単独 3
経済	7	哲学	2
歴史	1	政国	1
生命	6	エネルギー	1
数学	6	合計	60+6

2. 審査内容

専門家は受験者の総合素質について審査する。主には、学科の特長、問題分析能力、危機管理能力、言語表現能力、知識の範囲、自己発展の構想などを審査する。授業料不徴収の教育師範生に対して、上記の内容以外に授業料不徴収の協議書に対する認知を加えて審査する。受験者1人ずつ面接試験を受ける。面接時間は10分程度。

3. 評価基準

専門家審査の満点は100点。同じグループの受験者に対する評価は以下の基準に満たさなければならない。

90点以上（90点を含む）	<15%
80－89点	<15%
70－79点	<25%
69点以下（69点を含む）	>45%

専門家はそれぞれ点数をつける。グループ内3名の専門家がつけた点数の平均点は、その受験者の面接得点となる。

4. 資格確定

1) 推薦学生：文化科目とマルチ能力の筆記試験、及び専門家による面接試験の3種類の試験合格ラインをそれぞれ設ける。合格した上で、マルチ能力試験が20%、文化科目が50%、専門家による面接試験が30%、という比率で受験生の総合得点を決定する。総合得点の順位に従って合格者を決定する。

2) 自主募集：マルチ能力の筆記試験と専門家による面接試験の2種類の試験合格ラインをそれぞれ設ける。合格した上で、マルチ能力試験が50%、専門家による面接試験が50%、という比率で受験生の総合得点を決定する。総合得点の順位に従って、学科特長学生と授業料不徴収教育師範学生の合格者を決定する。

5. 試験時間 (2009年1月)

		推薦学生		自主募集	
16日	受付	時間: 14:00-18:00			
		場所: メインビル四季ホール			
17日	文化科目試験	時間	科目	受付	時間: 8:00-18:00
		8:00-10:00	数学		
		10:15-12:15	英語／ ロシア語		場所: メインビル四季ホール
		14:30-16:30	国語		
		19:00-21:30	マルチ能力 試験		
18日	専門家による面接試験 7:50-18:50			専門家による面接試験 7:50-18:50	

2009年北京師範大学推薦学生・自主募集学生の専門家面接試験の評価表（サンプル）

専門家グループ番号：

受験者数：35人

順番	オンライン 応募番号	氏名	性別	評価項目							総合得 点	備考	
				学科特長	言語表現力	知識の広さ	応変能力	論理力	問題分析力	自己発展願望			
1													
2													
3													
4													
5													
6													
7													
8													

- 1、授業料不徴収教育師範学生に対して、「自己発展願望」とは授業料不徴収師範教育に対する認識を評価する。
- 2、各評価項目について、A、B、C、Dの4段階で評価する。
- 3、各評価項目の評価を%に換算して合計した値が総合得点となる。ただし、D評価を得た者の総合得点は90点以上にならない。
- 4、総合評価得点の分布は、>90点は6人を超えない、80-89点は6人を超えない、70-79点は8人を超えない、70点以下は15人より多い。

評価の原則

専門家署名：_____

資料2 北京師範大学自主学生募集の回顧と反省

翻訳：沈 晶晶

2003年から、教育部は一部の大学で自主的な学生募集の実験を始めた。初代実験大学の1つとして、北京師範大学はこの件を非常に重視しており、わが国の大学学生募集制度を改善し、優秀人材の選抜システムを多元化し、素質教育改革を深化させる重要な举措と位置づけた。また、北京師範大学は大胆に改革し、積極的に実践し、科学的な選抜および合格基準の標準化などにおいて経験を積むことができた。

一、回顧

(一) 自主学生募集の位置づけの明確化

大学の自主学生募集は、その国の高等教育背景、大学の持つ社会的影響力、人材育成の位置づけなどの要因によって決められるものであり、当該大学がどんな人材を選抜したいかという質問への回答でもある。

北京師範大学は、総合的かつ特色のある、研究型の世界著名大学を目指して、国内外に競争力のある創造的人材育成を責務としている。自主的学生募集に関して、北京師範大学は、一方では、教育師範生の授業料無徴収という国家的戦略に応じて、高い総合素質と教員資質の持つ優秀な学生を選抜し、優秀な教育家育成の基礎作りに努めている；もう一方では、創造的国家戦略に応じて、総合素質が高く、優れた能力と創造的才能を持つ学生を選抜し、国内外に競争力のある優秀な人材を育成する。そのため、自主的学生募集において、基礎教育段階の学績と総合評価を重視しながら、個別の科目の特長にも注目しており、とりわけ文系学生の学校教育以外の多領域における才能と成果を認め、従来の推薦入学生の重理軽文の傾向を避けることができた。

(二) 公平な募集システムの構築

現段階のわが国および国民は2つの角度から教育に関心を寄せている。1つは、教育の質の問題；もう1つは、教育公平の問題。教育公平の程度は主に学生募集に現れているため、北京師範大学は自主的学生募集の申請において、自己推薦、高校確認、大学審査というプロセスを経て、受験学生を確定している。応募者の範囲を都区部の一部重点高校からすべての高校現役卒業生に拡大している。

(三) 多様の・相互補完的な募集システムの構築

評価の科学性は、学生選抜の有効性に大きな影響を与える。自主学生募集で選抜された学生を大学の学績評価に適応させ、よい発達を遂げさせるため、北京師範大学は評価の方法を非常に重視しており、関係する研究プロジェクトを発足させ、教育評価の専門家を招

聘して研究と改革を進めている。筆記試験と面接試験を組み合わせ、学生の潜在的能力を重視する評価システムを構築している。多項目の能力試験（筆記）において、論理思考能力と数学能力を中心に測定している。面接試験においては、学科の特長、言語表現力、知識の広さ、応変能力、問題分析能力及び成功への欲求などを中心に評価している。能力重視の評価は、大学入学統一試験の学科知識重視の評価とともに、相互補完的な評価システムを完成させ、特長のある学生の選抜に有利に動き、選抜された学生は入学後も優れた結果を見せている。また、評価方法を改善する研究には、多項目能力リストの改善、評価角度の開拓、面接試験の強化、面接採点と成績分布のモデルの構築、評価成績の有効性と比較可能性の改善、等が含まれている。

(四) 合格システムの標準化

北京師範大学は、自主的学生募集の標準化に努めている。時間面では、毎年 11 月に次年度の自主的学生募集の計画を公開し、冬休みの間に現場確認と評価を行っている。管理面では、ネット上のプラットフォームを構築し、応募、成績公布、成績発表のオンライン化を実現した。評価面では、公開した合格原則および優遇政策に基づき、出題を厳格にし、密封式採点を取り、面接を標準化し、学生募集チームの一致同意の下で各学科および全体の合格ラインを決め、自主的学生募集の規範および公平を保つことができた。

(五) 合格した学生は大学の人材育成の目標に一致している

2003 年から、北京師範大学は自主的学生募集を通じて 272 名の学生を採用した(表 1)。合格した学生は、大学全体の水準に相当しており、優秀な学生も突出している。

表 1 北京師範大学自主的学生募集の応募人数および採択人数

年度	応募人数	試験参加人数	合格人数	実際採択人数		
				統一試験合格 点数上の人数	統一試験合格 点数下の人数	合計
2003				2	6	8
2004	102	78	48	7	16	23
2005	401	107	61	12	33	45
2006	586	166	105	24	14	38
2007	1358	339	190	31	35	66
2008	125	96	86	13	15	28
2009	1612	483	183	38	26	64
計	4184	1269	673	127	145	272

2003 年、北京大学は自主的学生募集で 8 人を入学させ、その内の 2 人が大学最優秀学生ベスト 10 に選ばれた。その 1 人の心理学院の〇〇さんは、第 5 回「挑戦杯」中国大学

生ベンチャーコンクールで金賞を取り、学部の中に論文を4本発表し、首席で心理学院の大学院生に推薦された。もう1人の情報科学技術学院の□□さんは、2005年12月にACM国際大学生プログラムデザインコンクールに参加し、浙江地区銀賞と成都地区銅賞を取り、大学院入試総合成績1位で当該大学院に推薦入学された。

2005年、自主的学生募集では計45人を入学させ、そのうちの7人は国家奨学金を獲得した。化学学院の△△さんは専門成績が学年第3位(同学年に116人)、総合ランキング、科学研究、オリンピックボランティア活動などにおける優秀な業績が認められ、2007-2008年度の国家奨学金を獲得した。心理学院の○△さんは、専門成績は学年第1位(同学年90人)、第10回挑戦杯全国大学生課外学術技術作品コンペ2等賞に入賞、北京市特等賞に入賞などの成績により、2007-2008年度の国家奨学金を獲得した。

上述した4名の学生は、○○さんを除いて、すべて自主的学生募集で点数をプラスされた学生であった。

二、問題反省

(一) 選抜の公平性に改善の余地

自主学生募集には、一部の地域に集中している傾向が見られている。6年間の状況を見れば、自主学生募集の学生は北京、山東、吉林、河南などの華北・東北地域に集中している(表2)。

表2 北京師範大学自主学生募集学生の出身地

省	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
安徽	0	0	1	1	0	0	1
北京	0	0	1	3	20	19	23
福建	0	0	0	0	1	0	1
甘肅	0	0	1	0	0	0	0
広東	0	0	0	0	0	0	1
海南	0	0	0	0	0	1	0
河北	0	2	1	3	3	1	1
河南	0	1	3	3	5	1	4
黒竜江	0	0	0	2	0	0	0
湖北	0	1	4	2	3	1	1
湖南	1	2	2	0	2	1	0
吉林	2	6	15	5	11	0	3
江蘇	0	0	1	0	0	0	1
江西	1	1	0	0	2	0	1
遼寧	2	0	1	5	5	0	2
内モンゴル	0	0	0	1	0	0	4

寧夏	0	0	0	0	0	1	0
山東	1	4	5	3	6	0	14
山西	0	3	8	5	6	1	4
陝西	0	0	0	1	1	0	0
四川	1	2	2	1	0	0	0
天津	0	0	0	2	0	1	0
新疆	0	0	0	0	0	1	1
雲南	0	1	0	1	0	0	0
浙江	0	0	0	0	1	0	2
合計	8	23	45	38	66	28	64

(二) 評価方法に改善の余地

現在、北京師範大学は総合型人材の基本と核心となる素質について、面接方法を研究・改正を進め、マルチな能力を測定する範囲および評価方法を改革し、評価と選抜の有効性を改善しようとしている。

(三) 選抜の効率に改善の余地

1. 合格者の辞退

自主学生募集合格者の辞退はかなり深刻であり、入学者と合格者の比率は 1 : 3 になっている。多くの応募者はいくつかの大学の試験を受け、合格書を受け取ってから大学を選択したため、辞退者が多く出たことになっている。

2. 投入コストが大きすぎる

自主募集には審査、筆記試験、面接試験などのプロセスがあるため、人とモノの投入が多い。北京大学の毎年の経費投入は十何万から二十何万までにのぼり、入学者の人数に対する比率が高すぎたため、積極的展開の妨げになっている。

また、自主募集の受験費用も普通の受験より高いため、応募者にとっては公平性の欠けた選抜となっている。

(四) 並行志願採択方式改革もたらした影響

各大学の自主募集に関する優遇政策が異なっており、合格点数を下げるころもあれば、点数を足して専攻を選ぶという方法もある。後者の場合、だいたい 5・30 点を足しているが、20 点を足したところは多い。受験後の点数に基づいて志願大学を選ぶ省・地域では、募集者の成績が平均化する傾向があるため、20 点の加点は影響がやや大きく、自主募集の応募者は一部の人気専攻に集中している。

三、改革の反省

大学受験回復してから 30 年経ったなか、学生募集の改革は、志願記入（試験前志願記入方式から試験後志願記入方式へ、段階的志願方式から並行志願方式へ）と学生採択の面に集中して、志願大学選択のリスクを一部回避したと同時に、点数要因の重要度がますます高くなった。この傾向は、現在行っている素質教育改革の方向から大きく離れている。したがって、自主学生募集とは素質教育へ導き、大学の選抜自主権を拡大させ、人材選抜方法の多様化を促進する重要な改革であり、研究と改革を深化させ続けなければならないものである。北京師範大学は今後において、改革の重点をその選抜の有効性、特にその測定と評価に集中させて、人材育成の目標に貢献することである。政府側の改革としては、学生採択方法および学生の応募方法に重点を置くべきと考える。提言としては、教育部は、応募者の中等教育段階成績の公開など自主学生募集の情報をさらに公開する政策を打ち出して社会からの監督を受けながら、自主募集試験の合格者の志願選択を制限する基準を作成しなければならないと考える。また、公平のため、自主学生募集の数を同年度全受験者の 5% の比率（特集人材の比率に相当）に制限したほうが適宜ではないかと考える。

北京師範大学学生募集弁工室

2009 年 9 月 8 日

第2部 日本国内の大学における優秀学生のための特別プログラム

九州大学の 21 世紀プログラム

近 田 政 博

1. はじめに
2. 学生の選出方法
3. オナーズプログラムの内容
4. 対象学生へのインセンティブ
5. プログラムの効果
6. まとめ

調査日：2010 年 2 月 2 日

訪問先：九州大学 高等教育開発推進センター、教育改革企画支援室

応対者：副島 雄児 氏（同センター 教育プロジェクト推進部門 教授）

田尾周一郎氏（同センター教育プロジェクト推進部門 助教）

小湊 卓夫 氏（同センター 高等教育開発部 准教授）

田中 岳 氏（教育改革企画支援室 准教授）

調査者：近田政博

1. はじめに

九州大学では専門分化した教育体制に対する批判や反省が 90 年代から存在し、長年にわたり議論を重ねてきた。1996 年には、将来計画小委員会等において学際的な新学部を設立する構想が浮上した。さまざまな理由により新学部設立は困難であることがわかったが、その代わりとして 2000 年 3 月に 21 世紀プログラム（以下、21 プロ）を設置することを決定し、2001（平成 13）年度から学生募集を行った。この際に、入試募集単位ごとに定員を 1 名ずつ割り、「21 世紀プログラム課程」として割り当てた¹。法人化の前年にあたる 2003（平成 15）年度には、21 プロ専任教員として高等教育開発推進センター内に教授と助手（当時）のポストが一つずつ純増となった。事務組織は学務部全学教育課の中に 21 世紀プログラム係が設けられており、係長 1 名、係員 1 名が配置されている。



写真 1 低年次生が全学教育科目を受講するセンター2号館（伊都キャンパス）

2. 学生の選出方法

2-1 選抜方法

九州大学では一般の学部入試とは別に21プロ専用の選抜制度があり、10月から11月にかけて一次選抜と二次選抜が実施される。これらの入試業務はアドミッションセンターが担当している。一次選抜は書類審査で志願票や高等学校調査書その他、志望理由書、活動歴報告書の提出を求め、これらを総合評価する。二次選抜では二日間にわたり、初日は3種類の講義を聞いて、それぞれについてレポートを作成する。二日目午前は前日の講義のテーマについてグループ討論を行い、午後は与えられたテーマに関連する内容の小論文を作成する。さらに、小論文作成の途中に面接が行われる。

¹ 6年制の医学部医学科、歯学部、薬学部臨床薬学科からは定員を拠出していない。

平成21年度入試の志願者は104人、合格者は28人（3.7倍）であった（募集人員は26人）。不合格者は九州大学の一般入試に受験することは可能である。また、毎年若干名ではあるが、1～2年次に限り他学部から2年次への転籍も認めている。

2-2 志願者数と合格者数

図1は同プログラムの過去の志願者数を示したものである。これによると、志願者は80名から140名の間を推移している。志願者は年によって大きく変動している。定員は2001年度（平成13年度）と2002年度は18人であったが、2003年には21人、2004年度以降は26人となっている。

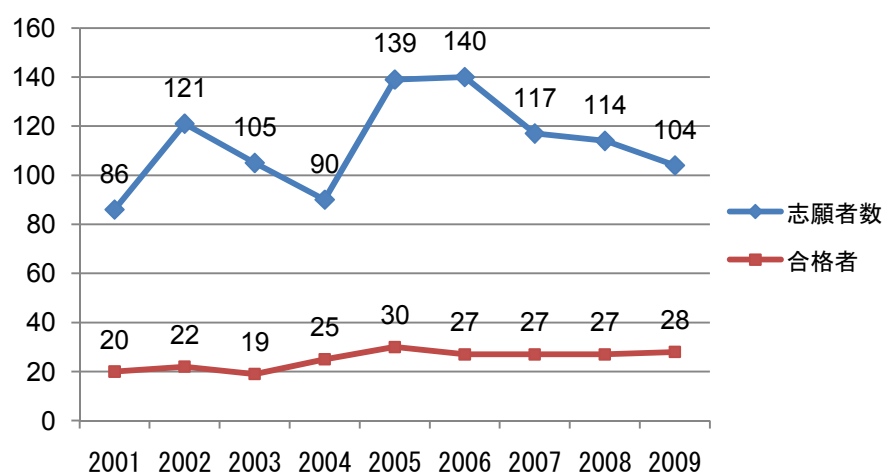


図1 21プロの志願者数

出典：「九州大学 21世紀プログラム課程」ウェブサイトの「過去の選抜結果」より集計
<http://www.21cp.kyushu-u.ac.jp/exam/past.html>（2010年2月2日検索）

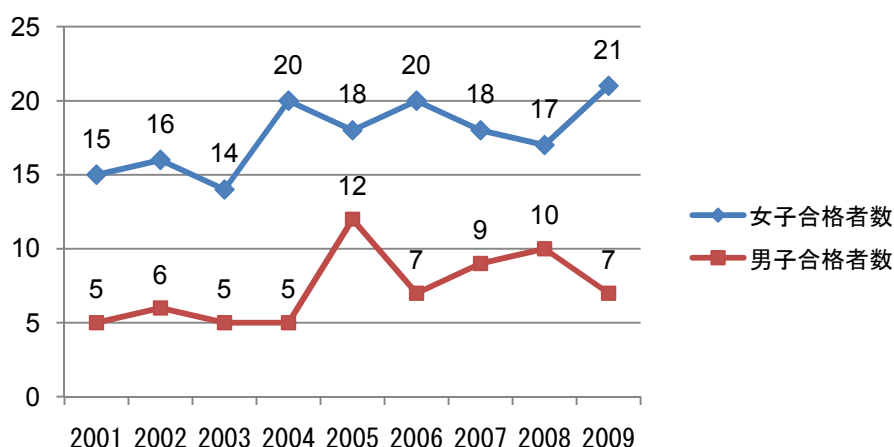


図2 21プロの男女別合格者数

出典：「九州大学 21世紀プログラム課程」ウェブサイトの「過去の選抜結果」より集計
<http://www.21cp.kyushu-u.ac.jp/exam/past.html>（2010年2月2日検索）

次に、合格者数の性別内訳を示したのが図2である。一貫して女子が男子を上回っており、男女比は、最大で1:4、平均で1:2.4となっている。志願者数においてはそれほど男女の差は大きくないが、男子の合格率が一貫して女子よりも低いことが原因である。たとえば、2009年度入試の合格率をみると、女子は35.0%（60人中21人合格）であったのに対し、男子15.9%（44人中7人合格）であった。

男子の合格率が一貫して低いことについては同プログラムの専任教員も憂慮している様子が窺えた。こうした現象が起きる理由を尋ねたところ、女子の方が面接や小論文などの入念に入試準備を行っている、男子に比べて女子の方がおしなべて活発で言語表現能力が高い、などの意見が出された。九州大学全体に占める男女比はほぼ7:3であるが、21プロではこれがほぼ逆転している。

3. オナーズプログラムの内容

3-1 基本コンセプト

21プロでは、基本理念として「21世紀を担う人材の育成」、「創造を引き出す知識と基礎的な知識」、「専門性の高いゼネラリスト」、「『外』に開かれた知識」の4点を掲げている。とくに強調されているのは「専門性の高いゼネラリスト」育成である。この点については、特定領域について専門知識を有しながら、同時に関連するさまざまな専門領域を横断し、これらを広範囲な視点から有機的に統合するようなリーダーシップを発揮する人材であると説明されている。21プロの意思決定機関として全学組織の21プロ専門委員会が置かれているが、日常の実務は専任教員およびワーキンググループが担っている。

3-2 プログラムの内容

21プロの学生は、興味のあるテーマに関連する各学部の専門科目を横断的に学ぶ。一人ひとりがオリジナルの時間割を組むため、履修指導などきめ細かにフォローする指導教員が「チューター」として各学年に配置されている。チューターの人選は21プロの専任教員が行い、個別に依頼している。学生の志向性、男女比、出身地域を考慮して、専任教員は各チューターに4~5名の学生を割り当てている。21プロの学生には入学式後に3日間かけてオリエンテーションを実施する。さらに、年2回、専任教員、チューター、学生が一堂に会する合同チュートリアルを開催し、前学期の活動報告と今学期の活動計画を立てる。

21プロの学生が受講する科目は、大きく全学教育科目（33単位以上）と専攻教育科目（76単位以上）からなり、卒業には124単位以上の取得が必要になる。全学教育科目の必要単位数はやや少なめであるが、一般の学部とそれほど変わらない。21プロの独自性は、その専攻教育科目にある。独自の科目としては、①チュートリアル（チューター教員からの個別指導）、②プログラム・ゼミ、③課題提示科目、④21世紀プログラム英語、⑤特別科目・社会連携科目等がある。

①のチュートリアルは4年間必修（8単位分）であり、大学での学習・生活や進路の相談を受けることができる。ただし、チュートリアルの単位はGPAにはカウントされない。②のプログラム・ゼミも4年間必修であり、1～2年生合同のジュニアゼミと3～4年生合同のシニアゼミがある。③の課題提示科目は1年次必修であり、専攻テーマの絞り込みに役立つようにオムニバス形式の講義が提供される。④は一般の英語科目に比べて会話、討論、論理を重視した内容になっている。

また、21プロでは卒業論文の作成が義務づけられ、チューターとは別に自分の希望するテーマに適した指導教員を学生自身が探し、その教員から了解を得る仕組みになっている。卒業論文の作成や卒業研究の遂行においては、一般の学生に混じって各学部の教員から指導を受けることになる。卒業時には学士（学術）の学位記が与えられる。

4. 対象学生へのインセンティブ

4-1 財政措置

奨学金や授業料免除などにおいて、21プログラムの学生には特段の優遇はない。ただし、九州大学全学協力事業基金による交換留学の奨学金（月額8万円支給）については、毎年20名枠のうち10名分を21プロに優先することが申し合わされている。独自に開設されている英語科目（21世紀プログラム英語）と合わせると、相対的に21プロの学生は海外留学に有利な条件が与えられているといえる。人件費を除く21プロの年間予算は約600万円である。

4-2 学習支援

21プロの学生には専用の学習スペースが設けられている。これまでは六本松キャンパスと箱崎キャンパスに21世紀交流プラザが置かれ、同プログラムの学生に集まる場所を提供してきた。平成21年度から全学教育が全面的に伊都キャンパスに移転したことに伴い、伊都キャンパスのセンター2号館の一角に21プロ用の講義室や専任教員の研究室が設けられ、実質的に、六本松キャンパスが備えていた21プロの中核機能は伊都キャンパスに集約されたといえる。

事務局の21プロ課程係では独自に『21世紀プログラム 学生の手引き』を作成し、学生に配布している。この冊子ではカリキュラムの仕組みや履修手続きについて詳細な説明がされている。一方で、21プロ学生による冊子も発行されている。21プロの学生は毎年『Orbit』という名称の広報誌を制作し、後輩学生へのガイダンスに活用している。この冊子の経費は21プロの予算から支出される。記事の中心は、個々の学生がどのようにカリキュラムを組んで大学生活を送っているか、そして大学時代にどのように将来計画を立てているかである。上級生が下級生にアドバイスを贈るという視点で制作されているため、親しみやすい内容となっている。

5. プログラムの効果

5-1 学習効果

21 プロではその教育理念と成果を検証することを目的に、卒業生の状況を追跡調査し、大学院および企業等における社会的評価を収集・蓄積している。毎年、数回程度の訪問調査を実施し、報告書にまとめている。調査の方法は、学生の受け入れ担当者に対し、①現在の業務（研究）内容、②個別の卒業生に関する感想、③21 プロに関する意見・要望などに関する聞き取り調査が主となっている。また、21 プロが当初の目標通りの成果が挙げられていると思うかどうかについて専任教員に尋ねたところ、21 プロの学生のモチベーションが高いことは、九大の教員全体にも知られており、一定の評価を受けているとのことであった。

5-2 受講生の反応

21プロの現役学生3人にインタビューを実施することができた。2年生2名（男子、女子）1年生1名（女子）であった。21プロの長所を尋ねたところ、特定の学部にとらわれずに履修できるようになっており、カリキュラム上の自由度が大きい。さまざまな分野のことを学ぶ学生が刺激しあうことでコミュニケーションの能力をつけられる。自分の知的関心が変化した場合も、これに合わせて学習内容を柔軟に変えることができる。少人数なので、同級生同士の横のつながりや情報交換もできる、などの意見が出された。

自分自身の課題としては、いろいろな分野の勉強ができる半面、4年間で何をやったのかを明確に答えるのが難しいという点があるという。初期の頃は専門性における軸がないことを不安視する学生が少なくなかったが、今日では上級生から下級生への情報伝達がスムーズに行われているので、以前ほどではないとのことである。また、キャンパス間の移動が大変で、移動時間分のロスが大きく、好きな授業を履修する際の障害になるという。この点は一般の学生と同じであるが、21 プロではカリキュラム上の自由度が大きいので、移動のハンデをいっそう大きく感じるのかもしれない。全学教育が六本松キャンパスから伊都キャンパスに移転した後も、上級学年の者は箱崎キャンパスで学ぶ者は今でも少なく、箱崎に残っている21プロ学生とのコミュニケーションが十分にとれていないとの指摘もあった。

高校時代にどうやって21プロのことを知ったのかと質問したところ、高校の先生から紹介された（2名）、新聞記事を通して知った（1名）とのことであった。受験勉強の方法については、一様に「まったくつかめない」「ストーリーが描けない」というコメントが出された。彼らが知る限りでは、予備校等においても21プロのための講習会は存在せず、このため対策を立てようがないという。21プロ受験生の多くは、センター入試対策をしている一般の受験生と変わらない学習をしている者が大半であるという。ただし、21プロの学生は個人差が大きいので、中には21プロだけをめざしてくる学生もいるとのことである。



写真2 21世紀プログラム専用のゼミ室にはさまざまな学習図書も用意されている
(伊都キャンパスのセンター1号館内)

5-3 進学・就職実績

21プロの学生には大学院への進学が推奨されている²。専任教員の話によると、21プロ学生の大学院進学率は約55%である。九州大学の学士課程全体の大学院進学率は約5割であるから、それほど大きく変わらないように見える。ただし、21プロには人文・社会科学系を専攻する学生の割合が多いことから、九大の人文・社会系学部の大学院進学率と比較すると、相対的にはかなり高いといえる。

進学・就職実績については、成果報告書あるいは年次報告書にまとめられている。主な進学先としては九州大学、東京大学、大阪大学などの大学院が挙げられる。主な就職先としては、一部上場企業および九州の地元企業が多くみられる。



写真3 21世紀プログラム専用の学習室
(伊都キャンパスのセンター1号館内)

² 「九州大学 21世紀プログラム課程」(ウェブサイト)における「卒業生の進路」ページ。
<http://www.21cp.kyushu-u.ac.jp/system/graduate.html> (2010年1月11日)

6. まとめ

21 プロでは特定の学部には属さずに多様な分野の授業を履修できる。これは大学入試の段階から学部には属さない特別選抜によってはじめて可能となるプログラムであり、こうした事例は日本の他大学においてもほとんどみられないユニークな取り組みである。一方で、卒業研究は必修となっており、大学院進学が推奨されていることは注目される。日本を代表する研究重点大学である九州大学の性格をよく反映しているといえるだろう。

21 プロはまもなく 10 年目を迎えようとしており、カリキュラムも安定し、卒業生も増え、成果検証のための調査もいろいろ実施されている。九大の学内においても、地元の高校からも一定の認知を受けている。ウェブサイトも充実しており、こうした広報活動にも学生が積極的に参加している。全体的には安定期を迎えていると言えるだろう。

もちろん問題がまったくないわけではない。21 プロが抱える課題について専任教員に尋ねたところ、専任教員に大きな裁量を与えられている反面、多くの面において現場任せになっている面も少なくないという。また、21 プロの立ち上げ時に関わった教員の多くが九州大学を去っており、多くの教員に新規協力を依頼しなければならない状況だという。

一般的に、アメリカの大学における優秀学生のための特別教育プログラム（いわゆる「オーナーズプログラム」）は、大学側にとっては地元の高校生のうち上位層が名門私立大学に流出するのを食い止め、学生側にとっては地元州立大学において私立大学よりも格安の授業料で高水準の少人数教育を受けられることが魅力となっている。その観点からいえば、九大の 21 プロは大規模総合大学において少人数教育を実現していると言える。ただし、他地域の大学をめざす最優秀層の地元学生（つまり東大や京大などを目指す学生）を九大に食い止めようとする「経営の論理」が存在するかどうかについては、調査の結果、そうした意図はあまり感じられなかった。なぜなら、21 プロは入試選抜の段階で、基礎学力だけに重きを置くのではなく、論理構成力や自己表現力、学習意欲や関心を重視する方針をとっているからである。より偏差値の高い学生を獲得することが目的ではない。むしろ、基本理念として掲げられている「専門性の高いゼネラリスト」の養成ことが 21 プロの本質であり、基本的には「経営の論理」というよりも「教育の論理」に基づくプログラムであると思われる。

入手した資料

- ・ *The 21 Century Program 2010*, Kyushu University (紹介パンフレット)
- ・ 『九州大学 21 世紀プログラム成果報告書 平成 13 年度～平成 19 年度』 21 世紀プログラム専門委員会編、2008 年
- ・ 『九州大学 21 世紀プログラム年次報告書 平成 20 年度』 高等教育開発推進センター高等

教育開発部、2008年12月

- ・『2009年度 21世紀プログラム 学生の手引』九州大学学務部全学教育課 21世紀プログラム課程係
- ・『平成22年度 大学入試センター試験を課さないアドミッション・オフィス入試 学生募集要項』九州大学
- ・『九州大学概要 2009年度』
- ・九州大学 21世紀プログラム ドキュメンタリーDVD、2005年1月
- ・ *Orbit 04* (九州大学 21世紀プログラム課程広報誌) 2006年
- ・ *Orbit 05* (九州大学 21世紀プログラム課程広報誌) 2007年
- ・「九州大学 21世紀プログラム課程」
<http://www.21cp.kyushu-u.ac.jp/> (2010年2月3日)
- ・「九州大学アドミッションポリシー」
<http://www.kyushu-u.ac.jp/entrance/policy/21proap.php> (2010年2月3日)

立命館大学のオナーズプログラム

近 田 政 博

1. はじめに
2. 学生の選出方法
3. オナーズプログラムの内容
4. 対象学生へのインセンティブ
5. プログラムの効果

調査日：2009年12月14日

訪問先：立命館大学 教育開発推進機構、キャリアセンター、教学部教育開発支援課

応対者：鳥居朋子 氏（立命館大学 教育開発推進機構 教授）

浅野昭人 氏（立命館大学 キャリアセンター 次長）

青山佳世 氏（教学部教育開発支援課 職員）

調査者：近田政博

1. はじめに

立命館大学は 12 学部で 33,000 人余の学生を擁する私立の大規模総合大学である。同大学は 1988 年に国際関係学部を設置し、2000 年に姉妹大学として立命館アジア太平洋大学 (APU)を開学するなど、長年にわたり、大学教育の国際化に力を注いできた。また、国際問題アドバイザーで元首相補佐官として知られる岡本行夫氏と立命館大学の長田前総長が知己の関係であったことから、同大学は 2004 年度から岡本氏を国際関係研究科の客員教授として招聘し、大学院の授業担当を依頼した。

2005 年度からは、立命館大学は岡本氏の担当内容を学士課程教育に変更し、将来国際社会で活躍することをめざす優秀な学生をサポートする新プログラムを新たに立ち上げた。同大学では、このプログラムを「国際社会で活躍する人材養成特別プログラム」と名付け、全学規模のオナーズプログラムとして位置づけている¹。

卒業生が国際社会で活躍するためには、「学力や知識はもちろんのこと、幅広い教養や良識、倫理観、想像力、包容力などの能力」²が必要となる。本プログラムでは、岡本氏の指導のもとでこれらの能力を総合的に高め、基礎学力とモチベーションの両方を高めることを意図している。より具体的な目標は、国家公務員一種試験に合格し、キャリアで外務省に入る人材を輩出することである。立命館大学としては、できるだけ近い将来にこの目標を達成したいと考えている。

2. 学生の選出方法

2-1 対象時期

オナーズプログラムの標準的な活動期間は 1 回生後期から 3 回生前期までの 2 年間である。本人の意向と活動状況を勘案し、大学側が半年ごとに本人と面談を行い、継続の可否を判断している。自動的に継続できない仕組みになっている。

新規ゼミ生（立命館大学では同プログラムの学生をゼミ生と呼んでいる）は 1 回生後期に 20 名、2 回生前期に 20 名を募集している。全体の人数は 40 名とし、学部を問わず参加者を募集・選考している。実際にはオナーズプログラム学生には外国留学をする者が多いので、毎年 10～15 人は補充採用している。

¹ 全学のオナーズプログラムとは別に、同大学の経済学部は 2006 年度から独自のオナーズプログラムを開設しており、通常の講義よりも高度な内容の経済学を提供している。その目標は大学院進学や国家公務員一種試験で求められる学力を身につけることとされている。同プログラムでは、2 回生と 3 回生用に設けられている特別授業（「オナーズプログラム科目」）が提供されており、この特別授業は上級内容の講義科目と特別演習で構成される。授業履修に加えて一定の条件（GPA スコア、卒業論文など）を満たせば、卒業時に「オナーズ」もしくは「エクセレント」の称号を与えられる。

² 上記入手資料中の回答資料による。

2-2 募集方法

オナーズプログラムでは、学士課程における全学部の学生を対象として公募を行う。志望理由書、語学や GPA のスコアに加えて面接を実施し、総合的に採用を判断する。同プログラムの出願票では、出身高校、立命館大の受験科目、高校時の履修科目、語学スコア、GPA、基礎演習で取り組んだテーマ、学内奨学金の受給状況、課外活動、最近呼んだ本、留学予定、将来希望する進路、大学院進学の可能性、これまでの海外経験などについての記載を求めている。

選考委員は教学部の管理職を務める教員と、教学部の部次長級の職員がペアで担当する。選考の際には、センター入試で受験した学生、地方公立高校出身の学生、立命館の附属高校出身者のうち優秀な学生を積極的に採用する方針をとっている（学生には特に公表していない）。倍率は2～2.5倍程度で、男女比はほぼ半々である。不採用となった場合でも、次回の募集時に再応募することができる。

2009年度後期のゼミ生は男子9人、女子27人と、全体の4分の3は女子学生が占めている。学部別に見ると、国際関係学部16人、経済学部7人、法学部6人、文学部3人、経営学部2人、産業社会学部2人となっており、国際関係学部が突出し、社会科学系の学部に属する学生が大多数を占めている。希望する進路は、外務省17人、国際公務員13人、民間企業12人、NGO8人、その他15人である。所属学部、希望する進路ともに、本プログラムのミッションである「国際社会で活躍する人材の育成」が大きく影響していると思われる。



写真1 立命館大学衣笠キャンパス（京都市北区）

3. オナーズプログラムの内容

3-1 基本コンセプト

立命館大学オナーズプログラムでは、将来、国際社会をフィールドとして活躍したいと考える人材の養成を目的としている。具体的には、国連などの国際機関、外務省（国家公務員一種あるいは外務省専門職）、JICA などの専門機関、NGO、国際開発コンサルタントの養成を想定している。とりわけ、スーパーバイザーである岡本氏が外務省出身ということもあり、国家公務員一種試験に合格し、外務省にキャリアとして入省する学生を育成することを目指している。

3-2 プログラムの内容

同プログラムは学部・研究科を超えて、教学部が一元管理している。正課外活動として位置づけられているため、履修しても卒業単位としてはみなされない。時間数に換算すると、年間 8～10 単位に相当する。同プログラムは卒業単位を稼ぐためのものではなく、純粹に学習意欲の高い学生だけを集める方針をとっている。

本プログラムは次のような内容で構成されている。

- ・岡本行夫客員教授による講演会、ゼミナール（ Semester に 3 回実施）
（後援会は誰でも参加できる、ゼミナールはオナーズ学生のみ受講可）
- ・宮家邦彦客員教授によるグローバル・シミュレーション・ゲーミング（ Semester に 4 回実施）
- ・岡本氏のコーディネイトによる特別ゼミ（年 1 回東京で実施。オナーズ学生は夜行バスで往復して参加する）
- ・インターナショナル・リーダーシップ・プログラム TOEFL 講座
- ・岡本・宮家両客員教授の授業を受講する上での事前学習・事後学習を兼ねた自主ゼミナール（年 1 回ゼミナール発表を実施）
- ・海外フィールドワーク（発展途上国や国際問題の現場視察など）

2008 年 8 月には 12 名のオナーズ学生がパレスチナ・イスラエルでの研修に参加し（引率者は大学職員 1 名、大学院生 1 名、岡本氏も同行）、JICA のパレスチナ事務所、テルアビブ大学、在イスラエル日本大使館などを訪問した。その際は、イスラエル側とパレスチナ側の双方の意見を聞く機会を設け、学生が客観的、総合的に問題を理解できるように配慮した。帰国後に報告書を作成している。2009 年度はインドの IT 産業を訪問調査する予定である。海外フィールドワークはオナーズプログラムの学生全員が参加するわけではなく、参加しなかった学生には別の研修機会を提供している。

このように立命館大学のオナーズプログラムは岡本・宮家両客員教授のゼミナールを中心とし、これを他のゼミナールや海外フィールドワークが補完するという構成になっている。

る。一般的な学士課程が座学中心であるのと比較すると、学生側の積極的な参加意識が強く求められるゼミ中心型のプログラムであるといえる。

4. 対象学生へのインセンティブ

立命館大学ではオナーズプログラム用の受講料を徴収していない。客員教授や事務職員の人件費とは別に大学で年間 300 万円の予算を計上して、プログラムの運営経費を賄っている。学生の研修用交通費・宿泊費については、この予算から実費の半分を補助している。また、岡本客員教授からは客員教授としての給与のうち約半分を同プログラムに寄附されており、これを学生の海外フィールドワーク用の奨学金に充てている。この恩恵を受けて、学生の自己負担は 10 万円程度に軽減されている。

学内の専任教員（国際関係学部の教授）による自主ゼミ活動の支援を行っている。エクステンションセンターや言語教育センターと連携し、本プログラムの学生を対象とした講座の開設を行っている。オナーズプログラムには大学院生の TA が 3 名配置されている。また、事務局の職員が日常的にオナーズプログラムの学生の相談に応じ、必要に応じて関係機関にコンタクトをとっている。オナーズプログラムの学生は学内のパソコンを比較的借りやすい環境にある。

立命館大学のオナーズプログラムは正課外活動として位置づけられているため、時として同プログラムのゼミナール等が正課の授業履修と重なることもありうる。この場合は大学として特別な配慮は行っていないので、対応はすべて学生の自己責任となる。これまでのところ、各学部の教員からオナーズプログラムを受講している学生に対する苦情はそれほど多くないという。

また、オナーズプログラム学生に対する TA や RA などへの就業支援は特に行っていない。

同プログラムは正課外活動として位置づけられているので、オナーズプログラムのための特別な学位は存在しない。同プログラム修了式では全員正装の上、副学長から修了証を授与し、修了パーティーを催している。

5. プログラムの効果

5-1 学習効果

立命館大学のオナーズプログラムでは、国際社会で活躍できる人材を輩出するために、特定の知識だけでなく、幅広い教養や良識、倫理観などを備えた人材を養成するプログラムでありたいと考えている。ただし、この観点からの学習効果を厳密に測定しているわけではない。

同プログラムの学生はほぼ毎年、日米学生会議のメンバーに選ばれている。また、2009

年は外務省のインターンシップに2名受け入れられている。こうした実績は広い意味での学習効果と言えるかもしれない。



写真2 立命館大学キャリアセンターにて

左から青山佳世氏、鳥居朋子教授、浅野昭人氏。

浅野氏は同大学のオーナーズプログラムを実質的に立ち上げた当事者である。

5-2 学生の満足度

本調査では、3人のオーナーズプログラム学生にインタビュー調査をする機会を得た。属性はそれぞれ国際関係学部1回生（女子）、政策科学部4回生（女子）、法学部4回生（男子）であった。オーナーズプログラムへの応募は、いずれもインターネットやポスターでの案内を見て、自分から申し込んでいる。3人の立命館大学の入試科目は、一般入試およびセンター入試であった。受験時には、3人とも立命館大学は第1志望の大学ではなく、いわば不本意入学であった。しかし、教員や先輩学生、友人からのアドバイスもあり、現在では3人とも立命館大学に入学してよかったと考えている。特に、オーナーズプログラムに参加したことで自分の意識が大きく変わったと感じている。

本オーナーズプログラムから得られた収穫として、3人は「リスクを恐れない」、「自分から学ぶ」、「将来に向かって何をしたらいいかを自分に問いかける」、「主体性をもつ」、などの意識を高めることができたことを指摘している。また、招聘したい講師について学生の希望を聞いてくれるなど、オーナーズプログラムでは学生の主体性を大事にしてくれることに満足している。彼らの言葉によると、学生は自分から主体的に学ぶようになるためのきっかけを欲しており、オーナーズプログラムはそのニーズを満たしている。後輩には、「プロアクティブ」であることの重要性を伝えたいと考えている。

5-3 進学・就職実績

民間企業としては、パナソニック、ヤマハ、大和証券、東芝、フジテレビ、東洋経済新

報社、豊田紡績などへの就職実績がある。政府関係機関としては、外務省（専門職）、財団法人日本国際協力センターへの就職実績がある。

大学院への進学先は、立命館大学、京都大学、東北大学、一橋大学などの実績がある。

目標としている国家公務員一種での外務省入省はまだ達成していないが、今年度は4人受験し、うち3人が一次試験を突破している。

5-4 まとめ

インタビュー調査の結果からは、立命館大学のオナーズプログラムは受講生から高い評価を受けていることが管見される。事務局（教学部）もオナーズプログラムの学生に対して親身なサポートを行っている。「国際社会で活躍できる人材育成」という目標設定も明確である。オナーズプログラム用の予算も措置されている。大規模大学が高い学習意欲をもった学生に対して重点的に支援を行うというオナーズプログラム本来の趣旨から言えば、立命館大学の事例はその典型であると言えるだろう。同時に、同大学のオナーズプログラムは希望者のみが参加する正課外活動として位置づけられており、その機会はすべての学生に与えられている。オナーズプログラムを運用する上で、教育機会の公平性という観点から一般の学生が不利益を被ることはない。

その一方で、同プログラムはその由来からも、内容面からも、岡本行夫氏の個性とその人脈に大きく依存していることが指摘されている。岡本氏が退任された場合の継続性については課題が残されている。運営体制についても、2人の客員教授（岡本氏と宮家氏）の意向を踏まえつつ、教学部がマネジメントを行っており、各学部の教員との関係性は必ずしも深くない。オナーズプログラムに対する学内教員の理解と支持を広げることが求められる。

また、同プログラムは全学の学生に機会を提供しているものの、目標設定が「国際社会で活躍できる人材」、「外務省キャリア入省を目指す」となっているために、応募者が文系学部の学生に集中する傾向がある。大学側ではこうした状況を勘案して、理工系学生のための特別教育プログラムのあり方について検討中である。また、経済学部が独自に開設しているオナーズプログラムと同一名称のため、学生や学外者が混同しないように工夫する必要があるだろう。

入手した資料

- ・「国際社会で活躍する人材養成特別プログラム 出願票」
- ・「国際社会で活躍する人材養成特別プログラムについて」(プログラムの概要)
- ・「2009年度後期 立命館大学 国際社会で活躍する人材育成特別プログラム ゼミ生内訳」
(内部資料、電子ファイル)
- ・『パレスチナ・イスラエル研修報告書 2008』立命館大学国際社会で活躍する人材育成特別プログラム、2008年10月
- ・「立命館大学 国際社会で活躍する人材育成特別プログラム 東京特別講義日程 12月5日(土)～国際舞台への道～」
- ・「優秀学生のための特別プログラム(オナーズプログラム)」に関するヒアリング調査への回答資料(今回の訪問調査に際して立命館大学教学部が用意した回答文書)、2009年12月14日

愛媛大学におけるリーダーズスクール(ELS)

近 田 政 博

1. ELS(Ehime University Leaders School)の選抜方法
2. プログラムの内容
3. 対象学生へのインセンティブ
4. ELS 学生へのインタビュー
5. 考察

調査日：2009年7月23日

訪問先：愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室

応対者：秦 敬司 氏（教育企画室 准教授）

佐藤浩章氏（同上）

調査者：近田政博

1. ELS(Ehime University Leaders School)の選抜方法

愛媛大学において ELS 学生とは、ELS ゼミナールの履修生およびその修了生を指す。半期で 20～30 名、年間 60 名程度を募集する。申込時に志望動機や自分史を書いてもらう。その上で、修了生やボランティアスタッフが志願者と面談し、最終的には教員が判定する。入試成績や学業成績は特に考慮せず、志望動機を重視している。2009 年 7 月現在、第 5 期生が履修中である（3 年目）。秋からは第 6 期がスタートする。

教育企画室ではポスターやウェブサイトなど、さまざまな媒体を使って学内広報を行っている。執行部に向けても ELS の活動を積極的にアピールしており、学長と ELS 学生の対談も行われている。

2. プログラムの内容

ELS で言うリーダーシップ養成とは、一義的には、在学中のさまざまな問題を解決する能力を養うことを指す。そして長期的には、社会や職場の問題解決能力の育成を目指している。組織のリーダーを務めるかどうかは状況によるが、リーダーシップの素養は誰しも必要であるとの認識による。ソーシャル・スキルやスタディ・スキルを兼ね備えたリーダー層の学生に支援を行うことで、他の学生への波及効果および大学の活性化を期待している。ELS 専任教員によると、その要諦は「アクティブな学生を孤立させない」ことにある。

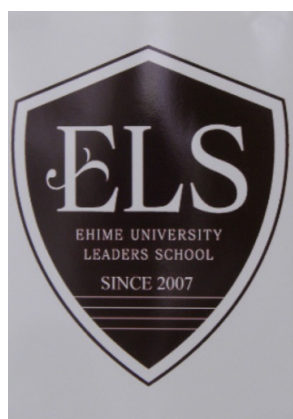


写真1 ELSのロゴマーク

ELS のプログラムは、①必修科目（半期 2 単位）：ELS ゼミナール（正式名称は「愛媛大学リーダーズスクール」）、②選択必修科目（2 単位）：最大 160 人規模で開講されるリーダーシップ関連授業、③ELS が主催する学生プロジェクト、④その他の ELS セミナー・研修、の 4 種類で構成されている。

②の選択必修科目の授業題目をみると、2009 年度は「リーダーシップとビジネススキル」

(集中・後期)、「ボランティア活動」(前期)、「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」(集中)、「ライフマネジメントとセルフ・リーダーシップ」(後期)、「ライフ・ヒストリー・インタビュー」(後期)、「自分と仕事」(後期)の7コマが開講されている。これらの授業は、科目区分上は「現代社会の諸問題」「対話と人間」「現代社会と教育」「倫理と生き方」などのカテゴリーに位置づけられている。こうした授業では、受講登録の際に一定数がELS学生枠とされ、抽選対象外となっている。④その他のセミナー・研修には、サマースクール、サークルリーダー研修会、「スチューデント・キャンパス・ボランティア」(SVC)研修会などが該当する。

ELSゼミナールではリーダーシップ論に関するレクチャー数回に加え、学外での合宿研修および受講生による研究発表(「学生セミナー」)が行われる。学生セミナーではリーダーシップに関して自分が調査した特定テーマについて小グループ内で40分間発表し、この後で20分間振り返りを行う。振り返りでは、発表の良かった点と改善すべき点について学生間で意見交換が行われる。全体の進行・司会は教員が担当する。

ELSゼミナールの成績評価は、①学生リーダーズ・セミナー(学生による調査・発表内容)(20%)、②学生リーダーズ・セミナーのレポート(読本に掲載する原稿)(10%)、③自分史レポート(10%)、④リフレクションシート(授業ごと、および期末レポート)(10%)、⑤合宿研修でのセッションおよび報告書(20%)、⑥授業への積極的な参加態度(30%)、の6点が総合評価される。



写真2 ELSゼミナールの光景

ELSに関わる陣容は、専任教員2名、兼任教員2名、研究員(助教待遇)3名、ボランティアスタッフ(ELSのOB・OG)2名、計9名である。ELSの事務は教育・学生支援部のリーダー養成・能力開発室が担当し、常勤の事務職員が配置されている。

3. 対象学生へのインセンティブ

ELS 学生は授業料免除や奨学金申請、および TA や RA に採用される際において特段の優遇措置を受けていない。授業料についても他の学生と同じである。ただし、「愛大ミュージズ」という施設の中には、ELS 学生の活動ルーム、セミナールーム、その隣にセミナー室の様子を観察することのできる部屋などが確保されている。この他、学生支援 GP 予算などを利用して、リーダーシップに関する文献等を大学が購入している。学生および修了生の相談・個別指導には、ELS 専任教員、研究員、ボランティアスタッフなどが随時対応している。ELS の卒業生がボランティアとして現在の ELS 学生の世話をするという、いわば寺子屋式の文化が根付いている。



写真3 ELS 学生が共同で各種プロジェクトを進めるための部屋が確保されている

ELS ゼミナールで学生が行った発表内容は、『学生リーダーズ読本』にまとめて年度末に発行している。この冊子の編集作業も学生が中心となって行っている。学生にとっては、自分たちの調査・発表内容が、大学刊行の冊子に活字となって掲載されることは大きな誇りと励みになると思われる。

ELS は正規の学位とは異なるので、卒業証書には特に明記されない。しかし、2009 年 4 月からは、ELS において「リーダーシップに関する知識・技術を修得した学生のうち、リーダーとして適切な能力を有すると認められる学生の資格認定」に関する要項が定められ、学内資格（「愛媛大学リーダーズ・ライセンス」）として正式に位置づけられている。教育・学生支援機構長が指名する若干名の委員による資格認定委員会が候補者に対して最終面接を行い、これまで 3 名が認定されている。「愛媛大学リーダーズ・ライセンス」がどの程度の価値を持ちうるのかについては、現時点では判断できない。

4. ELS 学生へのインタビュー

ELS の効果について、愛媛大学の計らいで修了生 4 名にインタビュー調査を実施することができた。修了生は、2 期生が 1 人、3 期生が 2 人、4 期生が 1 人であった。学年は 4 回生が 3 人、3 回生が 1 人。所属学部は教育学部、農学部、法文学部が各 1 人、松山大学経営学部が 1 人であった(ELS では愛媛大学の隣にある松山大学の学生も受け入れている)。



写真 4 ELS 修了生へのインタビュー

彼らが ELS に入った動機については、尊敬する先輩が ELS に入っていたから、友だちから紹介された、教員から紹介されたなど、第三者を介して ELS のことを知り、関心を持ったケースが多かった。チラシやポスターと同時に、学生間では口コミや紹介が少なからぬ影響力を持っていることが窺えた。

「ELS でどのようなことを学ぶことができたか」という質問を投げかけたところ、次のような回答が得られた。ELS についてきわめて肯定的な評価をしていることがみてとれた。

- ・どんな状況でもリーダーシップをとること
- ・大学の垣根にとらわれず、仲間の中に入っていくこと
- ・自分自身の活動を振り返る習慣をつけること
- ・他の学生と交流するコツ

彼らによると、今日の大学生は、「外に出たいけど自分から一步を踏み出せない」、「将来に対する漠然とした不安を持っている」、「自分がどういう人間かわからない」、「何かにチャレンジすることに臆病になっている」などの悩みを抱えているという。ELS は自分から一步を踏み出す「きっかけ」を与えてくれたという。

実際に ELS の学生は、イベントの司会や各種 NGO、ボランティア活動などをグループ単位で組織しており、こうした経験を通じて学生は「周りがやっているから、自分も何かをやらなくては」(専任教員)という気になっていくという。愛媛大学にとっても、ELS を持っていることは、学外からの学生派遣依頼やボランティア依頼に対して迅速かつ弾力的に対応する上でのメリットが大きいとのことである。

5. 考察

愛媛大学の ELS プログラムを欧米や中国のオナーズプログラムと比較すると、プログラム内容に関しては、少人数制によるきめ細かい学習支援、学生相互および教員との連帯感の醸成などが重視されているという共通点がみられる。その一方で、①学生の選抜時には、本人の志望動機や学習意欲を重視し、学業成績や入試成績を特に考慮しないこと、②受講生へのインセンティブにおいても、授業料の減免、奨学金選考時における優遇などは行われておらず、大学院進学や就職の際にも必ずしも優位性は確保されていないこと（まだ3年目のため、就職している学生がほとんどいないことにもよる）という差異がみられた。

このように愛媛大学の ELS プログラムは、その教育・学習内容においては諸外国のオナーズプログラムとの類似点は見られたものの、入口（学生募集）と出口（就職・進学時）においては、他のオナーズプログラムに見られるような「学内の最優秀層の学生を選抜し、特別な教育を施すことによって、トップ校あるいはライバル校と遜色ない教育上の卓越性を確保する」という意味での差別化戦略を見いだすことはできなかった。むしろ、愛媛大学にはスチューデント・キャンパス・ボランティア(SVC)制度にみられるように、学生の互助を大学側が積極的に奨励してきた伝統がある。ELS もこうした伝統に根付いている。

ELS は潜在的な学習意欲はあるものの、今一つ自分に自信の持てない学生に居場所を与え、少人数の共同体で濃密なコミュニケーションを図る機会を提供し、課題にチャレンジする機会を提供するという意味での学習コミュニティとしての性格が強い。リーダーシップの具体的な知識やスキルの獲得以上に、真のねらいはさまざまな経験を通しての学生の自己変容にある。教員や研究員、ボランティアスタッフは、ファシリテーターとして学生を励まし、その背中を押すという役割を担っている。ELS は選抜プログラムではなく、「アクティブな学生を孤立させない」ための共同体であると言えるだろう。

入手した資料

- ・愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室（2008）『学生リーダーズ読本 2007』
- ・愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室（2009）『学生リーダーズ読本 2008』
- ・愛媛大学教育・学生支援機構（2008）『Ehime University: Student Campus Volunteers 愛媛大学 SCV 活動総括 2004-2007』（報告書）
- ・「平成 21 年度 ELS 前期授業日程」（内部資料）
- ・「愛媛大学リーダーズ・スクール(ELS)」愛媛大学 ELS 事務局（広報チラシ）
- ・「愛媛大学リーダーズ・ライセンス(Leaders License)の設定に関する要項」（内部資料）
- ・「愛媛大学リーダーズ・スクール(ELS)ゼミアンケート」（内部資料）
- ・「愛媛大学リーダーズ・スクール(ELS)成績評価に関して」（内部資料）

- ・「プレゼンテーション・評価シート」(内部資料)
- ・「ELS 学生面談シート」(内部資料)
- ・「ELS 合宿研修リフレクションシート」(内部資料)
- ・「SRLS-R2 (社会的責任リーダーシップスケール/改訂版 2) アンケート」(内部資料)
- ・「火曜ナイトサロン企画申請書フォーマット」(内部資料)
- ・4 大学間共同事業 (島根大学、山口大学、愛媛大学、高知大学) 「学生リーダーズ・サマースクール」 愛媛大学教育学生支援部リーダー養成・能力開発室 (広報チラシ)

第3部 総合考察

学士課程教育の質的向上におけるオナーズプログラムの役割

近田 政博・鳥居 朋子・佐藤 万知・中島（渡利）夏子

1. はじめに

高い潜在能力をもつ学力上位層の学生に対して、一層の動機づけや知的刺激を与え、彼らの学習意欲を高めるにはどのような方法があるのだろうか。日本におけるいくつかの大学生調査の結果をみるかぎり、大学全入時代を迎えつつあるとはいえ、いまだに大学生の3～4割は第一志望でない大学に入学している。学力上位層の学生には、こうした不本意入学者も少なくないと推察される。ところが、日本の大学では補習教育などを通じて学力中下位層の学生に対して手厚いケアを行っている反面、いわゆる「浮きこぼれ」「吹きこぼれ」層への対応はほとんど手つかずのままになっている。たとえ潜在的に高い能力を持っていても、学習意欲が低いままでは学士課程の年限においてその能力を十分に開花させることは難しく、何らかの組織的対応が求められる。

欧米の大学にみられる優秀学生のための特別プログラム（いわゆる「オナーズプログラム」：Honors Program）は、「大衆化」した大学の中に「卓越性」を追求する特別トラックを設けることで大衆化と卓越性の両立を図ろうとするものである。同じく進学率が上昇し多様な学生を抱えるようになった日本の大学にとって、学士課程教育の質的向上を実現する上で、オナーズプログラムの役割を検討することは大きな意義があると考えられる。

本発表では諸外国の大学の学士課程においてオナーズプログラムがどのような役割を果たしているかを考察し、日本の学士課程教育の質的向上にとっての示唆を得ることを目的とする。まず、今日の世界の大学では「オナーズ」が何を意味するのかについて整理した上で、オナーズプログラム発祥の地とされるイギリスで「オナーズ」という概念が何を意味し、これがどのように外国（本発表ではアメリカ）へと伝播し、独自の発展を遂げたのかを確認する。次に、アメリカ合衆国、オーストラリア、中国の主要大学の学士課程においてオナーズプログラムが果たしている役割について考察する。これらの国は、21世紀初頭のグローバルな競争的環境において、研究のみならず教育の卓越性においてもその存在感を示すことに積極的な国々である。最後に、日本の大学が優秀学生向けのオナーズプログラムを導入することにどのような可能性と課題があるのかについて検討する。

2. 「オナーズ」の意味

本発表にあたり、オナーズプログラムに関する先行研究を調べ、カナダ、アメリカ、オーストラリア、イギリス、中国におけるいくつかの研究大学を訪問調査した。その結果、「オナーズ」という用語の意味は一樣ではなく、国・地域や大学ごとにさまざまな意味が込められているということがわかった。仮説段階ではあるが、世界の主要国には少なくとも次の3つのタイプの「オナーズ」が存在すると考えられる。

表1 「オナーズ」が意味するもの

	A 型	B 型	C 型
基本的な性質	成績優秀者に与えられる学位名称	優等学位課程	優秀学生向けの特別教育プログラム
普及している地域	イギリス	主に英連邦諸国 (オーストラリア、カナダなど)	アメリカなど (世界各地にみられる)
履修年限	学士課程の年限内(イギリスでは通常3年制)	普通学士(3年) + 1年	学士課程の年限内(アメリカでは通常4年制)

A型の「オナーズ」は、イギリスの大学の学士課程において成績優秀者に与えられる称号である。通常の学士課程の年限内において取得することができる(2で後述)。B型の「オナーズ」は、通常の学士課程(3年制)に1年間の履修課程を上乗せすることにより得られる学位名称(「優等学位」)である。英連邦諸国(オーストラリア、カナダなど)で今なお機能しているが、教育制度改革や国際的な学位基準の統一化の中で改組されつつある。C型の「オナーズ」は、学士課程の年限内において優秀学生のための特別プログラムを提供しているケースであり、アメリカの大部分のオナーズプログラムがこれに該当する。

実際には、このように明確に分類できるわけではなく、これら3タイプの境界線上にある大学、あるいは重複している大学も少なくない。今回取り上げるオーストラリアのグリフィス大学では、伝統的にB型の学位制度を持ちながらC型の特別カレッジ(GHC)を創設している。オーストラリアと同様に英連邦型の高等教育システムをもつカナダの大学では、従来は13年制の初等・中等教育プラス3年制の学士課程という制度であったが、政府の財政緊縮の影響を受けて12年制プラス4年制の学士課程という形に改組されつつある。これにより、B型の就学期間を上乗せするタイプの「オナーズ」制度は実質的な意味を持たなくなり、学士課程カリキュラムのレビューにおいて優等学位の意義や取得要件も再検討がなされている(トロント大学など)。C型は、アメリカや中国などにおいて優秀学生のための特別プログラムとして広く普及している。日本の教育学においてこれまで一般に紹

介されていた英国起源のオナーズ制度は上記の B 型であると思われるが、実際には「オナーズ」という用語はこのように多様な意味を持っているのである。

そこで本発表では、「優秀学生に対する特別の教育プログラム」という趣旨から上記の C 型の事例を詳細に調べ、その存在意義と日本の大学への示唆について考察したい。

3. イギリスにおけるオナーズ学位とアメリカへの伝播

諸外国の学士課程教育における優秀学生を対象としたオナーズプログラムの原型は、イギリスの大学にあると考えられている。イギリスにおける「オナーズ」とは、学士課程修了段階の成績が優秀な学生に与えられる学位区分において「優等学位」を意味し、優秀学生を対象とした特別な教育プログラムという意味ではない。一般的に優等学位は修了試験で所定の成績を収めたものに与えられる（吉川、2001）。優等学位はさらに 1 級、2 級上・下、3 級にわかれ、優等学位以外には普通学位がある。それではイギリスでなぜ「優等学位」と「普通学位」の区分がなされ、どのような経緯で学位名称としての「オナーズ」が諸外国で教育プログラムとしての「オナーズプログラム」へと発展したのだろうか。

この問題を考えるにあたって留意しなければならないのは、イギリスの学位の実態は極めて複雑で、容易に一般論として語ることはできないということである。その背景には、イギリスの教育制度はイングランド、ウェールズ、北アイルランド、スコットランドの 4 つの地域で異なり、また、授与する学位の種類と名称は個々の大学・高等教育機関が独自に定めていることが挙げられる（吉川、2001）。そこで、本発表ではイギリスの優等学位制度の基礎となったと考えられているオックスフォード大学の学士課程教育の事例に限定する。続いて、オックスフォード大学の優等学位制度をもとにして独自のオナーズプログラムを開発したアメリカのスワスマア・カレッジを取り上げる。

3-1 オックスフォード大学の学士課程教育

オックスフォード大学では、1800 年の学位試験制度改正の際に、優等学位と普通学位の区分ができた。当時、同大学では教育水準の低下が問題視されており、それまで閉ざされた部屋の中で試験官と学生だけで実施されていた口頭試験に代わって、他の教員や学生の前で実施する公開試験制度が導入される形で学位試験制度が改正された（Curthoys, 1997）。同時に、学生が自ら自己の力量を試して「榮譽」（オナーズ）を競う優等学位試験制度も導入され、優等学位試験と普通学位試験という二つの異なる試験が準備された（小泉、2007）。それぞれの試験の課題図書はあらかじめ指定されており、学生は普通学位か優等学位のどちらを目指すかによって異なる文献を読み、試験の準備をした。優等学位が導入された当初は、試験に不合格だった場合の不名誉を恐れ、優等学位試験に挑む学生数は少なかったが、その後、優等学位に異なる階級区分ができたことによって優等学位の取得を目指す学生も増加した（Curthoys, 1997）。留意すべきは、19 世紀半ばごろまでオッ

オックスフォード大学は聖職者の養成機関であり、貴族階級、地主階級の後継者の養成機関であったということである（潮木、2004）。つまり、優等学位を取得することによってより有利な条件で社会に出ることができるというような意味合いはなく、「榮譽」のためだけに優等学位をめざす学生が存在した（Curthoys, 1997）。やがて、19世紀半ばには、学生数と学位試験の種別の増加に伴い、口頭試験は一部筆記試験になり、採点は外部試験官によってされるようになった。現在は、優等学位試験と普通学位試験という区分は廃止され、同じ試験を受け、その成績結果によって学位の区分が決定する。

さらに、オックスフォード大学にはチュートリアルとカレッジ制度という独特のシステムが存在している。同大学では学生は必ずカレッジに所属をする。ひとつのカレッジにはさまざまな専攻の学生とフェローと呼ばれる教員が所属する。カレッジは学生寮を提供し、食堂では1日3食用意される。スポーツなど様々なイベントはカレッジ単位で行われるため、学生にとってカレッジは学生生活の中心となっている。また、学士課程の教育は学部における講義とカレッジにおける講義やチュートリアルによって行われるため、カレッジは教育の場としても重要な役割を果たしている。

チュートリアルは週に1度、1時間程度、1～3人の学生に対して1人のチューターが行う。チュートリアルで扱う内容や指導方法はチューターが決めることができるため、チューターによって指導方法は異なる（The Commission of Inquiry, 1997）。通常、学生はチューターが決めた課題について2000～3000語のエッセイを提出し、チューターは学生の進捗状況に応じて次の課題や課題図書を決める。学生の成績は年に1度実施される試験によって決まるため、チュートリアルは試験対策を視野に入れて行われることが多い（Kenneth, 1982）。しかし、学生の努力次第で学習到達度は異なり、学生の関心によってチューターが推薦する文献も異なってくることから、チューターと学生の関係は学生の学びを深めるためのチームという意味合いが強い（Kenneth, 1982）。また、外部試験官によって試験の採点がされることから、試験で学生が目指す評価を受けるために共に歩むチームでもある。チューターは学生の専攻分野を専門とし、博士号をもつ学者でカレッジにフェローとして所属しており、著名な学者や教授なども含まれる（Palfreyman, 2001）。

これらの特徴は、オックスフォード大学では学生それぞれに適した学習目標の設定と環境が提供され、個々の学生に適した教育が意図されていることを物語っている。チュートリアルという少人数教育体制においては、優秀な学生にはチューターの判断によって、より広範囲の課題や専門性の高い課題を出すことが可能となり、そうでない学生には異なるレベルの課題を設定することが可能となる。優等学位は学生の学習意欲を高め、ひいてはチューターの指導力を向上させることも可能な仕組みとなっている。そして、カレッジは競い合う仲間、同じような関心を持つ仲間を意識させる場となっている。オックスフォード大学には優等学位、チュートリアル、カレッジが渾然一体となって学習効果を高める仕組みが用意されているのである。

ところで、今日のイギリスでは優等学位の意義を問い直す動きも出始めている(Elton,

2004)。例えば、オックスフォード大学で 2007 年に学士を取得した学生の学位種別は、3106 名中、優等学位 1 級：809 名、2 級上：1997 名、2 級下：259 名、3 級：36 名、普通学位：3 名、そして不合格：2 名であった。つまり、ほとんどの学生が優等学位を取得していることがわかる。これは、もともと卓越性を認可するための学位であった優等学位が形骸化していることを示唆する。その他にも学位に階級があることの弊害は Elton によって指摘されているが、ここでは優等学位の意義を問い直す動きがあることだけを指摘するにとどめる。

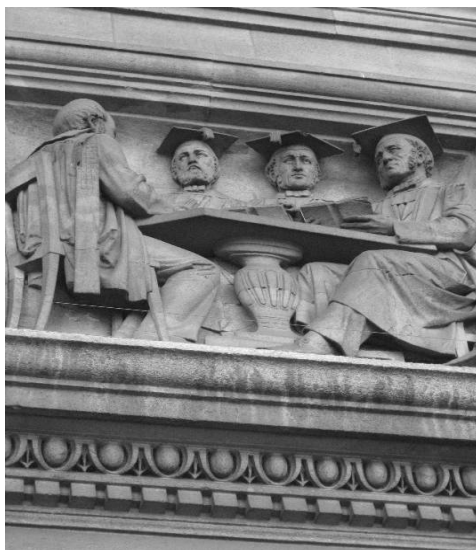


写真1 Examination School の彫刻（オックスフォード大学）
この建物には試験の時しか入ることを許されない。彫刻は往時の口頭試験の様子を表している。

3-2 アメリカへの伝播—スワスモア・カレッジの事例

イギリスの優等学位は、諸外国において「オナーズプログラム」へと展開していくことになる。この経緯を理解するために、オックスフォード大学の優等学位試験制度導入の最初の例と考えられているアメリカ合衆国ペンシルバニア州にあるスワスモア・カレッジ (Swarthmore College) を事例として考察する。スワスモア・カレッジは、伝統ある私立の小規模な教養大学として名高い (江原、2005)。2008 年度の学生総数は 1490 名 (男子学生 714 名、女性 776 名) であり、ノーベル賞受賞者や政治家、社会活動家などを多く輩出し、とりわけそのオナーズプログラムが広く知られている。

スワスモア・カレッジでオナーズプログラムの開発が始まったのは 1921 年のことである。それ以前にも、アメリカにおいてもすでに優秀学生を対象とした特別な制度を実施している大学は存在した。たとえばミシガン大学は 1883 年より成績優秀者に対して、コースを自由に選択できる権利を与えており、バーモント大学では、1888 年から学位論文の成績によって、オナーズという学位を授与していた (Aydelotte, 1943)。ただし、オックスフォード大学の教育制度を取り入れ、独自のオナーズプログラムとして発展させた嚆矢はスワスモア・カレッジであると言われている (安原、2005)。その指揮をとったのが 1921 年から 1940 年の間、同カレッジ長であった F.アイデロットだった。

アイデロッチはローズ・スカラーとして 1905 年から 07 年までオックスフォード大学に留学をし、優等学位を取得した。彼は帰国後、アメリカでオックスフォード大学の教育体制をはじめとするイギリスの高等教育制度の普及に大きな貢献をした。彼がなぜスワスモア・カレッジでオナーズプログラムを立ち上げたのか、どのようにしてプログラムを成立させたのかについては、1943 年出版の著書 (*Breaking the Academic Lock Step*) の中に詳細に記述されている。

著書の中でアイデロッチは標準化するアメリカの大学教育のあり方に疑問を投げかけている。彼によると、アメリカの大学教育は平均的な学生にレベルを合わせてデザインされすべての学生が同じ授業を受け、同じ試験で評価されているため、平均以下の学生はついていくことができず、優秀な学生は十分な知的刺激を受けることができないという問題を抱えている。彼は、学生の多様性を認め、個々の能力が最大限伸びるような教育を行うことが真の意味で平等な教育 (democratic education) であると考え、普通学位と優等学位の区分を持つイギリスの大学教育体制はこの考え方を実践していると主張した (Aydelotte, 1943)。つまり、通常学位と優等学位という区別を設けることで、学生には知的能力の高いものとそうでないものがあるという事実が認識できるようになり、それぞれに適した教育を行うことが可能となる、と彼は考えたのである。彼にとって「オナーズ」という学位を導入することは、学生の多様性を認めることと同義であった。

アイデロッチはスワスモア・カレッジにおいて、優秀な学生が適切な知的刺激を受けられるよう、特別な教育プログラム (オナーズプログラム) を用意することを提案した。オナーズプログラムの概要はオックスフォード大学の優等学位制度をモデルに開発されたが、オックスフォード大学の体制をそのままスワスモア・カレッジに持ち込んだのではなく、議論を重ねた上でスワスモア・カレッジに適切なプログラムの開発を目指した。この議論では、オナーズプログラムの目的や内容だけでなく、オナーズプログラムを導入するために必要な財政や人事、組織体制等についても検討されている。

スワスモア・カレッジのオナーズプログラムは、1922 年の開始以降、何度か改正を重ね、今日では学生が自由に学べることを一番重視し、学生がオナーズプログラムを通して身につけた知識や探究心を広い社会で活用していくことを目標としている。プログラムは 2 年間で、最終的に外部試験官によって口頭試験と筆記試験で評価される。オナーズプログラムへの申し込みは 2 年次の春である。学生はカレッジが提供する学問分野の中から 4 つの科目を選択し、2 年後の試験に向けて準備をする。準備の方法には、セミナーへの参加、研究論文や研究プロジェクトの実施、海外研修や舞台芸術活動への参加など様々なバリエーションがあり、学生はアドバイザーと相談の上、それぞれ準備計画を立てる。セミナーは対話を通じた学びを重視するスワスモア・カレッジのオナーズプログラムにとって重要な位置づけであるため、学生は積極的にセミナーに参加することを推奨されている。

スワスモア・カレッジで授与される学士課程学位は Highest Honor (HHH)、High Honor (HH)、Honors (H)、Pass、Marginal Pass、Failure に分類され、オナーズプログラム

に参加をしたからといって必ずしもオナーズ学位を取得できるわけではない。しかし、オナーズハンドブック 2008-09によると、過去 10 年の統計では HHH が全体の 9%、HH が 53%、H が 37%を取得し、オナーズを取得できなかったのは 2%にすぎない。この 2%には Pass、Marginal Pass、Failure が含まれる。

スワスモア・カレッジのオナーズプログラムがアメリカにおけるオナーズプログラムの展開にどの程度影響を与えたのかは現段階では不明だが、アイデロッテの調査によると、1940 年代のアメリカでは 200 校近いカレッジや大学のうち、すでに約 4 の 3 以上の大学が優秀学生に対して何らかの特別なカリキュラムやプログラム、待遇を実施していたとの指摘がある (Aydelotte, 1943)。これらが今日の優秀学生向けの特別プログラムとしてのオナーズプログラムの源流にあたるのではないかと考えられる。

4. 諸外国の研究大学におけるオナーズプログラムの事例

次に、今日のアメリカ、中国、オーストラリアの研究大学におけるオナーズプログラムの目的と内容、効果等について観察する。具体的には、それぞれワシントン大学、上海交通大学、グリフィス大学を取り上げる。

4-1 ワシントン大学 (アメリカ合衆国) のオナーズプログラム

ワシントン大学 (University of Washington、以下 UW) は、アメリカ合衆国北西部に位置するワシントン州の旗艦大学である。UW は U.S. News の 2008 年全米大学ランキングでは 42 位、Times Higher Education の 2008 年世界大学ランキングでは 59 位 (全米では 22 位) にランクされている。こうした実力から、全米公立大学のトップ校で構成される “public ivy” の一つとして数えられることが多い。学生数は、学士課程学生 25,469 名、大学院生 11,763 名 (2005 年秋学期現在)。UW には毎年 5,500 人の新生が入学するが、入学時からオナーズプログラムを受けることができる学生 (以下、「オナーズ学生」と略す) は 250~300 人程度であり、その割合は 5%程度である。同プログラムの新生向けリーフレットによると、UW オナーズプログラムは次のように紹介されている。

「UW のオナーズプログラムは、知を探究する情熱を生涯共有し続ける学部生と教職員からなる、活力あふれるコミュニティです。UW のオナーズプログラムは 1961 年から始まりました。このプログラムは、UW のもっとも学習意欲あふれる学生だけが体験できるプログラムです。このプログラムは大学で学ぶ際の中核となり、世界水準の研究大学のメリットを享受しながら、小規模カレッジのコミュニティを体験することができます。多様でダイナミックなオナーズプログラムに参加することにより、教室や実験室などの豊富な学習リソース、さらには地域社会や世界における学習機会を充実させることができます。この学習コミュニティのなかで、学生は教員との信頼関係を築き、同じ志をもつ仲間と切磋琢磨し、直面する問題を受け入れ、

新しいアイデアを議論し、批判的に読み、効果的に文章を書くという機会を得ることになります。こうしたコミュニティに君も参加してみませんか？そう思うなら、ぜひ申し込んでください。あなたの才能と闘志に期待しています。」

オナーズ学生の大多数は、大学入学と同時に同プログラムに加入する。オナーズプログラムに申し込むには、通常の UW 志願書類に加え、小論文（オナーズ・エッセイ）、推薦書を提出することが求められる。オナーズプログラムの志願者は一般願書のうち、オナーズプログラムに関する箇所を記入する必要がある。小論文は与えられた課題について 500 語程度で論述する形式である。推薦者は、出身高校の教員や校長、カウンセラーなど志願者をよく知る者 1 名に限られる。UW に入学するためには高校の成績証明書や SAT（大学進学適性試験：Scholastic Assessment Test）を提出する必要があるが、高校の成績証明書はオナーズプログラムの選考には影響しない。人種や性別、志望する学問分野などを特別に考慮することはないが、多様性を反映するような配慮は行っているとのことである。2006 年度をみると、志願者 1,772 人に対して 806 人が合格し（倍率は約 2.2 倍）、このうち実際にオナーズプログラムに加入した者は 341 人である。オナーズプログラムの学生であることを維持するためには、GPA(Grade Point Average) 3.3 を維持することが求められる。3.3 を下回ると仮及第となり、オナーズアドバイザーと相談することが求められる。その学期に 3.3 を上回ることができなければ失格となり、プログラムから外される。

2006 年度のデータをみると、オナーズプログラムに選抜された新入生の高校での GPA は 3.92、SAT スコアの平均は 1386 点である。ちなみに、一般の新入生の高校 GPA は 3.6 ~ 3.7 程度、SAT スコアの平均は 1200 点前後である。オナーズ学生のスコアは私学のアイビーリーグの新入生と比較しても遜色ないことが同プログラムのニューズレターで紹介されている。公立高校出身者は 87%、第一世代（家族の中で初めて大学教育を受ける）はわずか 7%、ワシントン州民は 82% である。人種別にみると、非マイノリティが 61.4%、マイノリティが 30.7% となっている。具体的には、アジア系 26.0%、ヒスパニック・ラティーノ系 3.9%、アフリカ系 0.8%、不明 7.9% である。なお、外国人留学生もオナーズプログラムに申し込むことができる。

UW のオナーズプログラムは、①専用の授業、②研究活動、③地域奉仕活動、④海外研修から構成される。さらに、⑤専用の宿舎(Honors House)、⑥専用の学生サークル、⑦専用の学生相談がある。オナーズのカリキュラムで提供される授業は、UW 全学および学外から招聘された教員によって行われ、学際的・国際的な観点の重視、議論や問題解決および論述の重視、少人数制に特徴がある。研究発表や研究活動に取り組む割合は一般の学生よりも高い。また、学期中は学生相談員が毎日オナーズ学生用のデスクを置いている。さらに、オナーズ学生は 1 年次と卒業前の 2 回、相談を受けることを義務づけられている。

UW の学生で全米の著名な奨学金を獲得した者のほとんどはオナーズプログラムの学生である。2003 年オナーズ卒業生に聞いたアンケート調査（回答者は 48 人）によると、49%

は進学（うち7%はロースクール、5%はメディカルスクール）であり、進学先には全米で難関とされる大学院が多い。こうした点からも、オナーズプログラムは教育プログラムであると同時に、奨学金獲得や著名大学院への進学といった学生のキャリアアップの手段としての性格が強い。同大学のオナーズプログラムオフィスもそのことを積極的にアピールしている。

オナーズプログラムに選ばれることは、学生にとってどのようなメリットがあるのだろうか。実際のところ、UWの学生で全米の著名な奨学金を獲得した者のほとんどは、オナーズ学生である。たとえば、1985年以来UWで5名の学生がローズ奨学金(Rhodes Scholarship)を受けたが、その全員がオナーズ学生であった。同様に、2001年以来マーシャル奨学金(Marshall Scholarship)を受けた5名の学生全員がオナーズ学生であった。ゲイツ・ケンブリッジ奨学金(Gates Cambridge Scholarship)を受けた学生も全員オナーズ学生である。学内の学部長表彰、学長表彰を受ける優秀学生の大多数もオナーズ学生である。

また、2003年オナーズ卒業生に聞いたアンケート調査（回答者は48人）によると、49%は大学院進学（うち7%はロースクール、5%はメディカルスクール）、就職30%、旅行14%、インターンシップ2%となっている。このうち、進学先の大学院の内訳は、MIT、スタンフォード、エール、ペンシルバニアなどの名門大学が少なくない。就職先には、マイクロソフト、ボーイング、アマゾン・ドットコムなど、ワシントン州ゆかりの企業が並んでいる。

2008年7月24日午後2時、同プログラムオフィスにて、オナーズプログラムの学生2人にインタビューする機会を得た（インタビューは近田政博）。一人は公共衛生学を専攻する3年生の男子学生、もう一人は歴史学を専攻する4年生の女子学生であった。「オナーズプログラムに選ばれて、どのように感じているか」という質問については、二人とも非常に満足しており、知的な刺激を得ているとの回答が得られた。家族も喜んでいるという。その理由について尋ねると、オナーズプログラムの授業は少人数制で行われるために（他の授業では数百人の大人数授業もあるとのこと）、教員との親密さが増すことを二人とも指摘している。さらに、学内でも粒ぞろいの教員が授業を担当するため、リーディングやライティングのスキルを高めるための工夫が授業でなされ、学習意欲が高まったという。また、この男子学生はHonors Study Abroad Programによってアフリカのシエラレオネを訪問する機会が得られ、さまざまな経験をすることができたとのことである。将来の夢については、男子学生はメディカル・スクール（大学院）への進学、女子学生はNPOで働きたいとのことであった。また、二人とも全米トップクラスの学生に与えられるマーシャル奨学金のようなスカラシップに応募してみたいとの意欲を示した。

このインタビューを通して得られた印象は、オナーズプログラムは学生の学習意欲を高め、誇りを高めることに成功しているということである。授業内容の満足度が高いだけでなく、将来のキャリアを考える上でも大きなステップとなっていることが窺える。



写真2 オナーズプログラムのオフィスに飾られた過去のオナーズ卒業生の情報（ワシントン大学）
紹介されている項目は、卒業年、専攻、オナーズ論文名あるいは研究プロジェクト名、卒業後の進路、オナーズがどのようにあなたに影響を与えたか、後輩へのアドバイスなど。

4-2 上海交通大学（中国）の連読班制度

上海交通大学は 1896 年に設立された「南洋公学」を起源とする、中国で二番目に古い大学である。当初は工学系の大学として発展したが、1980 年代からは総合大学化をめざし、1993 年に始まった「211 工程」、1998 年から始まった「985 工程」など、世界ランクの一流大学を建設することを目指した国家プロジェクトにも採択されてきた名門大学である。さらに 1999 年には上海農学院を、2005 年には上海第二医科大学を統合して総合大学化を進め、今日では人文・社会科学も網羅する全国重点大学として知られている。

上海交通大学のホームページによると、2007-2008 学年度における学士課程の学生数（短大課程に相当する専科は含まず）は 20,265 人、大学院生は 13,802 人（修士課程 9,173 人、博士課程 4,629 人）であり、専任教員は 2,978 人である。学士課程において工学が 9,458 人（46.7%）を占めることからわかるとおり、今日でも工学系の規模が大きく、高い研究水準を誇っている。

上海交通大学には「連読班」と呼ばれる優秀学生プログラムが存在しており、全国統一入試の優秀者や「自主招生」制度（全国統一入試とは別の大学別学生募集制度）による合格者を対象としている。現在では年間 120 名程度の学生が教員推薦や面接を経て、このクラスの学生として選ばれている。その目的は特別に優秀な学生を選抜すること、マスプロ教育の弊害を改善することの 2 点である。「連読班」は一般の学院・学系と比較して授業料が最も低く、大部分の学生には奨学金が支給される。なお、学生は自分の意思で「連読班」を脱退することができる。

中国の大学では日本と同様に専門分野別に入試を受け、初年次に「通識教育」（日本語の教養教育に相当）を受け、2 年次から専門教育が始まるのが一般的である。これに対し、「連読班」クラスでは 2 年次修了時点まで教務処によって独自のカリキュラムが組み、

特定の学院・学系に属さない仕組みとなっている。なお、「連読班」は指導教員制をとり、3～4年次の専門教育段階においても特定の教員が支援・指導する体制となっている。学生数が肥大化し（学士課程学生は約2万人）、マスプロ教育が常態化しつつある上海交通大学において、「連読班」は際立って少数精鋭主義、エリート主義を打ち出している。

「連読班」のカリキュラムが重視しているのは、学生が自主的に学習する態度を養うこと、研究能力を養うこと、実践能力やイノベーション能力を高めること、コンピュータや外国語の運用能力を高めること、などである。「連読班」の基礎科目は学内の最優秀の教員がこれを担当し、さらに国内外の著名教授を招聘して特別セミナーが随時行われている。図書館の利用に関しても一般の学生よりもさまざまな点で優遇されている。たとえば、貸し出し冊数は大学院生と同じ権利が与えられ、インターネットを無料で利用できる。学生寮にも恵まれた条件で入居できる。

「連読班」という用語には、学士課程・修士課程の一貫コースという意味が込められており、要件を満たせば大学院入試の定員枠に制限されずに無試験で大学院入学が認められる。大学院に無試験入学を認められた学生は、学士課程在学中に大学院の授業科目を履修し、進学予定の研究室のプロジェクトに参加することが特別に認められている。なお、卒業証書には「連読班」の学生であることが明記される。

上海交通大学には「連読班」に加えて、理科学系の各種国際コンテスト入賞に向けて編成された ACM と呼ばれるクラスが存在する。このクラスが創設された 80 年代当初は、当初は高級中学校 3 年生が大学での授業を受けられるようにすることを目的としていたが、今日では学士課程において高水準のカリキュラムを提供し、特に外資学系企業（マイクロソフトや NEC など）の研究所との産学連携プロジェクトや実験研究に参加することができるのが特徴である。1 学年 36 名で構成され、「連読班」と同様に、一定の成績を収めれば大学院試験を免除される。卒業生は大学院進学よりもむしろ外資学系企業に進学する傾向が強い（上海交通大学全体でも大学院進学率は 3 割程度）。



写真3 「連読班」学生へのインタビュー（上海交通大学）

この他にも、上海交通大学では修士課程と博士課程の一貫コースである「直博生」制度、博士課程への入学試験が免除される「提前攻博」制度などが設けられている。2007年からは研究予算を大学院生の生活補助に充てることが認められている。こうした取り組みの背景には、90年代以降、中国の大学が研究志向を強めているにもかかわらず、最優秀の学生が外国留学してしまう現状を鑑み、国内重点大学の大学院を振興させようとするねらいがみてとれる。

上海交通大学教務処と高等教育研究所の協力を得て、「連読班」学生（7名）へのインタビューを実施することができた（2007年9月13日：インタビューは近田政博）。これによると、通常の年間授業料は6,500元程度（約91,000円）だが、「連読班」に選ばれると若干減額され、5,500元（約77,000円）程度になる。学生寮に入る場合は授業料に加えて、毎月の生活費は600元（約8,400円）程度必要である。学生のバックグラウンドについて尋ねたところ、「第一世代」（家族の中で自分が最初に高等教育を受けた学生）の学生は半数程度であった。インタビューはすべて英語で実施したが、学生の英語力に問題は感じられなかった。英語学習については小学校で正規の英語教育が始まる前に、幼少時から学習していたという学生が大多数であった。

「連読班」に選ばれるプロセスは、教員からの推薦を受けたのち、教務処の面接を受けたというケースが多かった。「連読班」では飛び級も認められるが、2つの授業で落第するとその資格を失う。授業内容は、通常のカリキュラムと比較して内容が高度であり、実験実習が多く組まれている。英語による専門科目の授業も行われている。進路については、米国などへの大学院留学および外資学系企業の人気が高い。ただし、自分の将来についてはあまり早いうちから専攻を決めるのではなく、クラブ活動の先輩学生や所属する学院・学系の先輩学生からのアドバイスを参考にしたいとの意見が多くみられた。

4-3 グリフィス大学（オーストラリア）のオナーズカレッジ

オーストラリアでは1990年代に連邦政府の高等教育予算の削減が実行され、高等教育の統制・調整の方法が従来の行政統制から市場統制へと移行してきた(杉本、2004)。こうした変化は、機関レベルの管理運営体制の変化と、高等教育の質保証を促した。具体的には、「オーストラリア大学質機構 (Australian Universities Quality Agency)」による5年周期の監査(機関評価)のほか、「オーストラリア学習教授審議会 (Australian Learning and Teaching Council)」による優れた学習・教授 (Learning and Teaching) の取り組みへの報奨、2006年に開始された「学習教授の成果に基づく資金配分(Learning and Teaching Performance Fund: 以下 LTPF)」等の成果に基づく一連の奨励政策が機関の高等教育マネジメントのあり方に与えている影響が大きい。とくに、すぐれた教授・学習の成果を示した機関に報奨金が与えられる LTPF は、「リテンション(保持)」や、卒業生の評価による「優れた教授(Good Teaching)」および「総合的満足度(Overall Satisfaction)」を指標として含んでいるため、各機関ではこれらのスコアを伸ばすために、根拠データに基

づく教授・学習活動の改善に余念がない(鳥居、2009a)。

歴史的に、オーストラリアの高等教育には英国文化が色濃く残っており、学士課程は3年制課程が標準で、修学期間(分野によっては4年以上)で240単位(credit points)を取得することによって学士学位(Bachelor)が授与される方式である。また、優等学位課程は、たとえば Bachelor of Arts with Honours の場合、標準の Bachelor of Arts の3年制に加えて1年間(フルタイム)ないし2年間(パートタイム)の修学において80単位の取得が条件となっている。すなわち、オーストラリアの大学における学士号の優等学位(Honours degree)は、通常の学士課程に特別の修学期間を上乗せして修得する形になっており、標準の学士よりも専門的な学習を修めた証として授与される仕組みになっている。しかしながら、近年、学位の国際通用性の向上を意図し、北米および欧州の学士課程教育の改革動向をみずえた学位プログラムの改革等に取り組む機関も登場してきている(鳥居、2009b)。

こうした改革動向の中、グリフィス大学(Griffith University)は2008年に国内で初めて、従来の優等学位の取得につながる専門領域別のプログラム(2頁のB型に該当)とは異なる形の「グリフィスオナーズカレッジ(Griffith Honours College、以下GHC)」を開始したことで注目される。同大学は、戦後の大学拡張期(1960~70年代)に設立された中堅の研究大学であり、高等教育の国際的な競争環境のもと、メルボルン大学やシドニー大学等のトップグループの大学とは異なった存在意義を追求している。

同大学には、38の研究センターおよび10の専門領域にわたる46の学科(school)等の部局がある。これらの部局が、268の学士課程プログラム、382の大学院課程プログラム、104の研究プログラムを提供している(データはいずれも2007年度)。クィーンズ州内に分散する5つのキャンパスは、ブリズベンからゴールドコーストまで、国内で成長速度の最も著しい地帯にある3つの都市にわたっている。122ヶ国以上からの37,000人を超える学生が学び、グリフィス大学は現在、学生数(student load)において豪州で9番目に大きな高等教育機関に成長している。教職員数は約3,500人(フルタイム相当)の規模である(2007年度)。

グリフィス大学の戦略計画「Strategic Plan:2009-1013」によれば、中核的な活動のひとつである学習・教授に関しては、「総合」「卓越」「独創」「成功」の4つの目標を掲げ、各々に対応する具体的な目標と指標を提示している。こうした機関の主要目標を達成するために、人(学生や教職員等)、財政、物理的施設・情報環境の領域別に支援戦略が組まれている。ことに、学生への支援戦略のひとつとして、GHCが位置付けられている。

GHCは、教育の質保証やリテンションの向上等を背景に、1. 成績優秀生をグリフィス大学での学修につなぎとめ、学位の取得を達成させる、2. 支援や付加的な利益の提供によって成績優秀生を援助する、3. 一般市民や中等教育機関、潜在的な志願者に対し、グリフィス大学が学術的な卓越を目指していることをアピールする、を目的としている。初年度の定員は140名であり、①成績優秀な初年次生(高校新卒者、非高校新卒者、留学生含む)、②グリフィス・コネクト・スカラシップの受給者、③サミュエル・グリフィス卿ス

カラシップの受給者からの応募が認められた。選考に際して、GHC を志願する学生は、1. 学業成績、2. 志望文書、3. 個人的資質（大学での学習への動機、キャリアの志向性、成功への意欲等）、4. リーダーシップと地域サービス、5. 応募者が大学にもたらし得る利益など、本人の持つ資質が多面的に検討される。

GHC が提供するプログラムは、高い目標設定、個別対応、協同、世界における経験、実践的スキル、大学コミュニティにおける幅広い認知、という 5 つの特色を有する。必修の活動として、GHC 学生限定のオリエンテーションや年次討論会への参加、助言指導教員との定期的な一対一の面談等が課されている。助言指導教員は、大学副学長(Deputy Vice Chancellor)が専門領域を考慮して選んだボランティアの教授らによって組織される。また、選択科目として、GHC 学生向けに開発された上級かつ学際的な少人数コース(「近代哲学の祖」:Modern Masters of Philosophy)、「プロジェクトと経営改革」:Project and Change Management 等)が提供される。なお、こうしたプログラムの恩恵を受ける GHC の学生は特別な費用を徴収されず、活動資金のほとんどはスポンサーからの出資を受けている。



写真4 郊外のブッシュを切り拓いたキャンパス（グリフィス大学）
オーストラリアで1960～70年代に創設された新大学は「ブッシュ・ユニバーシティ」と呼ばれる

グリフィス大学のGHCは、クィーンズランド州内に広く分散する5つのキャンパスという固有の物理的条件の中で、独自の施設を持たないヴァーチャル・カレッジとして運営されている。ともすれば個別的配慮が行き届かない成績優秀生同士を人的ネットワークによって結びつけ、全学的な学習共同体を構築しようとする戦略を持つ。さらに、近隣に控える大規模な旗艦校であるクィーンズランド大学の存在を意識しつつ、独自の強みを発揮するため、成績優秀生の小集団を選抜的に組織し、よりきめ細やかな学習支援を提供することに努めている。GHCはそうした戦略を実現するためのひとつの「装置」と言える。

GHCの組織的な成果は、機関のKPI(Key Performance Indicator: 重点業績指標)の達成度や学生からのフィードバックの内容で測られている。たとえば、KPIのひとつである

リテンション目標値の 90%に対し、GHC は 99.28%の実績であった。また、全員参加の活動であるオリエンテーション、リーダーシップ開発プログラム、助言指導、年次討論会はほぼ 100%の参加率を達成している。また、国際的な体験を得た学生たちの声は肯定的である。しかしながら、スタートを切ったばかりの GHC には、カレッジ自体の発展的な持続可能性の追求や、協同的な学習共同体の形成、大学におけるリーダーシップの発揮等の課題がある。今後の GHC の活動の広がりや成果のフィードバックに待つところが大きい。成績優秀生と一般学生を交えた学習共同体の拡充がどのように図られるのかが問われよう。

4-4 3つの事例の比較

これまで考察してきたワシントン大学、上海交通大学、グリフィス大学における特別プログラムの特徴をまとめると次のようになる。

表2 オナーズプログラム事例の比較

	ワシントン大学	上海交通大学	グリフィス大学
所在地	アメリカ合衆国 ワシントン州	中華人民共和国 上海市	オーストラリア クィーンズランド州
特別プログラムの名称	オナーズプログラム	連読班	グリフィス・オナーズ・カレッジ(GHC)
規模	年間 300 人程度	年間 120 人程度	年間 140 人
発足年	1961 年	1995 年	2008 年
目標	世界水準の研究大学のメリットを享受しながら、小規模カレッジのコミュニティを体験できること	・ 特別に優秀な学生を選抜すること ・ マスプロ教育の弊害を改善すること	・ 成績優秀者をグリフィスにつなぎとめ、各種の支援・援助を行う ・ グリフィス大学が学術的な卓越性を持っていることを対外的にアピールする
アドミッションの方法	・ 小論文と推薦書 (高校の成績証明書は影響しない) ・ GPA3.3 を維持することが必要。	全国統一入試の成績優秀者や自主学生募集制度による合格者を対象に、教員の推薦により、教務処が面接	高校時の成績優秀者、各種奨学金の受給者を対象に、学業成績、志望文書、個人的資質などを総合評価
プログラムの内容	・ 専用の授業 (学際的な少人数授業) ・ 研究活動 ・ 地域奉仕活動 ・ 海外研修 ・ 専用の学生相談	・ 2 年修了時まで独自カリキュラム ・ 指導教員制 ・ 優秀教員による授業 ・ 著名教授のセミナー	・ 専用のオリエンテーション ・ 学際的な少人数授業 ・ 年次討論会への参加 ・ 指導教員の定期面談 ・ 国際体験

インセンティブ、プログラムの成果など	<ul style="list-style-type: none"> ・専用の学生宿舎 ・専用のサークル ・著名奨学金に採択される可能性 ・著名大学院への進学者が多い ・卒業証書に明記 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業料が割安 ・宿舎の優遇措置 ・図書の貸し出し条件が大学院生と同等 ・インターネット無料 ・大学院入試の免除 ・大学院の研究プロジェクトに参加 ・卒業証書に明記 ・海外の大学院進学や外資系企業への就職が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・重点業績指標による評価 ・GHC 学生のリテンション率は 99% ・学生からのフィードバック
隠された意図（仮説段階）	<ul style="list-style-type: none"> ・アイビーリーグと同水準の学生を確保できることをアピール ・著名奨学金の獲得、著名大学院への学生送り出しに有利 	<ul style="list-style-type: none"> ・優秀な学生を自大学の大学院課程にも一定程度、進学するように促進する 	<ul style="list-style-type: none"> ・近隣のクィーンズランド大学の存在を意識しつつ、独自の強みを創り出す ・分散するキャンパスにおける全学的な学習共同体の構築

本研究では、通常の学士課程期間内に行われる優秀学生向け特別プログラムに限定した調査を行った（表1のC型）。その結果、3つの事例において共通する特徴がいくつかみられた。第一にいずれの事例もこうした特別プログラムでは少人数制をとっているということである。このため、学業成績や志望動機、面接、推薦書などを考慮して一定の選抜を行っている。

第二に、専用の授業（少人数制で学際的・国際的なテーマのものが多い）、指導教員制、研究プロジェクト、特別セミナー、海外研修などが提供されている。さらに、学生宿舎への入居における優遇措置、学生相談、図書の貸し出し条件、卒業証書への明記などの各種インセンティブが与えられている。有名奨学金の採択や著名大学院への進学者も多く見られる。

第三に、仮説段階ではあるが、優秀な学生を確保することを明言しているこれらのプログラムにおいても、別途それぞれ隠された意図が存在すると思われる。それはワシントン大学の場合、アイビーリーグなどの名門私立大学に流出しがちな地元ワシントン州の最優秀層の学生をできるだけ確保したいという意向である。上海交通大学の場合は、最優秀層の学生は海外の著名大学院に進学するケースが通例であるため、彼らを一定程度、中国の大学院課程につなぎ止めて、国内重点大学の大学院課程を振興させたいとの意図が窺える（聞き取り調査より）。グリフィス大学の場合は、同じ州内にある伝統的な研究大学であるクィーンズランド大学の存在を意識しながら、グリフィス大学の卓越性を対外的にアピールする必要性に迫られている。このように、これらの事例における優秀学生用の特別プログラムは、それぞれの大学の戦略において一定の役割を担っているといえるだろう。

5. オナーズプログラムの存在意義と日本の大学への示唆

5-1 オナーズプログラムの存在意義および役割

以上で検討したように、大学側にとってのオナーズプログラムの存在意義は、成績優秀者が他大学に流出するのを防ぎ、一般市民や中等教育機関、潜在的な志願者に対して、大学が教育活動を重視していることをアピールできる点にある。とりわけ、大学の「大衆化」を迎えた国においては、多様な学士課程学生のリテンション向上の観点からも、大学の経営戦略における効果が見込まれよう。

ただし、本発表で挙げた大学は研究大学ではあるが、それぞれの国におけるトップ校とは必ずしもいえない。ワシントン大学はアイビーリーグなど私立の名門大学の大学院を意識し、上海交通大学の場合は北京大学や精華大学の存在があり、グリフィス大学の場合は近郊にあるクィーンズランド大学など、オーストラリアの伝統的な研究大学グループ(GO8)を意識している。これら準トップ校あるいは第2グループの大学にとって、最優秀層の学生を確保するための特別プログラムを提供し、彼らがトップ校と遜色ないアウトプット(名門大学院への進学、有名奨学金の採択など)をもたらしてくれることは、財政コストを抑えながら教育効果を高める上で一定の有効性を持ちうるかもしれない。つまり、オナーズプログラムは、「大衆化」した大学の中で優秀学生への教育をプログラム化することにより、当該機関の学士課程教育の質的側面のひとつである卓越性を高めるための「装置」になっているとみなせる。だからこそ、オナーズプログラムの存在は、すでにトップの地位にある大学ではなく、準トップの地位にある大学にとって、より大きな効果が期待できると考えられる。

ただし現時点では、優れた学生の学習意欲をさらに高める上で、オナーズプログラムが本当に効果的なのかどうかについては、調査対象大学では厳密に測定がなされていたわけではなかった。たとえば、グリフィス大学では、優秀学生からのフィードバック(満足度)など、プログラムの成果を間接的な指標で把握する取り組みは見られたものの、直接的に成果を測るような量的データの収集・分析は開発途上である。ワシントン大学では、オナーズプログラムの学生のGPAスコアや進学先のデータは把握されているが、それらが純粹にプログラムの教育効果によるものだと一概に断定できない。こうした学生は入学時点ですでに一般の学生よりも高い学業成績を示しているからである。根拠データに基づくオナーズプログラムの成果の挙証は今後の課題である。

本調査の対象大学はいずれも、学士課程全体における学習共同体づくりおよび総体としての質的向上に取り組んでいる。各大学とも、そうした中にオナーズプログラムによって構成される小集団をどのように位置づけるかという課題を抱えている点は共通している。

5-2 日本の学士課程教育の質的向上についての示唆

本発表で取り上げた 3 つのオナーズプログラムは、その形態や方法は一様ではないが、いずれも「大衆化」を迎えた大学における学士課程教育の質的向上の一翼を担う制度である。共通する特徴は、少人数制によるきめ細かい学習プロセスへの支援、および学生相互や教員との連帯感の醸成である。これは、大規模な総合大学においてすべての学生を対象に少人数の教育プログラムを作るのは至難であるため、人数を限定して理想的なプログラムを提供するという考え方に基づいている。こうした特徴は、スワスモア・カレッジの例でみたように、アメリカの教養大学(liberal arts college)の制度に類似する点が多い。その類似点とは、小規模な授業が多く設けられ、学生と大学教員との接触が頻繁に行われやすいということである(アメリカの教養大学については江原(2005)を参照)。オナーズプログラムは、こうした特徴を大規模大学において部分的に再現しようとする取り組みであると言えるだろう。

他方、本調査において印象的だったのは、オナーズプログラムが多様な教育・学習機能(授業、研究プロジェクト、海外研修、地域奉仕活動など)を提供する一方で、その実状は奨学金獲得や著名大学院に進学する上での有利なキャリアパスになっているという事実である。実際、こうしたオナーズプログラムが備える学士課程教育後の進路を見越した選抜機能の方が、本来の教育機能よりも意義が大きいことを認めている大学も存在する。優秀学生たちがより有利なキャリアに進むという「成果」に、オナーズプログラムの教育機能がどれほど直接的に作用しているのかを判別するのは容易ではない。学士課程のプロセスにおいて、オナーズプログラムの教育機能が果たす役割・効果を考えることは、学士課程教育の質を議論する上で重要かつ挑戦的な課題である。

日本の大学では、これまで同一機関における「優秀者のための特別プログラム」というコンセプトはほとんど普及してこなかった。その背景には、すでに入学試験という選抜を受けた以上、同じ授業料を支払うのに受けられる教育サービスに差をつけるのは公平性・平等性に欠くという社会通念が存在するように思われる。こうした通念は、かつてスワスモア・カレッジでオナーズプログラムを率いたアイデロツテの理念—学生の多様性を認め、個々の能力が最大限伸びるような教育を行うことが真の意味で平等な教育(democratic education)—とは相反するものである¹。もし優秀学生のためのプログラムを日本の大学に導入しようとするなら、こうした機会均等の原則と能力主義的な人材育成の考え方を理念面および実践面でいかに両立させていくかが課題となるだろう。

¹ 一方で、学士課程における卓越性の追求を考える上で、アメリカは優れた才能を有する幼児・児童、生徒に対する「才能教育」(gifted and talented education)をリードしてきた国であることにも留意が必要だろう。才能教育の国際的動向については、杉本(2005)を参照。

主な参考文献およびサイト

(日本語文献は著者のアイウエオ順、英語文献は著者のアルファベット順、中国語文献は日本語読みのアイウエオ順)

【イギリスにおけるオナーズ学位とアメリカへの伝播について】

潮木守一 (2004) 『世界の大学危機－新しい大学像を求めて』 中公新書

小泉一太郎 (2007) 『一九世紀オックスフォード大学の教育と学問』 近代文芸社

安原義仁 (2005) 「イギリスの大学における学士学位の構造と内容－近代オックスフォードの古典優等学士学位を中心に－」 『高等教育研究第8集』 95-120 頁

吉川祐美子 (2001) 「イギリス高等教育の学位統一の動き－高等教育資格枠組み導入の背景、概要、展望」 『大学評価・学位授与機構 研究紀要』 第14号、29-54 頁

Aydelotte, F. (1944) *Breaking the Academic Lock Step – The Development of Honors Work in American Colleges and Universities* – London: Oxford University Press.

Commission of Inquiry (1997) *Commission of Inquiry Report*. Oxford: University of Oxford.

Curthoys, M.C. (1997) “The Examination System”, in Brock, M.G. and Curthoys, M.C. eds. *The History of the University of Oxford – Volume VI Nineteenth-Century Oxford*, Part I. Oxford: Clarendon Press.

Elton, L. (2004) “Should classification of the UK honours degree have a future?” *Assessment & Evaluation in Higher Education*, Vol. 29, No.4, pp.415-422.

Palfreyman, D. (ed.) (2001) *The Oxford Tutorial: “Thanks, you taught me how to think”*. Oxford: Oxford Centre for Higher Education Policy Studies.

Swarthmore College, Honors Program

<http://www.swarthmore.edu/x5242.xml> (2009年5月12日)

Swarthmore College, Honors Handbook 2008-09

<http://www.swarthmore.edu/Documents/academics/HonorsHandbook2008-09.pdf>
(2009年5月12日)

【ワシントン大学の事例】

Undergraduate Academic Affairs, University of Washington, *University Honors Program, The Pursuit of Discovery: 2005-06 Annual Report*. (紹介パンフレット)

UW Honors Program, *Annual Report, 2003-2004, 2004-2005*. (年次レポート)

UW Honors Program, *International Engagement, 2007* (紹介リーフレット)

University of Washington, *Honors Program: Honors Admission Information, 2007* (紹介リーフレット)

University of Washington, Honors Program, *Honors Requirements for the College of Arts and Sciences*. (オナーズプログラムのカリキュラム一覧)

University of Washington, Honors Program

<http://depts.washington.edu/uwhonors/> (2009年5月1日)

【上海交通大学の事例】

大塚豊 (2007) 「市場経済移行期の大学入学者選抜－経済に揺り動かされる教育」『中国大学入試研究 変貌する国家の人材選抜』東信堂、186-241 頁

上海交通大学ホームページ：交大概況>統計資料

<http://www.sjtu.edu.cn/about/stats/> (2009年5月1日確認)

南部広孝 (2008) 『『自主学生募集』制度の概要について』南部広孝・楠山研『中国の大学入学者選抜における「自主招生」の現状 (資料編)』(平成19～21年度科学研究費補助金中間報告書)、1-9 頁、36-41 頁

『上海交通大学教育改革連読班教学管理方法 (草稿)』(中国語資料) 2007年6月

『上海交通大学高等教育研究所』(2007) (中国語・英語パンフレット)

文部科学省 (2007) 『諸外国の教育の動き 2006』、197-220 頁

『連読班概要』(中国語資料) 2007年3月

楊頡 (2006) 「世界一流大学の構築－上海交通大学の飛躍」『AC21 ベンチマーキング報告書(I): シドニー大学・ウオリック大学、上海交通大学の教育・研究』名古屋大学、2006年、49-68 頁

【グリフィス大学の事例】

About Griffith University

<http://www.griffith.edu.au/about-griffith/> (2009年5月1日)

Griffith Honours College

<http://www.griffith.edu.au/griffith-honours-college> (2009年5月1日)

Harris, K.L. and James, R. (2006) “The Course Experience Questionnaire, Graduate Destinations Survey and Learning and Teaching Performance Fund in Australian higher education”, *Public Policy for Academic Quality*, The University of North Carolina at Chapel Hill, 1-16.

Griffith Honours College (2008). “2008 Virtual Faculty Report”(内部資料)

杉本和弘 (2004) 「オーストラリア：高等教育の市場化と高まる国際的プレゼンス」馬越徹編『高等教育シリーズ 129 アジア・オセアニアの高等教育』玉川大学出版部、208-227 頁

鳥居朋子 (2009a) 「国際的な『アリーナ』に挑むオーストラリアの大学の IR」『Between』冬号、4-5 頁

鳥居朋子 (2009b) 「質保証の枠組みにおける豪州大学のインスティテューショナル・リサーチと教育改善－シドニー大学およびメルボルン大学の事例を通して」『大学評価・学位研究』第9号、43-61 頁。

【オナーズプログラム全般に関する文献】

- Berger, J. (2007) "Honors as a Transformative Experience: The Role of Liberal Arts Honors Programs in the Community Colleges", *Journal of College Admission*, Winter 2007, 28-32.
- Hébert, P. T and McBee, T. M. (2007) "The Impact of an Undergraduate Honors Program on Gifted University Students", *Gifted Child Quarterly*, vol. 51, no. 2, 136-151.
- Kiley, M., Moyers, T. and Clayton P. (2009) "To develop research skills: Honours programmes for the changing research agenda in Australian universities", *Innovation in Education and Teaching International*, vol.46, no.1, 15-25.
- Seifert, T.A., Pascarella, E. T., Colangelo, N. and Assouline, S. (2007) "The Effect of Honors Program Participation on Experiences of Good Practices and Learning Outcomes", *Journal of College Student Development*, vol. 48, no.1, 57-74.
- 江原武一 (2005) 「才能教育と大学教育－教養大学の効果を中心に」『児童・生徒の潜在的能力開発プログラムとカリキュラム分化に関する国際比較研究：江原武一教授退職記念論文集』京都大学大学院教育学研究科比較教育学研究、96-113 頁
- 杉本均 (2005) 「才能教育の国際的動向」『児童・生徒の潜在的能力開発プログラムとカリキュラム分化に関する国際比較研究：江原武一教授退職記念論文集』京都大学大学院教育学研究科比較教育学研究、1-29 頁
- 田中義郎 (2005) 「大学教育において卓越性と多様性の共存を目指すプログラムの開発－アメリカ大学におけるオナーズ・プログラムズの発展事例を中心として」広島大学高等教育研究開発センター『大学論集』第 35 号、333-347 頁

資料編

資料 学士課程教育の質的向上におけるオナーズプログラムの役割

第14回日本高等教育学会自由研究発表（2009年5月23日：長崎大学）

学士課程教育の質的向上における オナーズプログラムの役割

○近田政博(名古屋大学)
○鳥居朋子(立命館大学)
○佐藤万知(青山学院大学)
中島(渡利)夏子(東北大学大学院生)

1

本発表の目的

- 諸外国の大学の学士課程においてオナーズプログラムがどのような役割を果たしているかを検討し、日本の学士課程教育の質的向上にとっての示唆を得る

2

本発表の構成

- 今日の世界の大学において、「オナーズ」とは何を意味するのか
- オナーズプログラム発祥の地であるイギリスで「オナーズ」という概念が何を意味し、これがどのように外国（本発表ではアメリカ）へと伝播し、独自の発展を遂げたのか
- アメリカ合衆国、オーストラリア、中国の主要研究大学の学士課程においてオナーズプログラムが果たしている役割は何か
- 日本の大学が優秀学生向けのオナーズプログラムを導入することにどのような可能性と課題があるか

3

1. 「オナーズ」が意味するもの（仮説段階）

	A型	B型	C型
基本的な性質	成績優秀者に与えられる学位名称	優等学位課程	優秀学生向けの特別教育プログラム
普及している地域	イギリス	主に英連邦諸国（オーストラリア、カナダなど）	アメリカなど（世界各地にみられる）
履修年限	学士課程の年限内（イギリスでは通常3年制）	普通学士（3年）＋1年	学士課程の年限内（アメリカでは通常4年制）

4

本発表の焦点

- A型は管見の限りイギリスだけに存在する独特の制度
- B型は英連邦諸国（オーストラリア、カナダなど）で今なお機能しているが、制度改革や国際的な学位基準の統一化の中でその意義が再検討されつつある。
- そこで本発表では、「優秀学生に対する特別の学習支援プログラム」という趣旨から、上記のC型の事例を詳細に調べ、その存在意義と日本の大学への示唆について考察したい。

5

2. イギリスにおけるオナーズ学位とアメリカへの伝播（佐藤）



University of Oxford,
Examination School

6

調査の流れ

諸外国におけるオナーズプログラムの発祥の地はイギリス

イギリスにおけるオナーズとは単なる**学位の種類**
優秀学生を対象とした教育プログラムではない

イギリスの何が伝搬してオナーズプログラムという形式が
生まれたのか？
イギリスにおけるオナーズ学位を支える教育体制は？

着目

オックスフォード大学学士課程教育：イングランドにおける
優等・普通学位試験制度の原型
スワスマアカレッジ：オックスフォード大学学士課程教育を
モデルとしたオナーズプログラム設立

オックスフォード大学の特徴

大学の講義
(多人数教育)



カレッジの
チュートリアル
(少人数教育)

学位試験

(昔)口頭試験・優等・普通別試験→(現)筆記試験・共通試験

良い
成績

普通の
成績

優等学位(1・2上・2下級)

普通学位

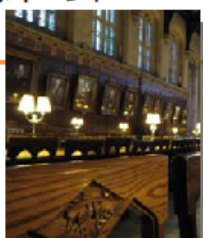
学位試験制度を根幹に位置づけた教育体制 ⁸

カレッジ概要

学生は39あるカレッジのひとつに必ず所属

生活の場

- 学生寮
- 食堂(1日3食)
- スポーツ施設・ラウンジ
- パソコンルーム(ITオフィサー在)
- クラブ活動
- 様々なイベント



ダイニングホール

教育の場

- さまざまな学問分野の教員・学生が所属
- 24時間利用できる図書館
- チューターによる週1度・1時間程度の指導
- カレッジにおけるセミナー・講演会・勉強会



カレッジの仲間



図書館

カレッジは24時間様々な形式の学びを支援する学習環境を整えている

チュートリアル

形式	1~3人の学生につき1人のチューター 週1回、1時間程度の指導
チューター	学生と同じカレッジに所属するフェロー(博士号をもった講師、教授など)
内容	あらかじめ与えられた課題について、2000~3000語のエッセイ提出(評価は成績には反映されない)エッセイをもとに、指導・議論 課題の内容は、学生の進捗状態によって決定 試験対策を視野に入れた課題

チューターと学生の関係



学生の学びを深めるためのチームメイト

特徴のまとめ

オックスフォード大学の学士課程教育

“個々の学生にあった教育の実践”

優秀な学生

より広範囲の課題・専門性の高い
課題の設定

↓
知的刺激を与える

通常の学生

学業以外に関心を持つ学生

一般的なレベルの課題・実用的な
課題の設定

↓
学生の目的に適した教育

チュートリアルによる少人数教育によって
可能な教育体制

優等学位という区分は学生の学習意欲を高め、またチューターの
指導力を高める仕掛けの役割

11

アメリカへの伝搬

ペンシルバニア州スワスマア・カレッジ

オックスフォード大学の教育制度を取り入れ、
独自のオナーズプログラムとして発展させた最初の事例
(安原 2005)

F.アイデロッテ

スワスマア・カレッジでオナーズプログラムを始めたカレッジ長
1905年～07年までローズ・スカラーとして、オックスフォード大学に
留学(オナーズ学位取得)

アイデロッテがどのような考えでスワスマア・カレッジの
オナーズプログラムを開発したかに着目

12

アイデロツテの考え(1920年代当時)

アメリカの大学教育:標準化

- ▶平均的な学生にレベルを合わせてデザイン
- ▶すべての学生が同じ授業を受け、同じ試験で評価

- ▶平均以下の学生→落ちこぼれる
- ▶優秀な学生→十分な知的刺激を受けることができない

オックスフォード大学の教育:差別化

- ▶それぞれの学生に対して個別教育
- ▶以前は異なる試験で異なる学位(優等・普通学位)

- ▶多様な学生が多様な活動
- ▶優秀・知的好奇心を持つ学生→より多くの知的刺激

真の意味で平等な教育とは、
学生の多様性を認め、
個々が最大限伸びるような教育

13

スワスマア・カレッジ オナーズプログラム

カレッジ概要

大学の種別	教養大学(Liberal Arts College):おもに学士号を授与する私立大学
位置づけ	ノーベル受賞者なども輩出している著名な教養大学 オナーズプログラムでも広く知られている
オナーズプログラム	1922年より開始

オナーズプログラム特徴(別名The External Examination Program)

1. カレッジ3年目から始める2年間プログラム
2. 2年目に外部試験官によって実施される口頭・筆記試験で評価
3. 優等学位はHonors、High Honors、Highest Honorsに区分
4. セミナー形式:週1回、8人以下の学生、3時間程度
5. セミナー以外にも、研究プロジェクト、海外研修、パフォーマンスアートなど
様々な学習方法を自身で自由に選択してオナーズ学位取得を目指す

オックスフォード大学を真似するのではなく、
スワスマア・カレッジに適したプログラムを開発

14

考察

オックスフォード大学の
何が伝搬して
スワスマア・カレッジの
オナーズプログラムという
形式が生まれたのか？

学生の多様性を認めた
教育体制

オックスフォード大学における
オナーズ学位を支える
教育体制とは？

チュートリアル(少人数教育)
カレッジ制度(学習環境)
学位試験制度(目標設定)

現状

3106名:2007年オックスフォード大学学士学位の授与総数
【内訳】809名:優等学位1級 1997名:2級上 259名:2級下 36名:3級
3名:普通学位→**ほとんどの学生が優等学位を取得**

今後の検討課題

現在のオックスフォード大学における優等学位の意義を再考
オックスフォード大学での傾向はアメリカにも伝搬しているのか

15

3. 諸外国の研究大学における オナーズプログラムの事例 (近田・鳥居)

16

3-1. ワシントン大学(UW)

- ワシントン州の旗艦大学
 - 州立の研究重点大学
 - シアトル市
- Times誌の世界大学ランキングで59位、国内24位(2008年)
- “Public ivy”の一つに数えられることが多い
- 学士課程:約25,000人
- 専任教員:3,600人
- 16のスクールおよびカレッジ



UWオナーズプログラムの アドミッションと規模

- 大学入学と同時に申し込む
- 小論文と推薦書を審査
- 高校時代の成績は考慮しない
- GPA3.3を維持することが必要
- オナーズ学生のSATスコアはアイビーリーグ校の新入生と遜色ない
- ワシントン州民82%
- 非マイノリティ61%、アジア系26%
- 毎年250~300人程度(全学生の5%程度)

18

UWオーナーズプログラムの目標

- 「(中略)世界水準の研究大学のメリットを享受しながら、小規模カレッジのコミュニティを体験することができます。」
(紹介パンフレットより)

19

UWオーナーズプログラムの内容

- 専用の授業
 - 学際的・国際的なテーマ
 - 議論や問題解決、論述を重視
 - 少人数制(30人程度)
- 研究活動
 - 海外での調査と発表
- 地域奉仕活動
- 海外研修
- 専用の宿舎、学生サークル、相談デスク
- 卒業証書に特記される

20

UWオーナーズプログラムの効用

- 少人数制により、教員との親密さが増す
- リーディングやライティングのスキルが高まる
- 著名奨学金を獲得するのに有利
- 著名大学院への進学者が多い
- 大学側にとっても、アイビーリーグと同水準の学生を確保し、良質の教育プログラムを提供していることの宣伝効果を期待できる

21

3-2. 上海交通大学

- 中国で二番目に古い歴史を持つ全国重点大学
- Times誌世界大学ランキングで144位、国内6位(2008年)
- 学士課程約20,000人
- 専任教員約3,000人
- 総合大学だが工学系が突出して大きい



22

上海交通大学「連読班」の アドミッション、規模、目標

- 全国統一入試の優秀者や「自主招生」制度（大学ごとの選抜入試）による合格者を対象
- 教員推薦や面接を経て選抜
- 年間120名程度
- 特別に優秀な学生を選抜する
- 学生の学習意欲と自発的な学習能力を高める
- マスプロ教育の弊害を改善する

23

上海交通大学「連読班」の内容

- 2年修了時まで独自カリキュラム
 - 高度な水準
 - 実験・実習が多い
 - 2年終了時までには特定の学院・学系に属さない
- 1年次から指導教員制をとる
- 学内の最優秀教員が授業を担当
- 著名教授による特別セミナー
- 宿舎入居や図書貸し出しにおける優遇
- 授業料の減額
- 卒業証書に特記される
- 要件を満たせば大学院入試を免除される
 - 大学院の研究プロジェクトへの参加など

24

上海交通大学「連読班」の効用

- 外国留学における優遇
- 国内外の著名大学院への進学に有利
 - 「連読班の学生は、外国留学、大学院の推薦入学、優秀学生の選抜、奨学金の獲得などにおいて、常に学内で最も競争力の高いグループとなっている」(連読班概要、2007年3月1日)
- 大学側の意向: 最優秀層の学生を大学院に進学させたい

25

3-3. グリフィス大学

- オーストラリア高等教育の現状
 - グローバルな競争的環境
 - 全豪レベルの高等教育の課題: 質保証、リテンションの向上
 - 「学習・教授の成果に基づく資金配分」政策
 - 優等学位取得: 学士課程(3年)+1年
 - 2008年~全豪初のオナーズカレッジ: グリフィスオナーズカレッジ(GHC)

26

グリフィス大学の特色

- 戦後大学拡張期(1960～70s)設立の中堅研究大学
- トップの伝統大学を視野に、独自の存在意義を追求している「第2グループ」
- 環境科学領域等に秀で、進取の気風が強い
- 学士課程:約37,000人
- 教職員:約3,500人(フルタイム相当)
- 5キャンパス、46のスクール、38の研究センター



GHCの位置付けと目的

- 大学の戦略計画(学習・教授)における学生への支援戦略のひとつ
- 目的:優秀生のリテンション、学位取得の達成、一般市民や中等教育機関および志願者へのアピール
- 選考:学業成績、志望文書、個人的資質、リーダーシップ、大学にもたらし得る利益
- 140名定員(初年度)
- 参加費は無料(スポンサーによる提供)

プログラムおよび運営の特質

- 特色: 高い目標設定、個別対応、協同、国際経験、実践的スキル、大学コミュニティでの幅広い認知
 - 必修: 限定オリエンテーション、年次討論会、助言指導教員との定期的面談
 - 選択: 特別に開発された上級の学際的な少人数コース
- 運営: 「ヴァーチャル・カレッジ」
 - 人的ネットワークによって学習共同体を構築
- クィーンズランド大学を意識し、独自の強みを発揮するため、優秀生の小集団を選抜的に組織、きめ細やかな学習支援を提供

29

GHC初年度の成果と課題

- 大学の重要業績指標に照らした評価
 - リテンション: 99.28% (目標値90%)
 - オリエンテーション、リーダーシップ開発プログラム、助言指導、年次討論会の参加率: ほぼ100%
 - 優秀生からのフィードバック: 高い満足感
- 今後の課題
 - 発展的な持続可能性の追求、協同的な学習共同体の形成、大学におけるリーダーシップの発揮
 - 優秀生と一般学生を交えた学習共同体の拡充

30

3-4. 3つの事例の比較①

	ワシントン大学	上海交通大学	グリフィス大学
所在地	アメリカ合衆国 ワシントン州	中華人民共和国 上海市	オーストラリア クィーンズランド州
特別プログラムの名称	オナーズプログラム	連続班	グリフィス・オナーズ・カレッジ(GHC)
〃 規模	年間300人程度	年間120人程度	140人(開始年度)
〃 発足年	1961年	1995年	2008年
〃 目標	世界水準の研究大学の メリットを享受しながら、 小規模カレッジのコミュ ニティを体験できること	・特別に優秀な学生を選 抜すること ・マスプロ教育の弊害を 改善すること	・成績優秀者をグリフィ スにつなぎとめ、各種 の支援・援助を行う ・グリフィス大学が学術 的な卓越性を持っている ことを対外的にア ピールする
アドミッションの方法	・小論文と推薦書 (高校の成績証明書は 影響しない) ・GPA3.3の維持が必要	全国統一入試の成績優 秀者や自主学生募集制 度による合格者を対象に、 教員の推薦により、教務 処が面接	高校時の成績優秀者、 各種奨学金の受給者 を対象に、学業成績、 志望文書、個人的資質 など総合評価 <small>31</small>

3-4. 3つの事例の比較②

	ワシントン大学	上海交通大学	グリフィス大学
プログラムの内容	・専用の授業(学際的な少人数授業) ・研究活動 ・地域奉仕活動 ・海外研修 ・専用の学生相談	・2年修了時まで独自カリキュラム ・指導教員制 ・優秀教員による授業 ・著名教授のセミナー	・専用のオリエンテーション ・学際的な少人数授業 ・年次討論会への参加 ・指導教員との定期面談
インセンティブ、プログラムの成果など	・専用の学生宿舎 ・専用のサークル ・著名奨学金に採択される可能性 ・著名大学院への進学者が多い ・卒業証書に明記	・授業料が割安 ・宿舎の優遇措置 ・図書館の貸し出し条件が大学院生と同等 ・インターネット無料 ・大学院入試の免除 ・大学院の研究プロジェクトに参加 ・卒業証書に明記 ・海外の大学院進学や外資系企業への就職が多い	・GHC学生のリテンション率は99% ・業績指標に基づく評価 ・学生からのフィードバック
隠された意図(仮説段階)	・アイビーリーグと同水準の学生を確保できることをアピール ・著名奨学金の獲得、著名大学院への学生送り出しに有利	・優秀な学生の一定数が、自大学の大学院にも進学するように促進する	・近隣のクィーンズランド大の存在を意識しつつ、独自の強みを創り出す ・分散するキャンパスにおける全学的な学習共同体の構築 <small>32</small>

4. オナーズプログラムの存在意義と日本の大学への示唆(近田)

33

4-1. オナーズプログラムの存在意義および役割

- 成績優秀者の確保
- 大学が教育活動を重視していること、教育の卓越性を高める努力をしていることを対外的にアピール
- 特に準トップ層に位置づけられる大学にとって大きな効果を期待できる
 - トップ校と同水準の学生を確保する
 - 限られたコストで良質なプログラムを提供
 - トップ校と同水準のアウトカム(大学院進学、奨学金の採択など)

34

4-1. オナーズプログラムの 存在意義および役割

- さまざまな成果指標
 - 学生からのフィードバック、満足度調査
 - GPAスコア
 - 進学先の大学院
 - 採択された奨学金
- プログラムの効果測定は容易でない
 - 入学時点ですでに一般の学生よりも高い学業成績を示している
 - 「教育装置」であると同時に「選抜装置」でもある

35

4-2. 日本の学士課程教育の 質的向上にとっての示唆

- **学士課程における「学習共同体」の形成**
 - 少人数制によるきめ細かい学習支援
 - オナーズプログラムは大規模大学においてリベラルアーツカレッジの良さを限定的に再現する試み
- **真の意味で、「平等な教育」とは何か？**
 - 学生の多様性を認め、個々の能力が最大限伸びるような教育(アイデロツテ)
 - 同じ授業料を払う以上、同じ教育を受ける権利があるとする考え方
- **能力主義と機会均等の原則をどう両立するか**

36

資料 オナーズ教育の概要

「全米大学オナーズ協議会」

(National Collegiate Honors Council: NCHC)のホームページから抜粋・翻訳

<http://www.nchchonors.org/index.shtml> (2010年1月19日)

オナーズ教育 (Honors Teaching)

一般に、オナーズプログラム (Honors program)、オナーズ大学教育 (Honors college) には、「高い学究的動機を持った学生をして、個人として社会責任を果たしうる最高度の能力を養わせるような挑戦的なプログラムを提供する」という使命が課されている。各々のオナーズプログラムあるいはオナーズ授業 (Honors course) は、それぞれ独自性を持ってはいるが、全てのオナーズ授業において、参加学生に批判的思考能力を付けさせることが期待されている。また、多くの授業において、批判的読書法および効果的筆記法の習得に重点が置かれている。

オナーズ教育課程では、各学生に対して、独立学習、学生主導型研究、あるいは海外研修などの学習活動に積極的に参加することが推奨されている。また、通常教育課程の範疇に含まれないような、現地調査、セミナー、短期集中コース、あるいはインターンシップなどの、意欲の高い学習者を意識した特別なコースを選択することも推奨されている。

オナーズプログラムに参加する学生の多くは、高い動機を持つだけでなく、物事を成就する事に対する非常に高い意識を持つ学生によって占められている。種々の着想、クラスでの議論、および問題解決に対する情熱には目を見張るものがある。発想がユニークであり、かつ斬新である。敢えて困難に立ち向かい、問題解決に対する徹底追求も辞さない。他の学生よりも積極的にキャンパス活動に関わる事が多い。

オナーズ授業では、読み・書きの両方に重点が置かれている。それ故、非常に幅広い分野にわたった長短併せたレポート作成が数多く要求される。例えば、正式な書法に則った分析的エッセイ (5から8ページ程度)、文献解析・統合論文や研究論文 (10から20ページ程度)、書物の紹介・特定の科学理論や概念の紹介・論文紹介・授業中の論述試験、または簡単な報告書 (1から3ページ程度のレポートで、学生が提案した特定のトピックスのレポート、特定の課題の回答、指導教官から出された課題の回答など)、さらには、上記文書

の改訂作業などが要求される。その他、少人数グループによる課題遂行や記事作成、口頭発表、および社会奉仕活動などがクラスの課題として割り当てられる。

オナーズ授業のアドバイザーは、各学生の文章を評価し、文章構造（文法、綴り、句読点）、分析内容および論理構成、表現方法（文章の構造、用語選択）、論文構成、効果的なイントロダクション、段落の組み立て、参考文献の取り扱い、特定の分野（文学研究、歴史研究、科学研究・報告書、映画レビュー、美術研究など）における表現技法、などの技術を磨くことを指導する。

オナーズコースの学生はクラスにおいて非常に活発である。自らの考えを積極的に発言し、他の学生の考えには批判的に対応する。それ故、議論の質と内容が成功のカギを握っている。アドバイザーの多くは、意見交換がスムーズに進むようにするために以下のような方法を使って議論を進めている。例えば、アドバイザー主導によるソクラテス式問答法（call and response）、学生主導による自由議論、特定の主題に焦点を絞った少人数グループ毎の議論、読書教材に基づいて学生が作成した質問・トピックスのリストから予め選んでおいた話題に関する計画的ディベートおよび学生主導による議論進行、などである。

オナーズコースの学生は口が勝りすぎる場合があるので、発言機会の共有や話し手に対する尊重などの、コミュニケーションの基本に関する指針を提示しておくのが有効であろう。授業外活動としては、他分野の講義や映画上映会などの幅広いキャンパス活動への参加が奨励されている。アドバイザーに対しては、カリキュラム外の活動を授業プランに盛り込んだり、または学生に追加単位として学内の他分野の講義や活動へ参加させたりすることが奨励されている。

アドバイザーとの授業外の付き合いや活動を求める学生も多い。学生を自宅に招いてのピザ・パーティなどのカジュアルなイベントを催したり、講義室以外の場所において授業に関する課題を議論する機会を設けたりすることが奨励されている。

授業計画の一環としてオフィス相談（office conference）が設けられている場合が多いので、小論課題、草案作成、研究に関して指導教官との相談を望む生徒はその機会を大いに利用することができる。

オナーズコースの学生には、学期の始まりなどの早い時期に高い目標を与えることが重要である。学期内あるいはオナーズ授業に発生する問題は、往々にして最初に目標を明確化していなかったことにその原因が帰せられる。オナーズ授業の開始にあたり、オナーズ授業というものが、非常に多岐に渡り、かつ高度な集中力を要することを、最初に学生に徹底させておくことが重要である。具体的には、学習経験の質を最大限高めるために、批判

的思考法、分析的文書作成法、注意深い読書法、説得力のある話術、集中傾聴などの能力を磨き高めることに多くの時間を割くことを周知徹底させておくことが重要である。学生は、全身全霊を傾けて授業に参加することが要求されている。

オナーズ授業の設計 (Designing an Honors Course)

オナーズ授業 (Honors course) は、授業毎にアドバイザーも違えば、内容も異なるが、共通する部分も多い。以下に役に立つと思われるガイドラインをまとめる。あるオナーズ授業のアドバイザーの言葉を借りれば、「最高のアドバイザーとは、教えることと学ぶことの両方に対する責任を、学生と共有できる者である」。オナーズプログラムの成功の秘訣は、学生の知性にあるのでもなければ、コースの主題にあるのでもない。それは、アドバイザーの姿勢と取り組み方にあるのである。

目的

以下の5つがオナーズ授業共通の目的である（これらに修正が加えられる場合もある）：

1. 効果的な文書によるコミュニケーション能力の育成 (身につけた情報やアイデアを効果的に応用する能力を含む)
2. 効果的な口頭によるコミュニケーション能力の育成 (学生の中には話すことに不安を感じている者もいることを念頭に置いておくこと)
3. 幅広い教材を分析し統合する能力の育成
4. 学者が、いかに問題に取り組み、仮説を立て、問題を究明し、結論をまとめるかと言う学究態度への理解を深めさせる。また、創造的な芸術家が、いかに創作作業に取り組み、独創的な作品を生み出すのかと言う創作態度への理解を深めさせる。
5. 自分の思考が、自分自身、第三者、あるいは社会に対してどのような影響を及ぼすかを念頭におきながら、独自の立場から批判的に思考できるようにさせる。

以下では、この5つの目的を個別に考察する。

文書によるコミュニケーション能力の育成

議論と文書作成作業は、オナーズ授業における最も重要な活動である。学生は、自分のアイデアを表現するために、授業の内外における文筆作業を通して優れた書き手になることが求められている（目的1）。それ故、オナーズ授業においては、多岐選択式試験ではなく論文とエッセイの作成に重点が置かれると共に、積極的な情報収集や講義への参加を通して身につく活発な学習態度の習得にも重点が置かれる。

学生の文書によるコミュニケーション能力の育成に対するオナーズプログラムの教授陣のサポート体制は、授業理念、および個々のアドバイザーの持つ教育および学習に対する認識に大いに依存している。アドバイザーは、これまで通りの文書作成課題を通して学生の著述能力を高めることもできるが、それ以外にも、日記、創作的著述（小説、ドラマ、詩など）、報告書、批評、レビュー、クラス内著述課題、あるいは課題を議論するためのきっかけとしての文書の利用などを通して学生を指導することもできる。（実際、この最後の方法が議論を活気づけるのに大いに役立っている。学生が予め自分で書いた内容を基に議論を進めることにより、自らのアイデアを皆と共有することに熱心になり、その場の思いつきで話すようなことが減るのである。）

口頭によるコミュニケーション能力の育成

学生は、議論への参加、あるいは議論を主導することを通して、より良い話し手になることが求められている（目的2）。それ故、オナーズ授業においては、講義よりも議論重視で授業を進める。数日前に与えられた課題に対して、学生が予め自分の考えをまとめた文書を用意して当日の議論に望むことが最も効果的である。アドバイザーは、議論の役に立つと思われる背景情報を提供することにより、議論を通して他のアイデアへの発展を促すこともできる。

専門家の研究業績を分析、統合、理解する能力の育成

学生は、与えられた一次資料を読み解き、拙速・皮相的ではない方法でじっくりと問題の真相を解明し、そして学習した多くの方法論に注意深く寄って立つことにより、広範囲にわたるアイデアを考察する能力を培い（目的3）、学者や芸術家がいかに専門分野の活動を遂行しているかを理解する能力を身につける（目的4）ことが求められている。それ故、オナーズ授業においては、人類のすべての知的活動に共通する問題提起法および方法論を学生に提供することにより、現実の世界において問題がいかに究明されているか、広い社会において知的活動がいかに遂行されているのかを、具体的に理解させることに重点が置かれる。

一次資料は、他人の解釈に依存せずに自分自身の独自の解釈を発展させるために、学生によって使用されるべきである。総合的にアイデアを統合する機会を与えるという意味で、領域横断的な読書がとりわけ重要になる。しかしながら、一次資料は必ずしも出版物あるいは原著文献である必要はない。例えば、学生の経験、調査やアンケート、美術・音楽作品、映画、ビデオなどの題材でも良い。重要なのは、一次資料が学生にとって課題に取り組みきっかけとなることである。

問題の真相究明にあたっては、通常よりも題材が絞られることもあり得る。大抵の場合、題材の多さよりもいかにその題材を扱うかが重要である。学生は、題材を分析し統合する訓練を積むだけでなく、個々の問題から推測される広範囲に及ぶ影響にまで注意を払う習慣を身につける事が求められている。このようにして、学生は学習したことを他の状況において応用することができるようになる。

独自の立場から批判的に思考できる能力の育成

学生は、アドバイザーの指導の下、あくまでも自主的な活動を通して、自分自身の独自の考えに基づき批判力を備えた思索者になることが求められている（目的5）。それ故、オナーズ授業においては、自分自身で思索し、書き表し、結果を論文やプロジェクトという形で提出する機会（クラスメートとの共同作業も含まれる）が最大限に与えられる。また、学生に対して、継続的なフィードバックや激励を与えることも重要である。オナーズ授業においては、学生自身のアイデアを、そのアイデアの源、帰結、および原理を理解させることにより、種々雑多な社会状況に応用することができるように学生を指導することが求められている。

オナーズ授業においては、色々な観点・視点に対して開かれた授業環境を提供することが求められている。それは、学生にとって安心して知的冒険にトライできる環境、学生同士がお互いの人格を尊重し合うことを学ぶことのできる環境（必ずしもお互いのアイデアを尊重することは意味しない）、さらに、アイデアの短期的影響、長期的影響の両方をしっかりと考慮する訓練が受けられるような環境である。

学生は、問題への直接関与を通して能動的な学習者となることにより、実世界における知的・文化的生活をより活性化させるような姿勢や習慣を身につけることができる。また、それは実世界の政治的・社会的現実を理解する一助ともなる。

しかしながら、学生が実際の学習活動において真に能動的な参加者となるには、知的冒険を恐れない気概を持つ必要がある。それ故、オナーズ授業のアドバイザーは、自らが新たな教育法にトライする気概を持ち、学生からの挑戦を受け入れる広い心を持ち、自由議論を奨励しそれを必ず実り多いものにするように学生を主導することが要求されている。

オナーズ授業においては、学生の知性を高めるだけではなく、学生に対してコースが要求している責務を果たすと言う責任感を持たせることも必要である。オナーズの学生は平均的な学生に比べて聡明である。一知的懐疑心が強く、（通常）意欲も高い。かもしれないが、必ずしもクラスになじめるとは限らない。またクラスに対する理解が十分とも限らないし、またクラスに対する心構えができていても限らない。その点では、オナーズコ

ースの学生であっても、他の学生と同様に正しい学習習慣を身につけさせる必要がある。この点においては、オナーズコースの学生に多くを求めすぎることは適切ではない。結局、彼らも 18 歳から 21 歳の若者に過ぎないのである。さらに、オナーズ授業を計画するにあたり、オナーズ授業というものは、より多くの学業だけのためにより多くの学業を課しているのではなく、またより厳しい学業だけのためにより厳しい学業を課しているのではないことを、今一度心に留め置くことが肝要である。学業の量とその難易度は、あくまでも合理的な教育上の目的を表す一指標に過ぎない。

オナーズ論文とプロジェクトの進め方 (Honors Thesis and Project Direction)

オナーズ学生 (Honors student) は、聡明であり知的好奇心が高く、多くは文書記述能力も高い。オナーズ論文 (Honors thesis) あるいはオナーズプロジェクト (Honors project) を開始する頃には、ほとんどの学生の動機もかなり高まってきている。しかしながら、論文のような大がかりなプロジェクトを完遂したことが一度もない学生がほとんどである。論文を仕上げた学生は、大学生活において論文完遂ほど高い満足度を得られた経験—同時に最も恐れを覚えた経験—はない、と述べている。その恐れは以下のような理由に端を発している。自分はまだ論文を書くだけの準備ができていない、これほどの長期にわたる学業プロジェクトを想像できない、これまでに独自の研究や創造的な作業をした経験がない、これまでに教授と密接に活動した経験がない、これほど微に入り細を穿つような経験をしたことがない、これまで論文作成を真剣に考えたことがない、論文作成がいかに莫大な作業を必要としているかを知っている、論文作成に要する作業量が実際にどれほどに上るのかを想像だにできない、等々である。

さらに言えば、時間の割り振りをうまくこなし締め切りに間に合わせる学生もいれば、そうでない学生も多い。そうでない学生であっても、彼らのほとんどは、論文作成に対してどれほどの時間と労力が必要かは、実際に理解あるいは認識している。つまり、アドバイザーからの可能な限り最大限のサポートとガイダンスが必要なのである。学生は優れた課題遂行能力を持ってはいるものの、論文作成に向けての助言と激励が欠かせないと言える。

アドバイザーの中には、優秀な学生ならば、大学院生と同様、自分自身で題材を見出し、自分自身の研究方針を立て、自分自身の解析方法を工夫することにより、程度の差はあるものの学生の自助努力だけでオナーズ論文あるいはオナーズプロジェクトを完遂させることができると考えるアドバイザーもいる。しかしながら、現実問題、彼らは大学院生ではない。ミニ修士論文を完成させるだけの訓練も受けていない上に、その時間もない。オナーズ論文あるいはオナーズプロジェクトを計画し完遂させるには、アドバイザーからの多大の援助が必要である。学生とアドバイザーは、緊密に連携を取りながら研究あるいは創

造的な作業、そして論文作成を遂行する必要がある。論文作成は、学生とアドバイザーの間の継続的な共同作業であるべきである。

論文作成あるいはプロジェクト遂行を、すべての関係者にとって実り多いものにするのに役立つガイドラインを以下に示す：

1. 助けとなれ (Be Helpful)
2. 積極的であれ (Be Proactive)
3. 厳しくあれ (Be Demanding)
4. 協力的であれ (Be Collaborative)
5. 支えとなれ (Be Supportive)

これらのガイドラインはすべて、論文作成あるいはプロジェクト遂行の全期間にわたって役立つものではあるが、特定の期間において特定のガイドラインが特に効果的である場合が多いと思われる。それ故、最も必要とされる項目順に以下、解説を加える。

助けとなれ

論文作成プロセスの最初の段階において、学生はアイデアを見出し、論文のテーマを発展させることになる。しかしながら、例えば「犯罪の研究」のようなあまりに漠然としたテーマを選んだ場合、探求しきれないようなこともありえる。また、修士・博士論文としては素晴らしいテーマではあるが、学部学生の論文テーマあるいはプロジェクトとしてはその遂行が望めないようなテーマを選んでしまう学生もいるだろう。また、興味の対象ははっきりとしているのだが、その対象にいかにかアプローチするか分からない学生もいるかもしれない。さらには、現実的なアイデアが全く浮かばない学生もいるかもしれない。

(あるアドバイザーのコースを選択し興味を持ったことにより、そのアドバイザーに相談にのってもらいたかっただけかもしれない。)

この時点で、仮アドバイザーは「よろしい。一緒に頑張りましょう。何を勉強したいのかを考え、何かアイデアが浮かんだらまた来なさい。」と答えたくなるかもしれない。しかしながら、学生はこの成長期において多くの助けを必要としているのであるから、アドバイザーはこのように学生を突き放したくなる誘惑に打ち勝たねばならない。学生は、漠然とした興味を現実的なプロジェクトにするために助けを必要としている。また、検証可能な仮説を立てたり、現実的な課題を見出すための助言、さらにはその仮説や課題を具体的な研究計画に落とし込むために、アドバイザーの助けを必要としている。つまり学生は、文献に対する学生自身のレビュー、実際のプロジェクト、および計画の草案に対する助言(アドバイス、ガイダンス)を必要としているのである。なぜなら、学生にはそのような

経験がないからである。アドバイザーには、学生達と共に作業し、学生達のアイデアが素晴らしい学士論文に結実するよう、学生を導く責務がある。

積極的であれ

先にも述べたが、多忙なアドバイザーにとっては、学生に対して「何か見せるべきものができたら戻ってきなさい」と言いたくなる誘惑にかられるのは良くあることである。同時に、忙しい学生も、締め切りの特定されていないプロジェクトを往々にして後回しにしてしまいがちである。それ故、論文研究（学生にとって経験がほとんどなく、最も助けを必要としている）が、脇に追いやられてしまう傾向が強くなる。学生にとっては見せるべき成果がないので、次のアドバイザーとの面談アポを取ることもない。アドバイザーに会わないので、助言ももらえない。その結果、この悪循環が続いてしまうおそれがある。

学生達は、アドバイザーとの定期的な面談アポをとることが、日常的に論文研究に取り組むきっかけになることが多いと述べている。常日頃から定期的ミーティングにおいて果たすべき課題を与えられている学生は、論文も期限に間に合わせて完成させる確率が高い。学生自身の自由裁量に任せられてしまっている場合には、往々にして論文の事を気になけなくなり、論文提出を卒業後の夏あるいは秋学期にまで延ばしてしまう結果になることもある。このような経験は誰にとっても決して望ましいものではない。

学生は、その回のアドバイザーとの面談が済みオフィスを離れる前に、必ず次のアポを取らなければならないことになっているが、このアポ取りを忘れる学生もいる。それ故、アドバイザーは積極的に、一週間か二週間に一度の学生との定期アポをしっかりと確認しなければならない。学生が予め断りなしに約束の時間に現れなかった場合には、学生がアドバイザーに連絡し、次のアポを取る責任がある。（時間の管理、アドバイザーとの共同作業、および責任感を持つということを習得することも、論文研究の一環に含まれる）。学生が準備を怠った場合には、アドバイザーが次のアポを決め、学生には次回は必ず準備させてくることを徹底させる責務がある。このように、アドバイザーは積極的に学生指導に関わらねばならない。

厳しくあれ

上で述べた方法を続けた場合、学生を甘やかしてしまうことに繋がるおそれがある。特に学生が優秀で、アドバイザーが多忙な場合がそうである。「確かに、今回、仮説を立ててくると言ったことを覚えています。しかし本当に忙しかったのです。卒業までに必ず論文を仕上げてみせますよ」との言い訳を聞くことになるかもしれない。アドバイザーは寛大であるとともに厳しくあらねばならない。学生に対して定期アポを厳守することを徹底させなければならない。学生が同意した作業を必ず遂行することを学生に課さねばならない。

そして、学生の作業に対して高い質を求めなければならない。不注意、不完全、粗悪な文書に対しては、学生を厳しく諫めなければならない。たとえ、学生が最終的には必ず良いものに仕上げると強く主張したとしても、である。一般的に言って、今、正すべきことを正さないと、結局何時までも正されないとすることである。

同時に、これら学生はあくまでも大学院生ではなく、またこの論文は修士論文ではない、ということをアドバイザーは忘れてはならない。心に留めておくべきは、学生に対しては最高の学部学生研究を期待すると同時に、学生達がそのような研究遂行のためにアドバイザーを信頼した上で、助言、激励、実地訓練を求めてきているということである。

協力的であれ

学生は、オナーズ論文あるいはオナーズプロジェクトが、学生とアドバイザー達との共同作業であるということを最初に告げられる。学生は、ただ単に完成物をアドバイザーに提出し、「はい、この通り出来上がりました。評価をお願いします」とすることは出来ない、ということを理解しなければならない。アドバイザーが課題を与え、学生はその与えられた課題を遂行し、結果をアドバイザーに提出し、それを受けてアドバイザーが評価を下すのである。共同作業の具体例を示し、論文研究の各段階において学生と緊密に作業し、論文を学生とアドバイザーの共同作業にする、ということが論文アドバイザーの責務の一部である。

オナーズプログラム、オナーズ大学教育の中には、一人の学生に複数のアドバイザーが論文あるいはプロジェクトを担当する場合がある。このような場合、論文は複数のアドバイザーとの共同作業となる。アドバイザー達は、学生がアドバイザーの期待に応え、学生自身の学術的欲求を満たすことができるように、最善の努力をすることが求められている。透明性、公平性、完全性を確保するために、論文アドバイザー達は定期的に会合を持ち、お互いの記録を比較し、進捗状況を確認する作業を怠ってはいけない。

支えとなれ

オナーズ論文あるいはオナーズプロジェクトは長期にわたるプロジェクトであり、学生にとって往々にして退屈、時には不可解、押しつぶされそうになることも多く、常にストレスを感じることであろう。それ故、学生は、プロジェクトを途中で放棄したり、自分には能力が欠けているのではと思ひこんだり、プロジェクトを完遂することなど不可能ではないかと考えたりしがちである。ここでアドバイザーのもう一つの責務、つまり叱咤激励、という責務が重要になってくる。アドバイザーも同じ道をたどってきたのであり、学生の気持ちが我が事のようにわかるはずである。ここで、学生に向かい「過去、同じようなチャレンジングなプロジェクトに挑んだ人間はすべからず君たちと同じ不安を抱えていたの

である。君たちはこのチャレンジングなプロジェクトをやり遂げるだけの能力を持っている」と激励するのがアドバイザーの責務である。オナーズ論文あるいはオナーズプロジェクトの学生は、他のコースの学生が決して感じないようなプレッシャーを感じるであろう。学生達の成功のためにも、落ち込んだ学生の意欲に再度火を付け、彼らが前途に光明を見いだせるようにしなければならない。

学生募集 (Recruitment)

現代社会では、溢れる情報、多岐にわたる選択肢、雑多な宣伝文句が、我々を簡単に圧倒してしまうような状況にある。そして、オナーズプログラム（オナーズ大学教育）は、まさにそのような状況のまっただ中に存在しているのである。今日、高校卒業を控えた生徒、特にテストで高得点を取り、学業成績の秀でた生徒に対して、勧誘の手紙、カレッジ紹介パンフレット、奨学金の確約、キャンパス訪問への招待状などが多数送りつけられる。オナーズプログラムでは、カレッジや大学への通常の入学プロセスに加えて、さらなる選定基準が設けられているので、多くの場合、オナーズプログラム、オナーズ大学教育への勧誘が重要になる。

オナーズ教育は通常の学部教育制度とは異なるものであり、入学を希望する学生や親は、その違いを明確にしてもらうことを希望（要求）している。オナーズへの入学を希望する生徒や親にとって、「何故、オナーズを選ぶのか」と言う問いは、「何故、特定のカレッジあるいは大学を選ぶのか」という問い同様に重要である。たいていの高校生はカレッジ・プログラムに対する一般的な理解度は高いものの、オナーズプログラムに対しては、情報不足あるいは誤解している点が多いようである。さらに言えば、優秀な生徒に、オナーズプログラムを提供しているカレッジ・大学そのものに興味を持ってもらうということが、オナーズプログラムの目的の一つであり、そのためにも効果的な勧誘が重要になってくる。

オナーズプログラムへの勧誘を成功させるための秘訣として以下の提案をする：

- オナーズプログラムの活動および参加学生を際立たせるようなカレッジ・大学紹介パンフレット。独自のオナーズプログラム紹介パンフレットを準備している場合もある。
- ウェブサイト情報。学生がカレッジ・大学を選ぶ際に、カレッジ・大学のウェブサイトやオナーズプログラムのウェブサイトの重要性が、ますます高まってきている。
The National Collegiate Honors Council (NCHC) のメンバーであることをウェブ上で明示し、NCHCのウェブサイト：www.nchchonors.org へのリンクを提供しておくのが良いであろう。

- オナーズプログラムに応募する資格を有する学生に、カレッジ・大学紹介のパンフレットなどの情報提供資料と一緒に、オナーズプログラムへの応募を奨励する手紙を送付する。
- オナーズプログラムへの入学が見込まれる学生に対して、カレッジ・大学キャンパス訪問プログラムを提供する。一般の訪問プログラムに組み込んでも良いし、またオナーズプログラム専用で独立した訪問プログラムを準備しても良い。キャンパス訪問プログラムの良い例を知りたいならば、体育学部代表者（athletic director）に尋ねるのが良いであろう（訳注：一般に体育学部はこの手の勧誘の経験が豊富である）。
- 具体的な学生の成功例の提示。具体的な成功例によって、オナーズプログラムがより身近なものになる。入試担当事務局、大学のウェブサイト担当、学長や大学事務官などが、オナーズプログラムで成功している学生の話や写真を切望している場合が多いということを忘れてはならない。
- 勧誘活動にオナーズプログラム学生を動員する。オナーズプログラムの学生自身が、その多様性からみても考え得る最高の広告塔となる。オナーズプログラムの学生は、入学が見込まれる学生に対して、自分の目線から話をすることができ、彼らと懸念を共有できるだけでなく、とりわけオナーズプログラムによってどのような学生になれるのかという最高のモデルを示すことができる。
- オナーズプログラムの特長を実例をもって説明できるような、特定の勧誘活動や資料。例えば、オナーズプログラム、オナーズ大学教育において、個人への配慮、個人の発展、アドバイザーとの密接な関係、およびくつろいだキャンパス環境などを強調することにより、入学が見込まれる学生に対する、個人的なコミュニケーションの機会、アドバイザーの熱心な態度表明、および非公式な諸活動などを、学生の勧誘活動に組み入れることができる。

オナーズプログラムの新入生向けオリエンテーション (Honors Orientation Programs)

オナーズプログラムの新入生向けオリエンテーション (Honors orientation program) の実施方法は一通りではないが、ここで言えることは、それは各々のオナーズプログラムの目標や特長を最大限に反映したオリエンテーションでなければならないということである。さらに言えば、オナーズプログラム、オナーズ大学教育の目的に応じて、その目的および特長を明確にすることが理想的である。調査によると、通常、学生は学業生活の最初の6週間以内に自分の大学内での帰属を決めると報告されている。それ故、高校生活から大学生活への移行をスムーズなものにするだけでなく、大学の中の最も優秀な学生を勧誘できるようなオリエンテーションが最も望ましい。

オナーズのオリエンテーションは、通常のオリエンテーションに先だって行っても良いし、大学全体のオリエンテーション活動に組み込んでも良い。現役のオナーズ学生を中心にオリエンテーションを行えば、オリエンテーションが新入生にとっても楽しく、希望に適い、有意義なものになるであろう。事務員やアドバイザー主導のオリエンテーションではなく、同年代の先輩学生によるオリエンテーションにより、参加者の緊張を解き、独創的な思考力を引き出し、リーダーシップを培う機会をもたらすであろう。さらに、オナーズ学生にオナーズプログラムに貢献する機会を与え、新入生にはオナーズ学生の成功例を見てもらうことができる。

種々の異なったオリエンテーション活動が考えられるが、一般的には、情報提供(information delivery)セッションと実地経験(active exercises)セッションを組み合わせる形式が最も効果的である。多くのオリエンテーション活動は、新入生に連帯感を持ってもらうことを目指している。そのようなオリエンテーション活動としては以下の様な活動があげられる。オナーズのピア・メンター(Honors peer mentor)から入学前に送られる自己紹介の手紙(summer letter)、先輩学生主導の討論会における読書経験の共有、学生や親との形式張らないミーティング、オナーズプログラムの方針を理解してもらうための簡単な授業、新入生に学生生活をより良く理解してもらうためのスカベンジャー・ハント(Scavenger Hunt) (訳注：Scavenger Hunt：一覧表にあるものを、お金をかけずに集めたり実行したりする競技。例えば、シカゴ大学のスカベンジャー・ハントは、学生がチームになって4日間にわたって行うもので、それぞれに重み付けがしてある300もの項目を実行したり集めたりする)、読書経験の共有活動において著された文書の評価、同級の新入生との気軽な食事会・活動などである。

オリエンテーション活動には、親向けの独立した活動も多い。これには、オナーズのアドバイザー達によるプレゼンテーション、オナーズ代表者および現役オナーズ学生（あるいは、オナーズプログラムを卒業した学生の親）との質疑応答セッション、大学職員との私的なミーティング、現地を熟知した職員や学生による大学周辺の町案内などの活動が含まれている。

編入生に対するオリエンテーションはより複雑になるが、編入生が求めていることや彼らの背景情報に注意を払い対応することも有意義なことである。

ピア・メンター制度(Peer Mentoring Programs)

オナーズプログラムでは、新入生（場合によっては編入生）が学業面でも社交面でもスムーズに大学生活に馴染めるためのサポートとして、ピア・メンター制度(peer mentoring

program)が提供されていることが多い。新入生は、入学後の最初の数週間から数ヶ月にかけて、学業面でも社交面でもそれまでとは全く異なる大学という世界に順応するのに苦労することがある。学生は、大学生生活で路頭に迷ったり、多方面にわたる学生生活に振り回されたり、教授達に威圧的を感じたり、授業の要求があまりに過大であると打ちのめされたりすることもある。アドバイザー、教授、さらには親をも含めて誰も、自分が大学生生活において直面している問題を理解してくれていないと感じる学生も多い。それ故、まさに同じ道をたどってきた経験者であるピア・メンターが信頼され、その指導システムが効果を上げるのである。

このピア・メンター制度は、個人を主体とした教育に重点を置き、クラスの内外において学生の教育活動への貢献に高い価値を求めているという点からも、オナーズプログラム共通の活動となっている。オナーズで開発されたピア・メンター制度および関連活動が、実際に多くの大学で採択されている。

オナーズピア・メンター制度は、特にアドバイザーが得意とする専門分野以外（重なる場合も多いが）の大学活動を公私両面にわたってカバーしている。ピア・メンターは、選ばれた経験豊富な学生であり、基本的な大学の情報、および大学生生活に対する個人的経験と理解を共有する能力を持っている。ピア・メンターが、自分が経験した問題点や、その問題を解決するために自らが見出した解決方法を新入生と共有することにより、新入生にとっての良い成功モデルとなりうる。ピア・メンターの前向きな態度、学生生活に対する確固たる理解、および個人的な経験などが、指導員よりも少しばかり若い新入生が大学生生活を順風満帆に送るにあたっての的確な導きとなる。

ピア・メンター制度の中には、指導員と新入生との一対一の間接関係を構築するモデルもあれば、一人か二人のピア・メンターが少人数の新入生グループを担当するモデルもある。また第三のモデルとして、オナーズアドバイザーの指導の下、ピア・メンターが正式のクラスを受け持つこともある（初年度プログラムの一環）。各々のモデルは幅広い問題をカバーする。例えば、ピア・メンターは、時間の管理方法、自らが見出した勉学に最善の場所・時間・取り組み方、学生寮生活の表と裏、新入生時代に経験した衝撃や戸惑いを共有することにより学業と社交生活で陥りやすい落とし穴の避け方の教授などをカバーする。オナーズ学生は、ピア・メンター制度の価値を良く理解しているので、ピア・メンターになることに積極的である。

資料 国際交流推進会議「アジア域内の大学間交流と東アジア共同体構想」 の趣旨とポスター

グローバル化の伸展とともに、今日、国際的な大学間連携や留学生・教員・研究者による交流が活発になっている。さらなる交流の拡大のためには、各国が優秀な国際的人材を育成していくことが前提となる。しかしながら、各国が国際的な大学間交流を有意義に推進していくためには、大学の質を保証する制度づくりが不可欠となる。それは、国際的に活躍する人材の学修成果が連携する大学間で正当に評価され認証されていなければ、大学間交流・連携は持続可能なものにならないからである。こうした点において、欧州ではエラスムス計画、ボローニャ宣言等による「欧州高等教育圏」の構築によって、域内の大学間交流の枠組みが整備されており、大学間交流・連携の枠組みづくりの先陣を切っていると言えよう。

アジア地域における大学間交流の促進に当たっても、アジアの大学や教育制度の多様性、大学間交流の東アジア地域協力への貢献可能性を考慮しながら、早急に質の保証を伴った大学間交流の枠組みを検討することが重要である。また、少人数制によるきめ細かい学習支援と学生相互や教員との連帯感の醸成によって、国際的視野とリーダーシップを備えた指導的人材を育成する特別プログラム(いわゆる「オナーズプログラム」: Honors Program)を設置するなどの取組による国際的人材の育成も重要である。

本年10月には、日中韓サミットが中国で、さらにASEAN+3首脳会談がタイでそれぞれ開催され、鳩山首相は、それらの首脳会談において日中韓三国及びASEAN諸国を中心とした東アジア地域における大学間交流の重要性を指摘し、その促進のため質の高い交流の実施に向けた有識者会議の設置や国際会議の開催を提案したところである。

このような状況を受け、名古屋大学においては、東アジア地域における指導的研究大学の副学長及び高等教育関係機関の幹部等を招聘し、「アジア域内の大学間交流と東アジア共同体構想」をテーマとして国際会議を開催する。本国際会議では、とりわけ、以下の点に焦点を合わせることとする。

- ①東アジアにおける大学間交流の促進方策、
- ②質保証の問題などの大学間交流における諸課題、
- ③オナーズプログラムなどを活用したアジア地域の将来を担う国際的人材育成

国際会議では、各報告者がそれぞれの学術機関においてのこれまでの知見や経験を披露し、問題提起を行い、包括的に討議することを目指す。また、産業界からも識者を招き、国際的にリーダーシップを発揮出来る人材像についても議論し、これからの東アジア地域における質の高い大学間交流の促進に資する提言をまとめる。

国際交流推進会議

アジア域内の大学間交流と 東アジア共同体構想

昨年開催された日韓サミットやASEAN+3首脳会談において、鳩山首相は、東アジア地域における大学間交流の重要性を提起し、質の高い交流の実施に向けた国際会議の開催を提案したところで。

国際的な大学間交流を有意義に推進していくためには、大学の質を保證する制度づくりが不可欠です。それは、学生の学修成果が大学間で正當に評価されていなければ、大学間交流は持続可能なものにはならないからです。欧州ではエラスムス計画、ポーロニヤ宣言等による「欧州高等教育圏」の構築によって、域内の大学間交流の枠組みが整備されています。

これらを踏まえ、名古屋大学では、アジアの発展の礎となる人材養成に貢献することを目的とし、「アジア域内の大学間交流と東アジア共同体構想」をテーマに議論し、国際的人材の育成に取り組みます。

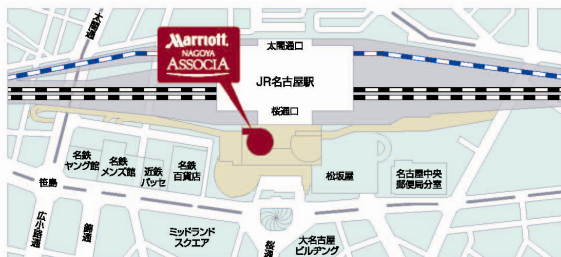
2010.3.7 日

9:00～17:50 参加無料

同時通訳：日本語・英語

会場 **名古屋マリオットアソシアホテル**
16F(アイリス)

主催 **名古屋大学** 後援 **文部科学省**



申込方法 住所、氏名、所属、電話番号、FAX番号を記入の上、下記あてにファックスまたはメールにてお申し込みください。
応募者多数の際にはお断りする場合があります。(定員100名)

お申し込み・お問い合わせは



名古屋大学 国際部国際企画課

TEL. (052) 789-2042 FAX. (052) 789-2045
E-mail: intl@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

プログラム(敬称略)

司会 中西 久枝 名古屋大学大学院国際開発研究科 教授

9:00～9:15 | 開会挨拶

宮田 隆司 名古屋大学 理事・副総長

清水 潔 文部科学審議官

9:15～10:35 | 基調講演

アジア地域における大学間交流の現状と課題

Gwang-Jo Kim ユネスコ・バンコク事務所長

名古屋大学における国際的人材育成について —世界に通ずる人材の育成と大学の国際化—

濱口 道成 名古屋大学 総長

11:00～12:45 | パネルセッション I

東アジアにおける大学間交流の促進方策について

パネリスト Supachai Yavaprabhas 東南アジア教育大臣機構高等教育開発センター 所長

馬 万華 北京大学教育学院 教授

Kiyong Byun 高麗大学教育学部 准教授

山本 忠通 ユネスコ日本政府代表部 大使

有信 陸弘 (株)東芝 顧問

モデレーター 北村 友人 名古屋大学大学院国際開発研究科 准教授

14:00～15:30 | パネルセッション II

大学間交流における諸課題について

—質保証の問題を中心に—

パネリスト John Taplin アデレード大学 副学長

Morshidi Sirat マレーシア科学大学高等教育研究所 所長

米澤 彰純 東北大学高等教育開発推進センター 准教授

モデレーター 二宮 皓 放送大学広島学習センター 所長・広島大学 名誉教授

16:00～17:30 | パネルセッション III

アジア地域の将来を担う国際人材像について

—オーナーズプログラムでどのような人材を育てるか—

パネリスト 楊 頌 上海交通大学高等教育研究院 副教授

M.R. Kalaya Tingsabath チュラロンコン大学 副学長

Gon Khang 慶熙大学電子情報学部 教授・国際交流如長

浅野 昭人 立命館大学キャリアセンター 次長

モデレーター 近田 政博 名古屋大学高等教育研究センター 准教授

17:30～17:50 | まとめ、閉会

渡辺 芳人 名古屋大学 副総長

18:15～19:30 | レセプション

平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金 基盤研究(B)

研究成果報告書

(課題番号 19402046)

研究大学の学士課程に適した優秀学生プログラムの開発に関する調査研究

研究代表者 近田 政博

(名古屋大学高等教育研究センター准教授)

chikada@cshe.nagoya-u.ac.jp

2010 年 3 月